

中津市所在

石 神 城 跡

濱 田 遺 跡

－都市計画道路外馬場錆矢堂線街路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（1）－

2023

大分県立埋蔵文化財センター

序 文

本書は、都市計画道路外馬場鎗矢堂線街路改良事業に伴い、大分県教育委員会が大分県土木建築部中津土木事務所の依頼を受けて実施した、石神城跡及び濱田遺跡の発掘調査報告書です。

石神城跡及び濱田遺跡は中津市中心市街地の東方、蛸瀬川右岸の沖積平地上に所在します。石神城跡は小畑四郎左衛門宗重の居城とも伝わりますが、城館に関する史料に乏しく、実態は不明となっていました。

発掘調査の結果、石神城跡では中世～近世にかけての土坑や溝・井戸等の遺構が、濱田遺跡からは近世の洪水砂層に被覆された中世の水田遺構が確認されました。石神城跡・濱田遺跡ともに遺跡の開始は13世紀代とみられ、石神城跡に拠った武士勢力により開発が進められた様子を窺い知ることができました。一方で、石神城跡の遺構は集落に伴うもので城館と関連付けられるものは確認されず、その点では課題を残しました。しかし、これまで謎に包まれていた遺跡に新たな知見を与えることができた意味は大きく、地域の歴史の解明にはこうした地道な調査研究の積み重ねが必要です。本書が、埋蔵文化財の保護と啓発とともに、学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、発掘調査の実施にあたり多大な御支援・御協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

令和5年3月31日

大分県立埋蔵文化財センター
所 長 松 本 昌 浩

例 言

1. 本書は令和2・3年度に実施した、大分県中津市大字牛神に所在する石神城跡及び濱田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は都市計画道路外馬場舘矢堂線街路改良事業に伴い、大分県土木建築部中津土木事務所の依頼を受けて大分県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 石神城跡・濱田遺跡の発掘調査期間及び調査担当者は下記のとおりである。
石神城跡 令和2年11月18日～令和3年2月2日 植田絃正（大分県立埋蔵文化財センター主事）
濱田遺跡 令和3年4月21日～6月11日 植田絃正・諸岡初音（大分県立埋蔵文化財センター主事）
4. 発掘調査の実施にあたり、発掘作業及び記録作成、現場管理等を支援業務として民間調査組織に委託した。発掘調査における実測図の作成及び写真撮影は上記調査員の指示のもと下記の支援業務受託者が行った。
・石神城跡 有限会社九州文化財リサーチ（調査技師 堤 真子・調査助手 清尾美喜）
・濱田遺跡 株式会社島田組大分営業所（調査技師 宮下貴浩、調査助手 藤 謙太郎、坂本大海）
5. 出土品の洗浄、注記、接合、実測、写真撮影、トレース等の整理作業は令和3・4年度に株式会社九州文化財総合研究所に委託して実施した他、石神城跡の遺物実測・写真撮影の一部は横澤が行った。遺構・遺物図版の作成は横澤が行った。
6. 石神城跡から出土した木製品・金属製品の保存処理は大分県立歴史博物館学芸員の荻山琴美氏に依頼して実施した。
7. 出土遺物及び調査記録は大分県立埋蔵文化財センター（大分市牧緑町1番61号）で保管している。
8. 本書で使用する方位は座標北で、座標値は世界測地系の数値である。
9. 本書で使用する遺構略号は下記のとおりである。
SK（土坑）、SD（溝）、SE（井戸）、SP（柱穴）、SX（性格不明遺構）、SL（水田畦畔）、SN（水田）
10. 調査区の土層及び各遺構埋土の土色は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳』（1997年度版）を参照した。
11. 濱田遺跡のプラントオパール分析はバリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施し、第5章にその分析結果を掲載した。
12. 本書の執筆・編集は横澤が行った。

目次

例言

第1章 調査に至る経緯と発掘調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 本発掘調査の経過	2
第3節 整理作業・報告書作成の経過	2
第4節 調査組織の構成	2
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 石神城跡の発掘調査	6
第1節 発掘調査の方法	6
第2節 1区の調査	6
第3節 2区の調査	30
第4節 3区の調査	44
第5節 小結	57
第4章 濱田遺跡の調査	61
第1節 発掘調査の方法	61
第2節 1区の調査	61
第3節 2区の調査	63
第4節 3区の調査	64
第5節 4区の調査	67
第6節 小結	71
第5章 中津市濱田遺跡の植物珪酸体分析	77
第6章 総括	84
第1節 土地利用からみた石神城跡と濱田遺跡	84
第2節 石神城跡と濱田遺跡の関連性	84

挿図目次

第1図	都市計画道路外馬場路交差線の計画概要図 (1/25,000)	1	第49図	SK2006 実測図 (1/30)	36
第2図	石神城跡・濱田道路と周辺の道路 (国土地理院発行2万5000分の1集積「中津」に加算)	5	第51図	SD2008 実測図 (1/30)	37
第3図	石神城跡の調査位置図 (1/2500)	6	第52図	SD2008 出土遺物実測図 (1/3)	37
第4図	石神城跡の調査区全体平面図 (1/400)	7	第53図	SE2010 実測図 (1/30)	38
第5図	石神城跡1区平面図 (1/150)	8	第54図	SE2010 出土遺物実測図① (1/4)	39
第6図	石神城跡1区土層断面 (1/60)	9	第55図	SE2010 出土遺物実測図② (1/4)	40
第7図	SK1003 実測図 (1/30)	10	第56図	SE2010 出土遺物実測図③ (1/3)	41
第8図	SK1003 出土遺物実測図① (1/3)	11	第57図	2区柱穴遺構実測図 (1/20)	41
第9図	SK1003 出土遺物実測図② (1/3・1/2)	12	第58図	2区柱穴遺構出土遺物実測図 (1/3)	42
第10図	SK1005 実測図 (1/30)	13	第59図	2区出土遺物実測図 (1/3)	42
第11図	SK1020 実測図 (1/30)	13	第60図	3区土層断面 (1/150)	43
第12図	SK1020 出土遺物実測図 (1/3)	13	第61図	3区土層断面 (1/60)	44
第13図	SK1022 実測図 (1/30)	14	第62図	SK3002 実測図 (1/30)	44
第14図	SK1022 出土遺物実測図 (1/3・1/1)	15	第63図	SK3002 出土遺物実測図 (1/3)	44
第15図	SK1030 実測図 (1/30)	16	第64図	SK3003 実測図 (1/3)	45
第16図	SK1023 出土遺物実測図 (1/3)	16	第66図	SK3005 実測図 (1/30)	45
第17図	SK1023 実測図 (1/20)	16	第67図	SK3014 実測図 (1/30)	45
第18図	SK1020 出土遺物実測図 (1/3)	16	第65図	SK3004 実測図 (1/30)	45
第19図	SK1037 実測図 (1/30)	17	第68図	SK3016 実測図 (1/30)	46
第20図	SK1041 実測図 (1/30)	17	第72図	3区土坑出土遺物実測図 (1/3)	46
第21図	SK1041 出土遺物実測図 (1/1)	17	第70図	SK3018 実測図 (1/30)	46
第22図	SD1001 実測図 (1/40)	18	第69図	SK3017 実測図 (1/30)	46
第23図	SD1001 出土遺物実測図 (1/3)	19	第71図	SK3019 実測図 (1/30)	46
第24図	SD1002 実測図 (1/40)	20	第73図	3区柱穴遺構実測図 (1/20)	47
第25図	SD1002 出土遺物実測図 (1/3)	21	第74図	3区柱穴遺構出土遺物実測図 (1/3)	49
第26図	SD1021 実測図 (1/40)	22	第75図	3区出土遺物実測図 (1/3)	49
第27図	SD1021 出土遺物実測図① (1/3)	23	第76図	出土遺物から見た石神城跡の時期区分	58
第28図	SD1021 出土遺物実測図② (1/4)	24	第77図	石神城跡遺構の時期別変遷 (1/500)	59
第29図	SE1019 実測図 (1/30)	25	第78図	濱田道路の調査位置図 (1/2500)	61
第30図	SE1019 出土遺物実測図 (1/3・1/4)	26	第79図	濱田道路調査区全体図 (1/300)	62
第31図	1区柱穴遺構実測図 (1/20)	27	第80図	1区土層断面図 (1/80)	63
第32図	1区柱穴遺構出土遺物実測図 (1/3・1/4)	27	第81図	1区出土遺物実測図 (1/3)	63
第33図	1区出土遺物実測図 (1/3)	28	第82図	2区平面図 (1/100)	64
第34図	2区土層断面 (1/80)	28	第83図	2区土層断面 (1/80)	64
第35図	2区土層断面 (1/150)	29	第84図	SD2016 実測図 (1/30)	65
第36図	SK2001 実測図 (1/30)	30	第85図	SD2016 出土遺物実測図 (1/3)	65
第37図	SK2001 出土遺物実測図 (1/3)	30	第86図	3区遺構平面図 (1/100)	66
第38図	SK2015 出土遺物実測図 (1/3)	31	第87図	3区土層断面 (1/80)	67
第39図	SK2015 実測図 (1/30)	31	第88図	3区水田遺構出土遺物実測図 (1/3・1/1)	67
第40図	SK2018 実測図 (1/30)	32	第89図	3区出土遺物実測図 (1/3・1/2)	68
第41図	SK2018 出土遺物実測 (1/3)	32	第90図	4区遺構平面図 (1/100)	69
第42図	SK2020 実測図 (1/30)	32	第91図	4区土層断面 (1/80)	70
第43図	SK2020 出土遺物実測図 (1/3・1/4)	33	第92図	4区水田遺構出土遺物実測図 (1/3)	70
第44図	SK2021 実測図 (1/30)	34	第93図	4区出土遺物実測図 (1/3)	71
第45図	SK2021 出土遺物実測図 (1/3)	34	第94図	濱田道路水田遺構出土遺物の年表図 (1/4)	72
第46図	SK2022 出土遺物実測図 (1/3)	35	第95図	沖代地区奈良路の奈良輪角度 (1/20000)	73
第47図	SK2022 実測図 (1/30)	35	第96図	植物注釋体含有量	82
第48図	SK2023 実測図 (1/30)	36	第97図	植物注釋体	83
第49図	SK2023 出土遺物実測図 (1/3)	36	第98図	石神城跡・濱田道路周辺の土地利用図	85
第50図	SK2026 出土遺物実測図 (1/3)	36			

表目次

第1表	石神城跡遺構一覧表	50	第9表	濱田道路出土遺物觀察表 (土器・陶磁器)	75
第2表	石神城跡遺構觀察表 (土器・陶磁器・瓦)	52	第10表	濱田道路出土瓦觀察表	76
第3表	石神城跡出土瓦觀察表	56	第11表	濱田道路出土土製品觀察表	76
第4表	石神城跡出土土製品觀察表	56	第12表	濱田道路出土石器・石製品觀察表	76
第5表	石神城跡出土土器・石製品觀察表	56	第13表	濱田道路出土金属製品觀察表	76
第6表	石神城跡出土木製品觀察表	56	第14表	分析資料一覧	80
第7表	石神城跡出土金属製品觀察表	56	第15表	植物注釋体含量	81
第8表	濱田道路遺構一覧表	74			

写真図版目次

写真図版一	石神城跡空景	写真図版九	石神城跡3区全景・遺構
写真図版二	石神城跡1区2区全景	写真図版十	石神城跡出土遺物
写真図版三	石神城跡1区区画	写真図版十一	石神城跡出土遺物
写真図版四	石神城跡1区遺構	写真図版十二	石神城跡出土遺物
写真図版五	石神城跡1区遺構	写真図版十三	濱田道路全景
写真図版六	石神城跡1区遺構	写真図版十四	濱田道路遺構
写真図版七	石神城跡2区全景	写真図版十五	濱田道路出土遺物
写真図版八	石神城跡2区遺構	写真図版十六	濱田道路出土遺物

第1章 調査に至る経緯と発掘調査の経過

第1節 調査に至る経緯

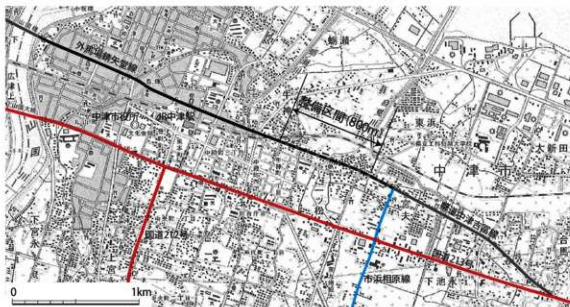
発掘調査の起因となった都市計画道路外馬場錆矢堂線街路改良事業は、県道中津吉富線の一部区間を都市計画決定に基づき整備するものである。中津吉富線は国道213号合馬交差点を起点とし、JR中津駅の北側を経て福岡県築上郡吉富町へ至るもので、国道213号をはじめとした主要幹線道路とJR中津駅等主要施設を連絡する、中津市中心市街地の東西軸として都市の骨格を形成する幹線街路となっている。

この県道中津吉富線のうち、中津市外馬場地区から中津市一ツ松の市道東浜相原線と接続する区間3.2kmが都市計画道路外馬場錆矢堂線として整備区間となっている（第1図）。外馬場～牛神までの2,036mは整備済みであるが、牛神～一ツ松間の800mは交通量が多く、また通学路のため自転車や歩行者の通行も多いものの、道路幅員が狭く自動車の走行性や安全性の機能低下をもたらしていた。そのため、道路幅員の整備により自動車の走行環境改善と歩行者の安全を確保するとともに、安全安心な都市空間の形成を図るため、大分県土木建築部中津土木事務所が事業者となり、平成28～令和6年度の予定工期で整備事業に着手することとなった。

事業区間には周知の埋蔵文化財包蔵地である石神城跡や一ツ松城跡が所在し、また中津吉富線を北限として南には広大な桑里遺跡である沖代地区桑里跡が広がっている。そのため計画地域に埋蔵文化財が存在する可能性は極めて高く、令和元年度から用地条件が整った箇所から順次試掘・確認調査を実施し、埋蔵文化財の把握に努めることとした。令和2年3月に実施した石神城跡の確認調査では、中世～近世の土坑や溝状遺構をはじめ、土器や陶磁器類が出土したことから、工事に先立ち埋蔵文化財の記録作成のための本発掘調査が必要との判断に至った。これを受けて関係機関と協議を重ねた結果、令和2年度に本調査を実施することとなった。

また、令和3年2月には石神城跡の東側において試掘調査を実施した。その結果、現代水田層下に洪水層とみられる近世の砂層と、その下位に中世の土器片を含む水田層を確認した。洪水層に被覆されていることから中世の水田区画を明らかにできる可能性があり、これについても本発掘調査が必要との判断に至った。当該箇所は「濱田遺跡」として大分県教育委員会に遺跡の発見を報告するとともに、令和3年4月から本調査を実施することとなった。濱田遺跡のさらに東側、自見川までの間は令和3年7月と10月にそれぞれ試掘調査を実施した。その結果、一部で中世の水田層が見られたが、大部分は近世以降の土層と混在した状況で、かつ全体的に攪乱が著しく全面的な本調査実施は困難であることから、水田層の広がり記録して調査を終了した。

令和4年度には一ツ松城内で試掘・確認調査を実施したところ、一ツ松城跡において溝や土坑等の遺構や中世～近世の遺物が出土した。一ツ松城跡の本調査は令和5年度に実施の方向で調整を進めている。



第1図 都市計画道路外馬場錆矢堂線の計画概要図 (1/25,000)

第2節 本発掘調査の経過

石神城跡の本調査は、令和2年5月7日付で中津土木事務所長から本調査依頼文書が提出された。これを受けて関係機関と本調査の実施時期や期間、経費等について調整を重ね、同年9月28日付けで本調査の実施計画及び所要経費見積を回答した。令和2年11月4日には大分県教育委員会へ文化財保護法第99条第1項に基づく発掘調査の施行を通知するとともに、中津警察署及び中津市教育委員会へ発掘調査への協力を依頼した。

本調査の実施にあたっては、重機による表土除去、人力掘削（遺構検出・遺構発掘）、記録写真撮影、遺構実測、空中写真等撮影、実測原因のデジタルトレース図作成、発掘調査の現場管理及び労務管理等を発掘調査支援業務として一括して民間調査組織に委託した。その一方で調査区の設定や地積層序の確認、遺構の認定、遺構埋土や調査区土層の分層等は埋蔵文化財センター調査員が行い、遺構の性格や遺跡全体の関係を把握しながら支援業務受託者に作業指示を与え、調査員が現場に常駐して全体を指揮監督する体制をとった。支援業務委託における作業班は1班につき調査技師・調査助手各1名、発掘作業員10名を基本とした。

石神城跡の本調査は令和2年11月18日に表土の重機掘削に着手し、人力による遺構検出・遺構発掘作業、写真・実測図による記録作成、空中写真撮影を経て、令和3年2月2日に埋戻しを完了した。令和3年2月3日付で中津土木事務所、大分県教育委員会、中津市教育委員会へ発掘調査の終了を報告し、同年2月5日付で中津警察署へ埋蔵文化財の発見を通知した。遺物は土器、陶磁器、瓦、木製品等、コンテナボックス48箱であった。

濱田遺跡の本調査は、令和3年3月1日付で中津土木事務所長から本調査依頼文書が提出され、同日付で実施計画と所要経費見積書を回答した。令和3年4月9日付で文化財保護法第99条第1項に基づく発掘調査の施行を通知するとともに、中津警察署及び中津市教育委員会に調査への協力を依頼した。調査は石神城跡と同様に発掘調査支援業務として民間調査組織に委託し、作業班1班につき調査技師・調査助手各1名、発掘作業員15名を基本体制とした。本調査は令和3年4月21日から表土の重機掘削に着手し、遺構検出や包含層・中世水田層の発掘作業を行い、写真・実測図による記録作成、空中写真撮影を経て、令和3年6月11日に埋戻しを完了した。同日付で中津土木事務所、大分県教育委員会、中津市教育委員会へ発掘調査の終了を報告するとともに、中津警察署へ埋蔵文化財の発見を通知した。遺物は土器・陶磁器、瓦、土錘等、コンテナボックス14箱であった。

第3節 整理作業・報告書作成の経過

石神城跡出土品の整理作業は令和3年度に実施した。整理作業は石神城跡を含む当該年度整理実施調査を一括して「埋蔵文化財センターが実施する埋蔵文化財発掘調査に係る整理作業委託」として発注した。業務は基本作業と資料作成業務からなり、埋蔵文化財センター整理作業棟を作業場所として実施した。委託内容は出土物の水洗、出土地点の注記、遺物接合・復元、遺物実測・拓本採取、遺物観察基礎データ作成、遺物実測原因のトレース、遺物写真撮影、及び遺物の区分けや収納等諸作業である。業務では作業工程ごとに調査担当者が完了確認を行い、作業精度の確保に努めた。整理作業は令和3年6月1日～令和4年2月26日にかけて実施し、2月28日に委託成果物の提出を受け、3月9日の完了検査により終了した。

濱田遺跡の整理作業は令和4年度に実施した。作業は石神城跡と同様の方法で委託業務とし、令和4年6月1日～令和5年1月4日にかけて実施し、1月13日に委託成果物の提出を受け、同日の完了検査により終了した。

遺構・遺物図版作成や原稿執筆、編集等報告書作成は整理作業と並行して行い、令和4年12月から原稿を入稿し、3度の校正を経て令和5年3月末に本書を刊行した。これを以て石神城跡・濱田遺跡の調査を完了した。

第4節 調査組織の構成

石神城跡・濱田遺跡の発掘調査に係る体制は以下のとおりである。（所属・職名は調査当時）。

調査主体	大分県教育委員会
調査機関	大分県立埋蔵文化財センター

令和2年度 石神城跡本発掘調査

調査責任者 松本昌浩（大分県立埋蔵文化財センター所長）

調査総括 後藤見一（同 調査第二課長兼調査第一課長

調査事務 俣田 淳（同 総務課長）

西森公誠（同 総務課副主幹）

池見佳輔（同 総務課主事）

調査担当 横澤 慈（同 調査第一課副主幹）

土谷崇夫（同 調査第一課主査）

植田絢正（同 調査第一課主事） ※本調査担当

発掘調査支援業務受託者 有限会社九州文化財リサーチ（調査技師 堤 真子、調査助手 清尾美喜）

令和3年度 濱田遺跡本発掘調査及び石神城跡整理作業

調査責任者 松本昌浩（大分県立埋蔵文化財センター所長）

調査総括 後藤見一（大分県立埋蔵文化財センター副所長兼調査第一課長）

調査事務 藤原邦夫（同 総務課長）

西森公誠（同 総務課副主幹）

池見佳輔（同 総務課主事）

調査担当 横澤 慈（同 調査第一課副主幹）

植田絢正（同 調査第一課主事） ※本調査・整理作業担当

諸岡初音（同 調査第一課主事） ※本調査担当

吉田 寛（同 調査第二課長） ※整理作業総括

小堀嵩史（同 調査第二課主事） ※整理作業委託監理

発掘調査支援業務受託者 株式会社島田組大分営業所（調査技師 宮下貴浩、調査助手 藤謙太郎、坂本大海）

整理作業受託者 株式会社九州文化財総合研究所（整理作業指導員 永井美香）

令和4年度 濱田遺跡整理作業・報告書作成

調査責任者 松本昌浩（大分県立埋蔵文化財センター所長）

調査総括 後藤見一（大分県立埋蔵文化財センター副所長兼調査第一課長）

調査事務 藤原邦夫（同 総務課長）

山田哲也（同 総務課主査）

平田愛香（同 総務課主事）

調査担当 横澤 慈（同 調査第一課副主幹） ※整理作業・報告書作成担当

吉田 寛（同 調査第二課長） ※整理作業総括

小堀嵩史（同 調査第二課主事） ※整理作業委託監理

整理作業受託者 株式会社九州文化財総合研究所（整理作業指導員 永井美香）

※石神城跡の遺跡名称について

石神城跡については、大分県教育委員会発行『大分の中世城館』（第3集・分布図地名表編）では「牛神城跡」、大分県教育委員会発行『大分県遺跡地図』及び中津市教育委員会の『中津市の中近世城館』（各説・総括編）では「石神城跡」となっており、混乱をきたしている。発掘調査は「牛神城跡」の名称で行ったが、本報告にあたっては「大分県遺跡地図」等の記載に従い、「石神城跡」として報告する。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

石神城跡・濱田遺跡のある中津市は大分県の北部に位置し、北は周防灘に面し、東は宇佐市、南は日田市、玖珠町と市境をなし、西は一級河川山国川を挟んで福岡県と接している。令和4年12月31日時点での人口は83,101人で、人口規模は大分市、別府市に次ぐ県内第3位である。

石神城跡・濱田遺跡は山国川下流の沖積平地上に位置する。この沖積平野は沖代平野と通称され、それを囲むように東には下毛原台地・南には大貞台地と通称される低平な洪積台地が広がっている。平野は近世以降の干拓で海側に拡大しているが、中世以前は中殿〜牛神〜ツ松のあたりに浜堤が広がり、これが旧海岸線であったとみられている。

中津市中心地域の交通は北九州市小倉から大分・宮崎を経て鹿児島に至るJR日豊本線が通じ、幹線道路では中津から耶馬溪を経て日田へ抜ける国道212号、別府市から国東半島の海岸沿いに中津に至る国道213号が交わる交通の要衝で、かつては中津駅から耶馬溪鉄道も分岐していた。

産業は自動車関連工場の進出により工業が盛んで、その他農業や水産業、城下町や国指定名勝耶馬溪に代表される観光業も行われている。

第2節 歴史的環境

旧石器時代は市内各所で遺物が出土しているが、その量は少ない。

縄文時代では山国川や犬丸川沿いの台地や河岸段丘、自然堤防上に集落が認められる。高畑遺跡(25)は後期後葉〜晩期の土器・石器の他、2体の土偶が出土しており、精神文化の一端を示している。

弥生時代の集落は台地や自然堤防上に展開し、沖積低地には水田が形成されたとみられる。調査地周辺では高畑遺跡(6)や沖代地区条里跡(9)で集落が認められ、沖代地区条里跡では大型の掘立柱建物確認されている。また、沖代小学校校庭遺跡(15)では水田跡が確認されている。

古墳時代には山国川や犬丸川流域において、相原古墳群等の古墳や上ノ原横穴墓群等の墓域の形成が顕著に認められる。亀山古墳(13)は下毛原台地にある前方後円墳で円筒埴輪片が出土している。集落は高畑遺跡(6)があるほか、東浜遺跡(21)では道路状遺構を検出している。また、市の南部の野依・伊藤田窯跡群は県内最大の須恵器窯跡群で、8世紀にかけて生産が行われている。

古代の主要な遺跡は沖代平野を東西に横切る古代豊前道跡(勅使街道)沿いに展開する。白鳳系寺院の相原廃寺が創建され、勘助野地遺跡や相原山首遺跡で火葬墓が形成されるなど、仏教文化の進展が窺える。8世紀前半には古代豊前道を南限として沖代地区の条里(7)が形成されたと考えられている。条里を見下ろす洪積台地上には古代下毛郡衙の正倉城と考えられる長者屋敷官衙遺跡がある。

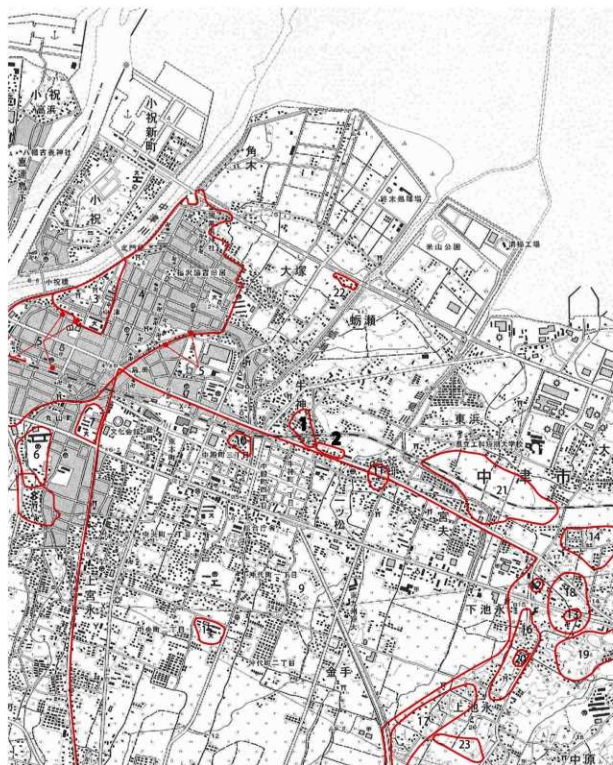
中世では市内の各所に周囲を堀や土塁で囲繞した城館が認められる。石堂池遺跡(19)や亀山古墳(13)等で、中世城館の堀を検出している。

16世紀末には豊臣秀吉から豊前のうち下毛郡等6郡を与えられた黒田孝高が入封し、中津城を拠点に領国経営を行っている。その後細川氏、小笠原氏を経て奥平氏が入り、明治4年(1871)の廃藩置県を迎えている。

石神城跡については、「下毛郡誌」では小畑四郎左衛門宗重の居城とする¹⁾が、城に関する史料はない。また、大分県教育委員会や中津市教育委員会の調査でも明確な遺構は確認できず、城跡についての詳細は不明である。現在の地名である「牛神」は「氏神」に由来するとする説と、「石神」が転訛したものとする説がある²⁾。近世以来、牛神村として記録にあり、今日の大字として継続している。

1) 浦井直幸 2022『中津市の中近世城館 各説・総括編』中津市文化財調査報告書第107集、中津市教育委員会

2) 渡辺道夫・兼子俊一・橋本操六・豊田寛三 1991『角川日本地名大辞典 44 大分県』角川書店



1. 石神城跡(中世)
2. 濱田遺跡(中世)
3. 中津城跡(近世、県史跡)
4. 中津城下町遺跡(近世)
5. 中津城おかい山(近世、県・市史跡)
6. 高畑遺跡(縄文～古代)
7. 豊田小学校校庭遺跡(弥生・古墳)
8. 宮永城跡(中世)
9. 沖代地区条里跡(弥生～近世)
10. 中臣城跡(中世)
11. 一ツ松城跡(中世)
12. 瀧の巣城跡(中世)
13. 龜山古墳(古墳)
14. 合馬遺跡(古墳・中世)
15. 沖代小学校校庭遺跡(弥生)
16. 下池永遺跡(弥生・古墳・中世)
17. 上池永遺跡(弥生・古墳)
18. 大道囃遺跡(古墳・中世)
19. 石堂池遺跡(古墳・中世)
20. 池永城跡(中世)
21. 東浜遺跡(古墳・中世)
22. 古濱東遺跡(古墳・近世)
23. 上池永矢筈遺跡(中世)

第2図 石神城跡・濱田遺跡と周辺の遺跡(国土地理院発行2万5000分の1地形図「中津」に加筆)

第3章 石神城跡の発掘調査

第1節 発掘調査の方法

石神城跡の本調査対象となったのは682㎡である。調査地は市街地化しており、周囲に住宅や店舗が軒を連ねているため、これら住宅や店舗への入口を確保しつつ、生活への影響を極力小さくしながら発掘調査を行う必要があった。また、地中埋設物や構造物を避け、周囲の安全を十分に確保した調査区設定が求められた。調査では1～3区を設定し、1・2区はそれぞれ2区画に細分して、調査で生じる排土置場を確保しながら切り返して実施した。この設定した調査区に対し、世界測地系の座標に基づいて10m方眼の調査グリッドを設定した。グリッド番号は、北から南にアルファベット、西から東にアラビア数字を付し、両者を組み合わせて使用した（第4図）。

本調査では、確認調査の所見から遺構検出面より上は近現代の盛土であり、有意な遺物包含層が認められないことから、遺構検出面までの堆積層を重機で慎重に剥ぎ取った。次いで作業員を投入し人力で遺構検出作業を行い、検出した遺構の掘り下げを行った。検出した遺構は検出した順に「S-●●」の遺構番号を付与した。報告書作成時には調査時の番号を踏襲したが、各調査区で1番からの番号が与えられていたため、重複を避けるため報告書作成時に遺構番号の最初に調査区の数字を付し、その次に3桁の遺構番号を付けるように修正した。遺構の性格に応じた遺構略号は報告書作成時に付した。すなわち、1区の1番の遺構（溝）の場合、SD1001となる。検出した遺構は写真及び実測図で記録し、出土遺物は調査区ごとに遺構又は調査グリッド単位で取上げた。空中写真撮影を実施した後、調査区を埋め戻して調査を完了した。

以下、調査区ごとに調査の概要を報告する。

第2節 1区の調査

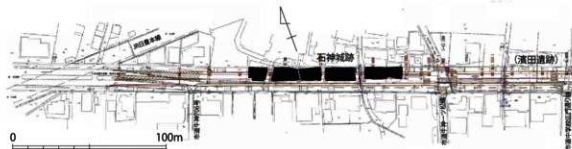
1区は調査地の最も西側に設定した調査区である。中央は寺院参道のため調査区から除外し、参道を挟んだ東西に調査区を設定した（第5図）。調査の結果遺構として認定したものは51基である。主要な遺構は以下に報告するが、それ以外については遺構一覧表（第1表）を参照されたい。

①調査区の土層

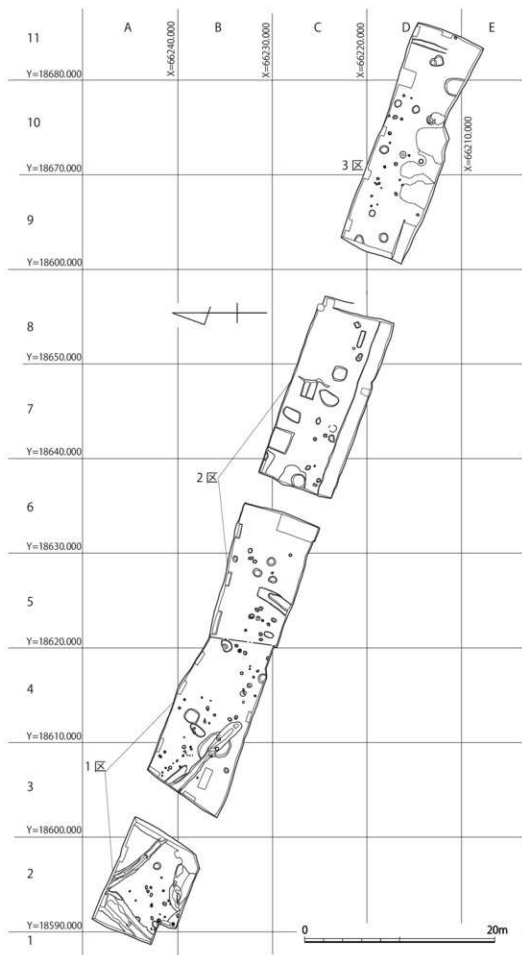
1区の土層断面実測図を第6図に示す。

1区西側調査区の堆積土層は5層に細分される。第1層は旧表土上に置かれた盛土層である（1～4層）。バラス混じりの1層と、地固めの粘土層（2層）、やはり地固めで置かれたと思われる硬質の盛土（3層）があり、北側では3層の下にさらに粘土層（4層）が見られ、丁寧に地固めをした様子が窺える。1層の厚さは70cm前後である。第2層（5層）は黄橙色砂質土の旧表土で、厚さは10～20cmを測る。第2層の下は白色がかった粘質土ないしは砂質土の地山で、この層上面が遺構検出面となる。

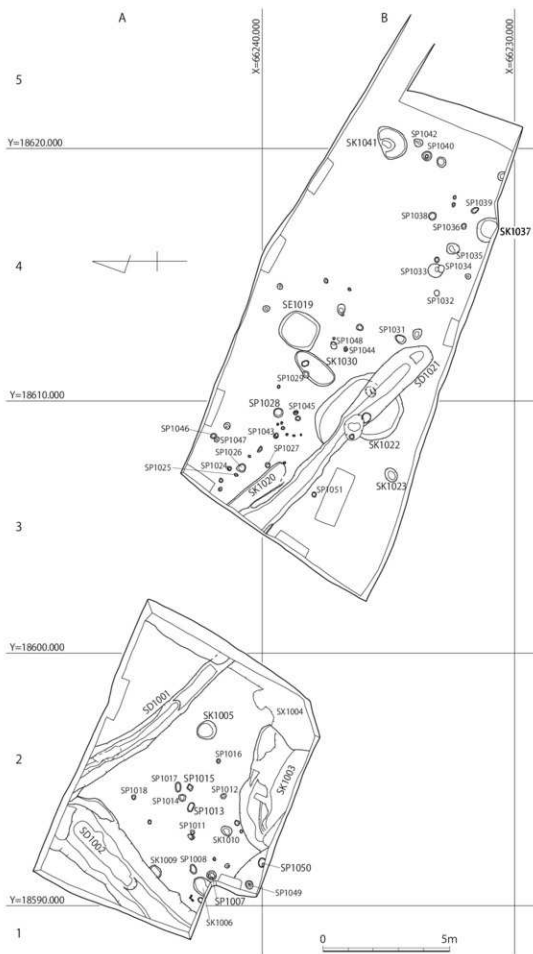
1区東側土層も5層に細分される。1層は盛土及び表土層（1～3層）で、35～60cm前後を測る。第2層はにぶい黄褐色砂質土（4層）の旧表土である。全体に分布するが北側ではやや酸化鉄分の沈着が強く、これを5層と



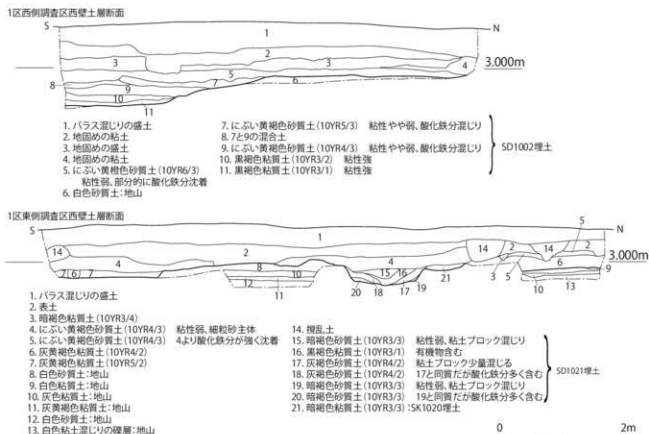
第3図 石神城跡の調査位置図 (1/2500)



第4図 石神城跡の調査区全体平面図 (1/400)



第5図 石神城跡1区平面図 (1/150)



第6図 石神城跡1区土層断面(1/60)

した。また、部分的に灰黄褐色粘質土の堆積が認められた(6・7層)。層厚は概ね20~25cmを測る。第三層は白色がかった砂質土層をベースとする地山層である。トレンチではこの地山層を一部掘り下げており、北側では白色粘質土→灰色粘質土→粘土混じりの礫層、中央トレンチでは灰色粘質土→灰黄褐色砂質土→白色砂質土と続く。いずれも沖積作用で形成された層位とみられる。

②遺構と遺物

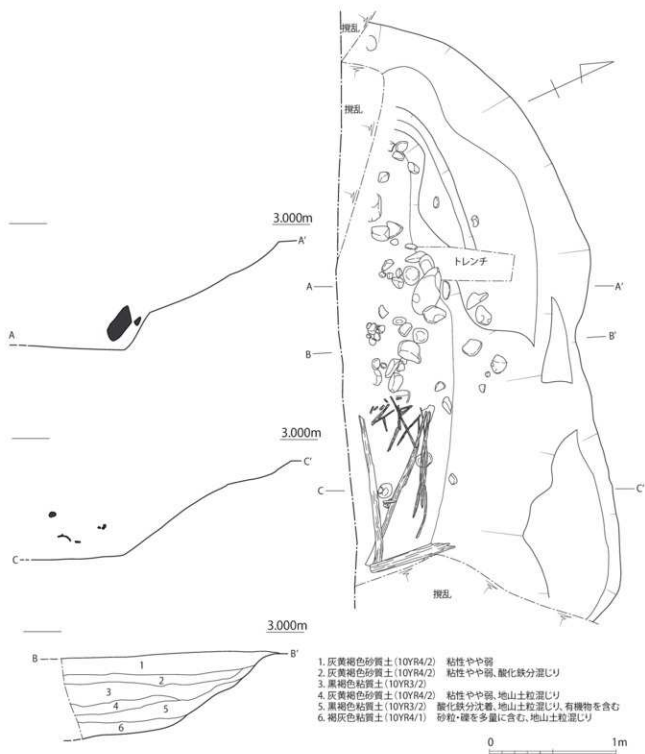
A 土坑

SK1003(第7図)

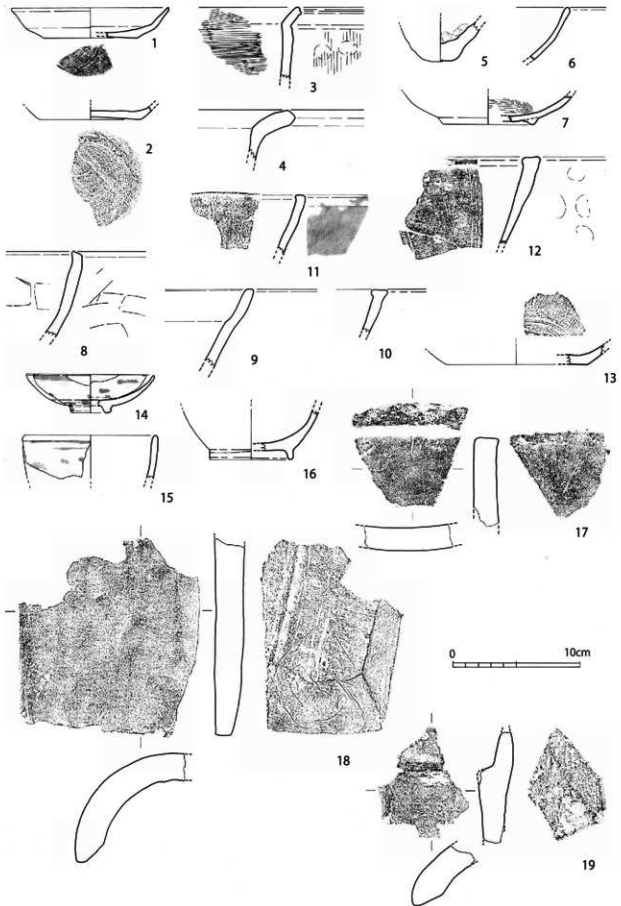
1区西側調査区の南端部で検出した大型の土坑である。南半部が調査区外に続くうえに、東西両端を攪乱に切られており、全体の形状および規模は把握できないが、検出した範囲で長さ2m以上、幅5.1m以上、深さ0.8m前後を測る。埋土は6層認められ、上部は灰黄褐色砂質土、中に黒褐色粘質土と灰黄褐色砂質土、下に黒褐色粘質土と褐灰色粘質土があり、5層には有機物を、最下層の6層には砂灰や礫を多量に含む。内部構造は上部は摺鉢状に緩く掘り込むもの、北側には細かく段が付き、下部で屈曲して一段深く掘り込む。この下部を中心に礫や木製品、有機物等が出土している。遺構の規模や埋土から、井戸の可能性のある土坑である。遺物は土師器、瓦器、瓦質土器、東播系須恵器、備前焼、青磁、近世陶磁器、瓦、土錘等が出土している。中にはセメント瓦も認められたが、攪乱からの混入の可能性が高い。出土遺物から18世紀代の遺構と判断する。

SK1003出土遺物(第8・9図)

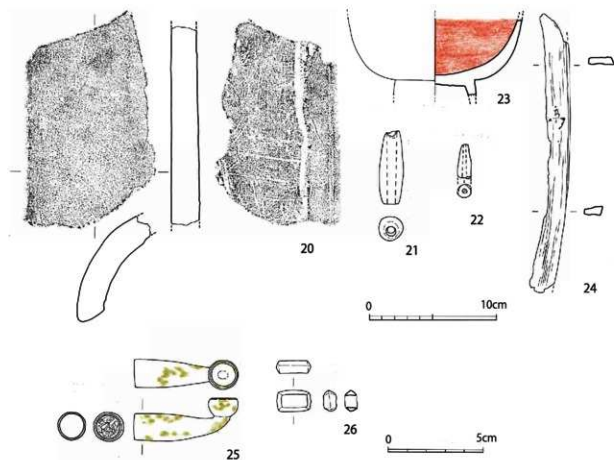
1・2は土師器環で、1は体部中位で屈曲する。1・2ともに底面には回転糸切痕が残る。3・4は土師器の鍋、5は土師器の蛸壺である。6・7は瓦器椀で、7は断面三角形の高台を貼り付ける。8~13は瓦質土器で8・9は



第7図 SK1003実測図 (1/30)



第8図 SK1003 出土遺物実測図① (1/3)



第9図 SK1003 出土遺物実測図② (1/3・1/2)

鍋、10は鉢、11～13は摺鉢である。11は外面に煤が多量に付着する。14は施釉陶器皿で、銅線軸を施す肥前内野山窯の製品である。見込には蛇の目軸刺ぎを施す。15は陶胎染付の碗である。16は染付磁器の瓶で、内面は露胎となる。17は平瓦、18～20は丸瓦である。21・22は土師質焼成の管状土鍾。23は木製の漆器椀で内面に朱漆を塗る。24は棒状の木製品である。墨書がみられるが、不鮮明で判読できない。25は煙管の火皿部で、真鍮製。26は不明銅製品で、平面は長方形を呈し、側面中央が突出して稜が付く。

SK1005 (第10図)

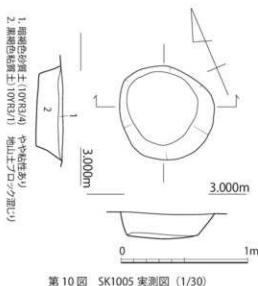
1区西側調査区、A1グリッドで検出した土坑である。平面形状は略円形を呈し、長径0.79m、短径0.73m、深さ0.22mを測る。埋土は2層に分層され、上層は粘性を帯びる暗褐色砂質土、下層は地山土ブロックの混じる黒褐色粘質土である。遺物の出土がなく、遺構の時期は明らかにできない。

SK1020 (第11図)

1区東側調査区の東端部、A3・B3グリッドで検出した土坑である。西側はSD1021に切られているが、平面形状は細長い溝状を呈する。長さ2.7m以上、幅0.73m以上、深さ0.09mを測る。埋土は暗褐色粘質土の単一層である。遺物は土師器、瓦器、白磁、備前焼が出土しており、うち3点を図示した。出土遺物から中世の遺構であり、13世紀代に位置づける。

SK1020出土遺物 (第12図)

27は白磁碗である。口縁上端は平坦な面を持ち、胴部下半は露胎となる。28は土師器の坏で、底面に回転糸切



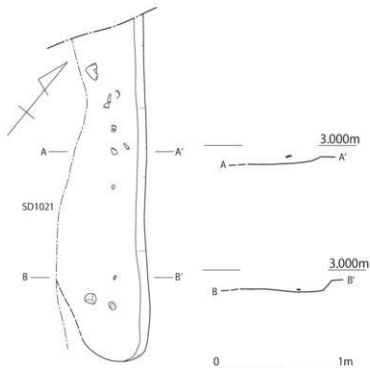
り痕が残る。29は瓦器椀で、内面に粗いヘラミガキを施す。

SK1022 (第13図)

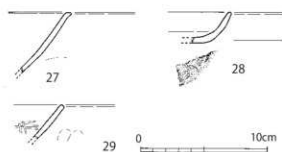
1区東側調査区のB3・B4グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸方形気味であるが、東側が内側にくびれるやや歪な形で、遺構のほぼ中央をSD1021に切られている。長さ3.40m以上、幅2.72m、深さ0.27mを測る。内部は北側が0.17mとやや浅く、南側が一段深くなる。埋土は5層に分層され、黒褐色粘質土と暗褐色砂質土からなる。中心部を切られているため両側の層の関係の把握が難しいが、1・2層は浅い北側にあり、3～5層が南側に堆積している。遺物は須臾器、土師器、瓦器、瓦質土器、土錘、石器が出土しており、うち12点を図示した。出土遺物及びSD1021との切り合い関係から、14世紀代の遺構と判断する。

SK1022出土遺物 (第14図)

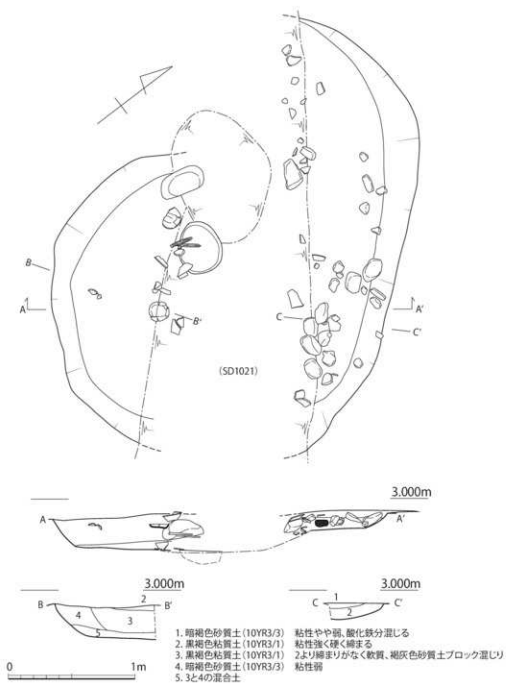
30は土師器小皿で、底部に回転系切り痕が残る。31・32は土師器の坏で、31は底部から外に開きながら立ち上がり、口縁端部はやや外反する。31・32とも底面には回転系切り痕が残る。いずれも色調は白色系である。33は須臾器の壺ないし瓶か。外面にはタタキ痕が残り、内面底部側には若干煤の付着が認められる。SD1021から同一個体とみられる底部(第25図98)が出土している。34は高台付きの土師器椀で、内外面ともにヘラミガキを施す。35～37は瓦器椀で、37は底面に板状圧痕が残る。38は瓦質土器の摺鉢で、内面に6条1単位の摺目を施す。他の遺物に比べこれだけが極端に新しく、SD1021からの混入の可能性が高い。39・40は土師質焼成の管状土錘である。41は飯島産黒曜石製の打製石鎌である。やや上下に長い五角形を呈し、基部は浅く凹む。縄文時代晩期頃に特徴的に認められる形状である。



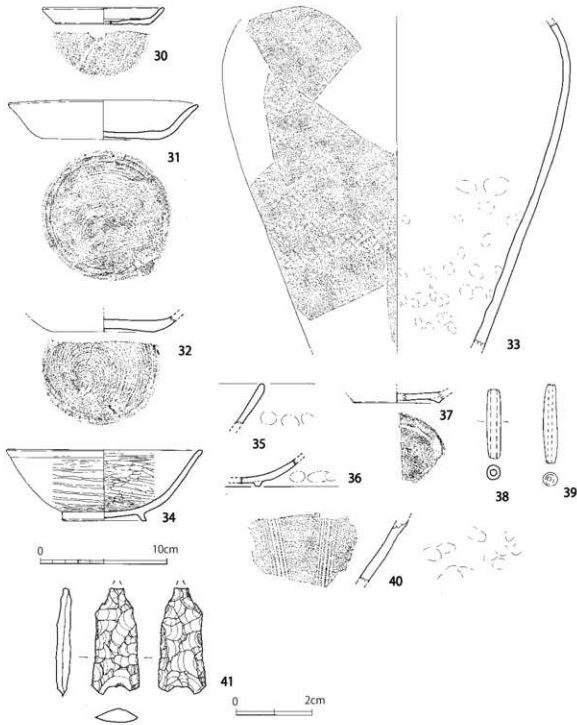
第11図 SK1020 実測図 (1/30)



第12図 SK1020 出土遺物実測図 (1/3)



第13図 SK1022 実測図 (1/30)



第14図 SK1022 出土遺物実測図 (1/3・1/1)

SK1023 (第15図)

1区東調査区の南西側、B3グリッドで検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈し、長辺0.61m、短辺0.44m、深さ0.21mを測る。埋土は2層に分層され、上層は灰黄褐色砂質土、下層は黒褐色粘質土である。この上下層の境辺りで完形に近い瓦器椀(第16図42)が正位置で出土したほか、上端付近から瓦器椀の底部(同43)が底面を上にした状態で出土した。出土遺物から13世紀代の遺構である。

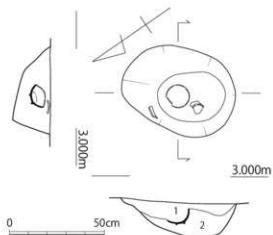
SK1023出土遺物(第16図)

42はほぼ完形の瓦器椀である。底部には逆台形状の高台を貼り付け、内外面に粗いヘラミガキを施す。43は上

端付近から出土の瓦器碗底部である。44は土師器の鍋である。

SK1030 (第17図)

1区東側調査区の中央付近、B4グリッドで検出した土坑である。平面形状は細長い楕円形状を呈し、長径1.85m、短径0.89m、深さ0.08mを測る。西側の一端はSP1029に切られている。埋土は地山の白色粘土が混じった灰黄褐色粘質土の単一層である。遺物は須恵器、土師器、瓦器、磁器が出土しており、2点を図示した。遺構の時期は近世である。

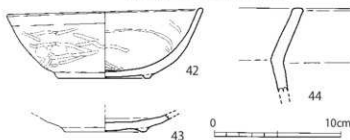


1. 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 粘性やや弱い
2. 黒褐色粘質土(10YR3/1)

第15図 SK1023 実測図 (1/20)

SK1030出土遺物 (第18図)

45は土師器皿で、底面に回転糸切り痕が残る。46は肥前系磁器の碗である。内面は透明釉、外面には上から暗緑色の釉薬をかけ分けて青磁碗に仕上げている。



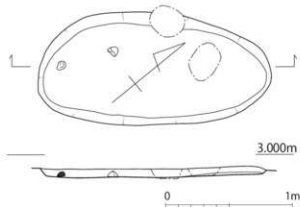
第16図 SK1023 出土遺物実測図 (1/3)

SK1037 (第19図)

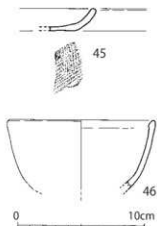
1区東側調査区の南東部、B4グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸形状を呈するが、南端部側は調査区外に続く。長辺1.07m、短辺0.73m、深さ0.16mを測る。底面付近から5~15cm大の小礫がまともって出土している。遺物は土師器が出土しているが、細片のため図示できるものはない。従って遺構の帰属時期は不明である。

SK1041 (第20図)

1区東側調査区の東端近く、B4・B5グリッドで検出



第17図 SK1030 実測図 (1/30)



第18図 SK1030 出土遺物実測図 (1/3)

した土坑である。平面形状は卵形を呈し、長辺1.44 m、短辺1.02 m、深さ0.23 mを測る。底面は比較的平坦であるが、中央部から北側にかけてはビット状に一段深く彫り込まれる。遺物は土師器と銭貨が出土しており、うち1点を図示した。寛永通寶の出土から近世に属する遺構である。

SK1041出土遺物（第21図）

47は寛永通寶の一文銭である。「寶」字の貝部分の下部が「ス」字になる特徴から古寛永（1636～1659）であると分かる。

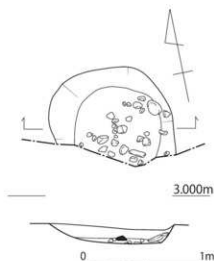
B 溝

SD1001（第22図）

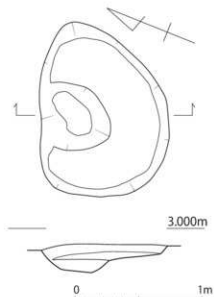
1区西側調査区の北北部、A2グリッドで検出した溝である。両端が調査区外に続くため全体の規模は明らかにできないが、長さ8.6 m以上、幅0.58～1.15 m、深さ0.19～0.40 mを測る。溝の中心軸はN-24°-Wで西に振れる。埋土は大きく上下2層に分けられ、上層は酸化鉄分混じりのにぶい黄褐色砂質土、下層は有機物を含む黒褐色粘質土である。部分的に間層として粘性を帯びるにぶい黄褐色砂質土が入る。溝内部は中央から北側にかけて一段深く掘り込まれる。遺物は全体的に出土しているものの、この中央付近の段が付く辺りで木製品等がややまとまって出土している。遺物は土師器、瓦器、瓦質土器、白磁、青磁、土鍾の他、木製品が出土しており、うち21点を図示した。出土遺物から中世に属する遺構であることは確実であるが、遺物にバリエーションがあり時期比定が難しい。ただし瓦質土器火鉢や摺鉢の存在から、16世紀後半頃と考えたい。

SD1001出土遺物（第23図）

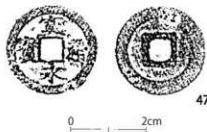
48は白磁の玉縁碗である。49は龍泉窯系青磁碗で、外面に鎬のない蓮弁文を施す。50は青磁碗の底部高台部分の破面を研磨した加工円盤である。51・52は土師器小皿で、52は底面に回転糸切り痕が残る。53～55は瓦器椀で、54は内外面に粗いヘラミガキを施す。56～65は瓦質土器である。56～58は鍋で、56は口縁部を肥厚し端部に面を持つもの、57は肥厚する口縁端部が均等に折れるもの、58は口縁内面の下がった所に浅い段が付き、口縁が上方に延びるもの、の各形状が認められる。58は外面に煤が多量に付着する。59・60は火鉢で、断面半円形状の凸帯間にスタンプ文を施す。61は鉢、62は火鉢の底部で逆台形状の脚が付く。63は口縁が片口となる鉢で、形状から摺鉢であろう。64・65は釜である。66は土師質焼成の管状土鍾。67は木製の漆器椀で、底部は厚く、高台を短く削り出す。68は安山岩の板状石材で、端部断面にノミ痕が残る。



第19図 SK1037実測図（1/30）



第20図 SK1041実測図（1/30）



第21図 SK1041出土遺物実測図（1/1）

SD1002 (第24図)

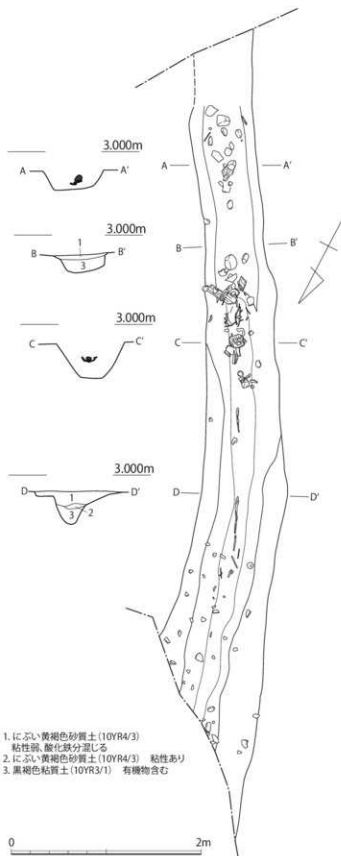
1区西側調査区の西端、A1・A2グリッドで検出した溝である。両端が調査区外に続くため全体の規模は明らかにできないが、長さ668m以上、幅185~252m、深さ0.37~0.62mを測る。溝の軸線はN-47.5°-Eで東に振れる。溝の北東端部でわずかにSD1001と切り合っており、調査時の所見ではSD1001がSD1002を切っている。埋土は8層に細分され、にぶい黄褐色砂質土と暗褐色砂質土、黒褐色粘質土からなる。内部構造は上部は緩く掘り込むもの、肩部で屈曲して深く掘り込まれる。中央から北東側はさらに一段深く、遺物や礫はこの部分を中心にややまとまって出土した。遺物は須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、白磁、青磁、備前焼、陶磁器、瓦、土鍾、木製品、漆膜が出土しており、うち20点を図示した。出土遺物から中世の遺構であり、SD1001に切られるものの、出土遺物はSD1001と大きな差はなく、16世紀後半に位置付ける。

SD1002出土遺物 (第25図)

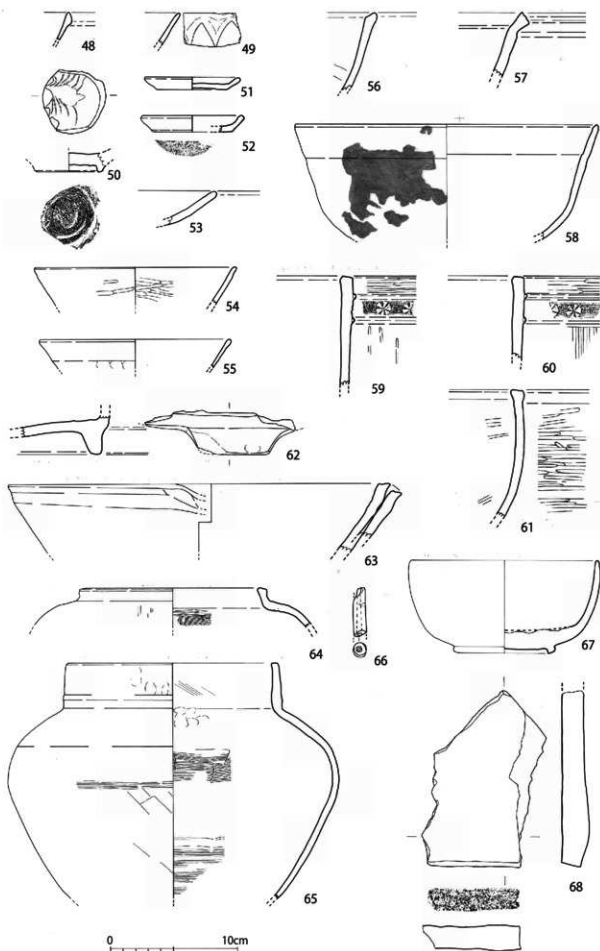
69は白磁の皿である。70は土師器小皿で、底面に板状瓦痕が認められる。71は土師器の甕。72~76は瓦器椀で、75は内面に粗いヘラミガキが残る。73は底部に高台を持たない。77・78は瓦質土器の鍋、79は瓦質土器の鉢である。80は瓦質土器の摺鉢で、内面に摺目が残る。81は瓦質土器火鉢の脚部。82は摺鉢の底部で、見込みに円周する摺目を施す。83は瓦質土器の釜である。84は備前焼の摺鉢で、断面三角形の口縁部が上方に延びる。85は弥生土器甕の底部か。全体に磨滅しており流れ込みである。86は須恵器無頸壺であろう。こちらも磨滅しており、流れ込みとみられる。87は土師質焼成の管状土鍾、88は砂岩製の砥石で、3面に使用痕が認められる。

SD1021 (第26図)

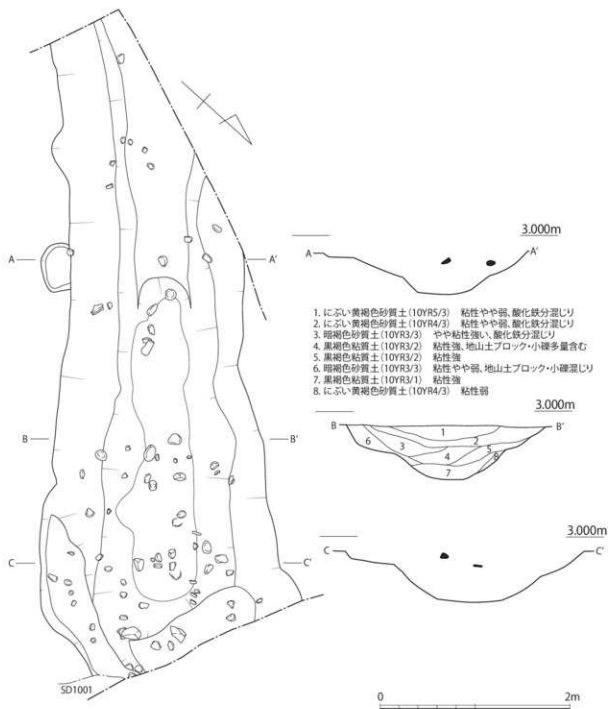
1区東調査区の中央から西部にかけて、



第22図 SD1001実測図 (1/40)

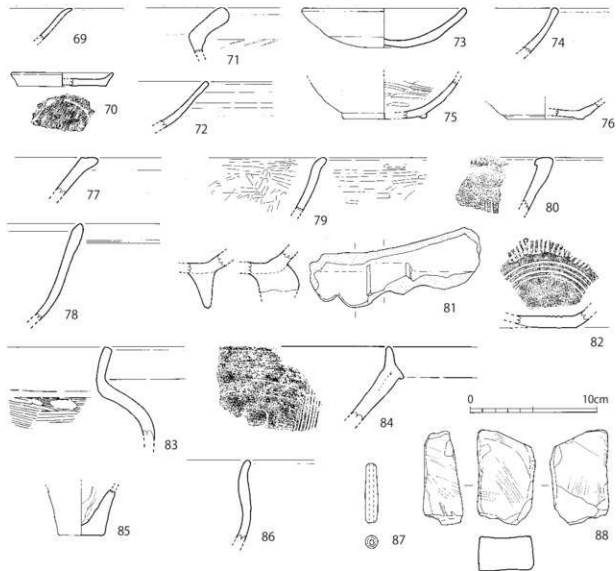


第23図 SD1001 出土遺物実測図 (1/3)



第24図 SD1002実測図 (1/40)

A3・B3・B4 グリッドで検出した溝である。西側は調査区外に続くため全体の規模は明らかにできないが、長さ 8.6 m 以上、幅 0.61~1.07 m、深さ 0.18~0.38 m を測る。軸線は N-45°-W で西に振れる。中央付近は SK1022 と重複している他、2箇所 で攪乱を受ける。埋土は 5層に分層され、上層の にぶい灰黄褐色砂質土 (1層)、中層の 黒褐色砂質土 (2層) 及び 黒褐色粘質土 (3層)、下層の 黒褐色砂質土 (4層) 及び 灰褐色砂質土 (5層) に大別される。中層の 2・3層は掘り返してであろう。内部からは遺物や礫が満遍なく出土しており、特に東端部や西半部でややまとまった状況を示す。遺物は土師器、瓦器、瓦質土器、須恵器、東播系須恵器、青磁、備前、瓦が出土している。一部で攪乱からの混入を含むが、遺構としては中世のもので、16世紀後半代に位置づけられる。



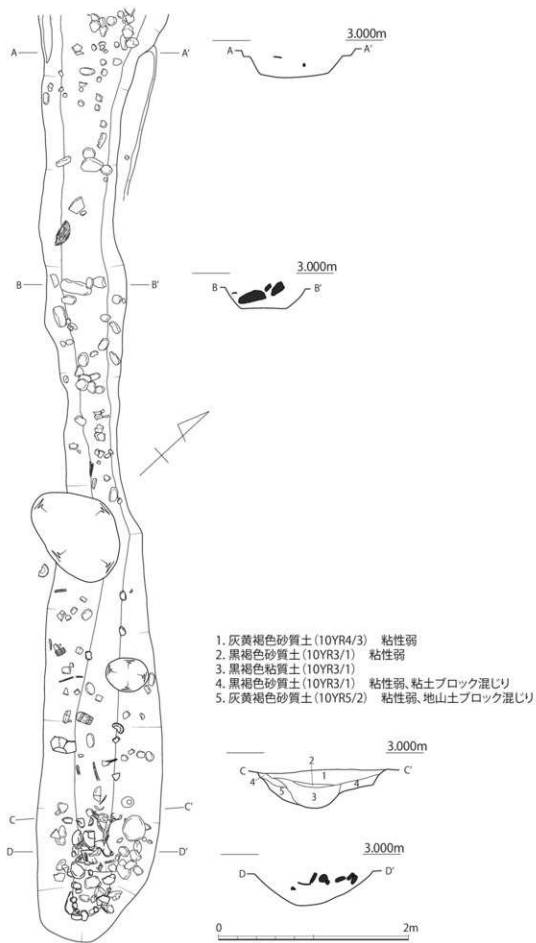
第25図 SD1002 出土遺物実測図 (1/3)

SD1021出土遺物 (第27・28図)

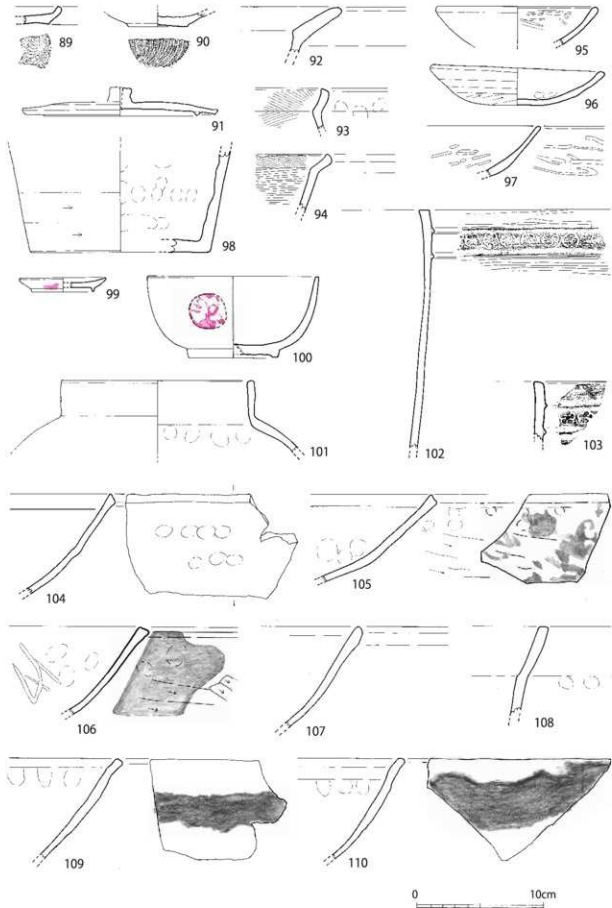
89は土師器小皿・90は土師器皿で、ともに底面に回転系切り痕が残る。90は胎土に金雲母を多量に含んでおり、他地域からの搬入品である。91は土師器の蓋で、頂部の握みには貫通する孔を穿つ。92~94は土師器の鍋である。95~97は瓦器碗で、95・97は粗いヘラミガキを施す。96は底部に高台が付かない。98は須恵器の壺で、内面に煤が付着する。SK1022から同一個体とみられる胴部上半の破片が出土しているが、接合はしない。99・100は木製品で99は皿、100は碗である。101~116は瓦質土器である。101は釜、102・103は火鉢で、断面半円形状の凸帯間にスタンプ文を施す。104~112は鍋で、口縁部形態にはバリエーションが認められる。105・109・110・111・112は外面に煤が残る。113~116は摺鉢で、115は口縁部が片口となる。115は見込みみに三角形に交差する、116は「×」字状に交差する摺目を施す。117は木製の下駄で、台から歯を一材で削り出した連歯下駄である。118は曲物の底板であろう。119は木杭で、側面をカットし先端を尖らせる。

C 井戸

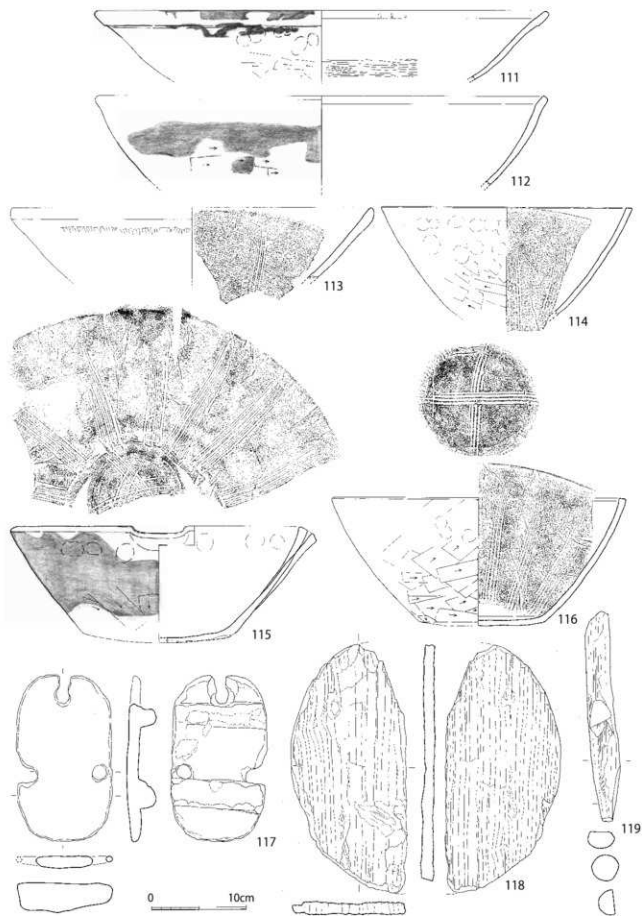
SE1019 (第29図)



第26図 SD1021 実測図 (1/40)



第27図 SD1021出土遺物実測図③ (1/3)



第28図 SD1021 出土遺物実測図② (1/4)

1区東調査区の中央付近、B4グリッドで検出した井戸である。平面形状は隅丸方形を呈し、長辺1.55m、幅1.44m、深さ0.37mを測る。埋土は14層確認され、1~9層は井筒内埋土、10~14層が掘方埋土である。内部からは井戸枠に用いられたとみられる板材や杭等の木片や、東辺では板材が縦面に据えられた状態で出土している。また、底面では方形に残る井筒の痕跡が確認されたことから、草戸千軒町遺跡の分類でいう「方形縦板組隅柱横棧型」の井戸である可能性が高い。痕跡から推定される内法は0.9m前後とみられる。遺物は土師器、瓦器、東播系須恵器、白磁、木製品等、古代~中世のものが出土した。遺構の年代は中世前半、14世紀頃に比定する。

SE1019出土遺物（第30図）

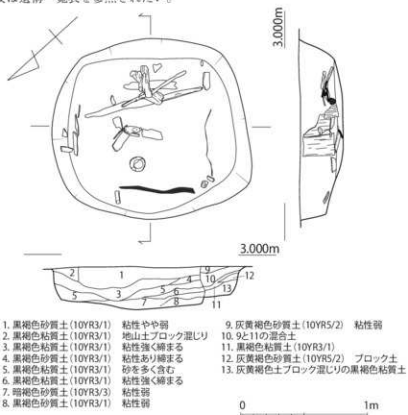
120・121は土師器環である。いずれも器高は低く、底部から外に開きながら立ち上がり、口縁端部は軽く外反する。底面には回転糸切痕が残る。122は古代の高台付土師器環で、底面に放射状の線刻がみられる。123・124は土師器の鍋で、124は外面口縁下に指頭圧痕が顕著に残る。125は土師器の脚付鍋で、いわゆる防長系の資料である。126~130は瓦器椀である。131・132は木杭で、132は側面をカットして先端を尖らせる。いずれも井戸枠の立て板を止める隅柱として用いられたものであろう。

D 柱穴

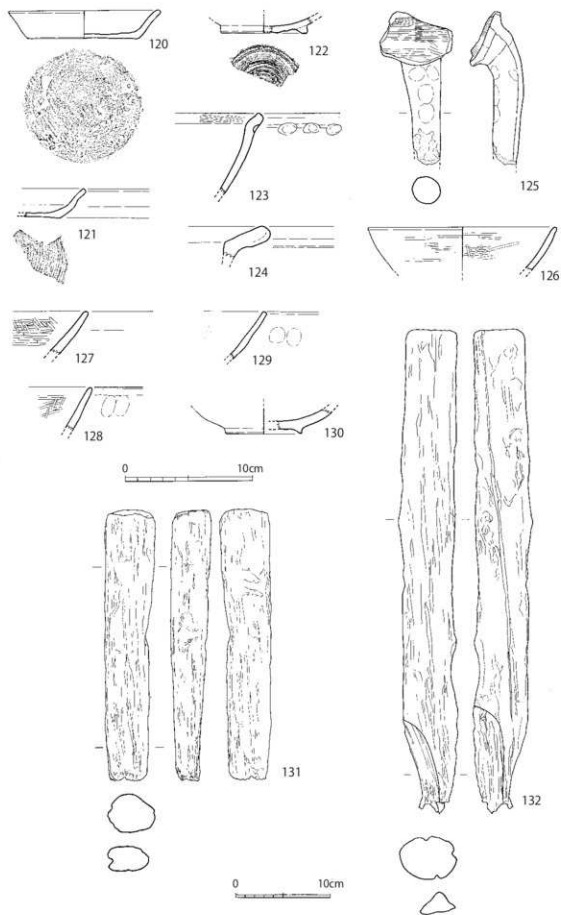
1区の柱穴の内、図示可能な遺物の出土したものを中心に第31図に掲載した。遺構の概略については省略するが、特筆されるものとしてはSP1007とSP1028がある。SP1007は内部に扁平な礫を2点据えている。1点は平坦面を上にしており、もう1点は遺構の掘形に沿って斜めに入る。礎盤石と、礎盤を支える根締め石である可能性が高い。他に礎盤石をもつものや、建物配置を復元できる柱穴は確認されなかった。遺物は近世磁器が出土しており、近世以降の遺構である。

SK1028は下部に直径約15cmの柱根が残存していた。他に土師器片が出土しているが、遺構の時期は明らかにできない。

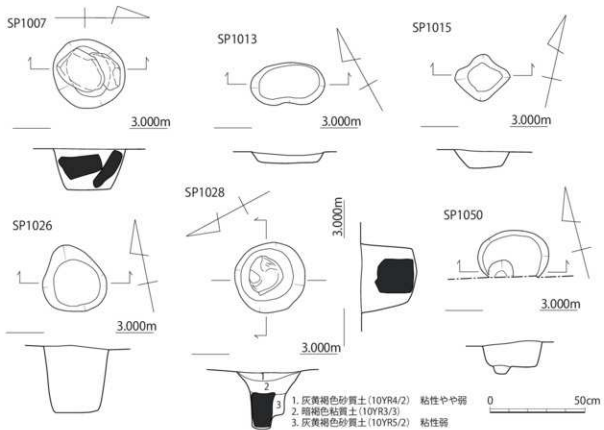
その他遺構の概要は遺構一覧表を参照されたい。



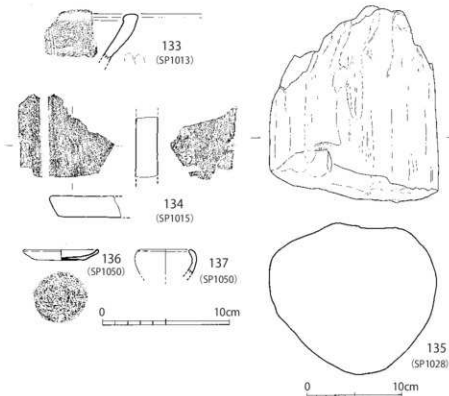
第29図 SE1019実測図(1/30)



第30図 SE1019出土遺物実測図 (1/3・1/4)



第31図 1区柱穴遺構実測図 (1/20)



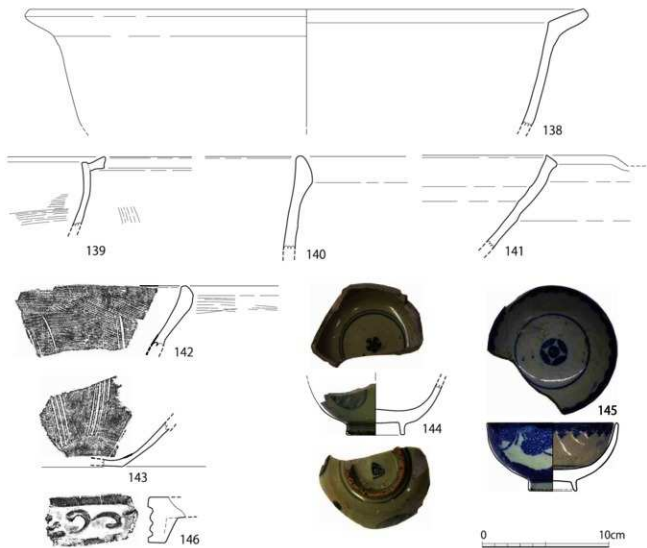
第32図 1区柱穴遺構出土遺物実測図 (1/3・1/4)

柱穴出土遺物（第32図）

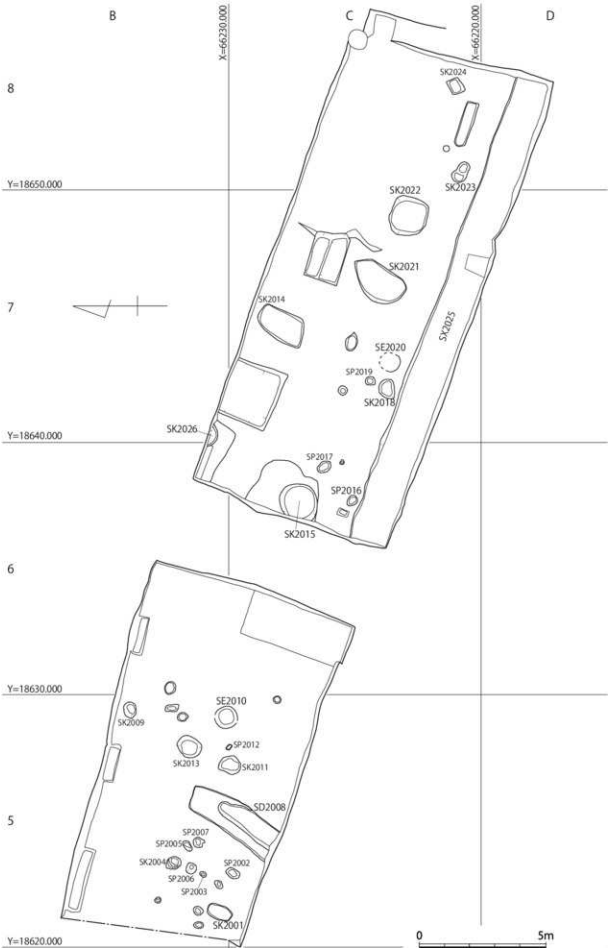
133は瓦質土器摺鉢である。SP1013から出土した。134は平瓦で、SP1015からの出土である。135はSP1028から出土した柱根で、幅17.7cm、高さ20.6cmを測る。136・137はSP1050出土資料である。136は土師器小皿で、底面に回転糸切痕が残る。137は施軸陶器の茶入であろうか。近世のものとみられる。

E 1区出土遺物

遺構以外の出土遺物を第33図に示す。138は土師器の鍋で、口縁が外に折れ。139は土師器の釜で、口縁部外面に鈎部を貼り付ける。140は土師器の甕で、口縁部を玉縁状に肥厚する。141は東播系須恵器の捏鉢で、口縁部の一端が片口となる。142・143は瓦質土器の摺鉢である。144・145は肥前系染付磁器の丸碗で、144は18世紀代、145は型紙刷絵であることから近代初頭に位置付けられる。146は軒平瓦で、中心飾りに反転する唐草文を施す。以上のうち、138は確認調査時、140～143・145・146は機械掘削及び表土、139・144は遺構面清掃時の出土である。



第33図 1区出土遺物実測図(1/3)



第34図 2区遺構配置図 (1/150)

第3節 2区の調査

2区は調査地の中央に設定した調査区である。2区のほぼ中央に里道があったため、これを調査区から除外してその東西に設定した。西側調査区の西端部は1区と一部オーバーラップしている（第34図）。発掘調査の結果、遺構として認定したものは土坑や溝、井戸、柱穴で、全部で26基であった。1区に比べると、遺構の分布は散漫としており、特に東にいくにつれて希薄になる傾向が窺えた。

調査区の堆積土層については記録が不十分のため掲載しないが、1区と大きな差はなく、盛土・表土層の下にふい黄褐色の砂質土があり、その下は白色がかかった砂質土や礫混じりの地山層である。遺構はこの地山層上面で検出した。遺構検出面の標高は3.0～3.15 m前後で、地山面が東側に緩く傾斜するため西側調査区の方が3.10 m前後と少し高い。以下に主要な遺構や特徴的な遺物の出土した遺構を中心に報告する。その他の遺構の詳細については、遺構一覧表を参照されたい。

①土坑

SK2001（第35図）

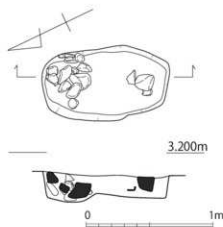
2区の西側調査区南西端、B5グリッドで検出した土坑である。平面形状はやや中膨れとなる隅丸長方形を呈し、長辺1.02 m、短辺0.60 m、深さ0.24 mを測る。土坑内は北側がやや深く掘り込まれ、この部分で円礫や遺物がままとまって出土している。遺物は瓦質土器が出土しており、内2点を図示した。出土遺物から中世の遺構で、15～16世紀のものともみられるが、年代比定出来る遺物に乏しい。

SK2001出土遺物（第36図）

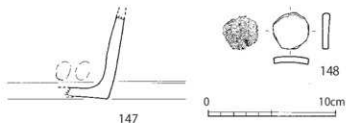
147は瓦質土器火鉢の底部である。外面の底部やや上側に1条の沈線を施す。148は瓦質土器火鉢の破片の周縁を研磨し円形に仕上げた加工円盤である。外面には菱形形状のスタンプ文を施す。

SK2015（第37図）

2区東調査区の西端部、C6グリッドで検出した土坑である。平面形状は円形を呈し、長径1.70 m、短径1.45 m、深さ0.17 mを測る。攪乱の底で検出したものであり、上部を削平されているため本来はもう少し規模が大きい。内部は皿状の掘り込みで、依存状態のよい近世陶器が散在して出土した。他に土師器、白磁、陶器、磁器、陶胎染付が出土している。遺物から17世紀後葉～18世紀前半の遺構と判断する。



第35図 SK2001実測図(1/30)



第36図 SK2001出土遺物実測図(1/3)

SK2015出土遺物（第38図）

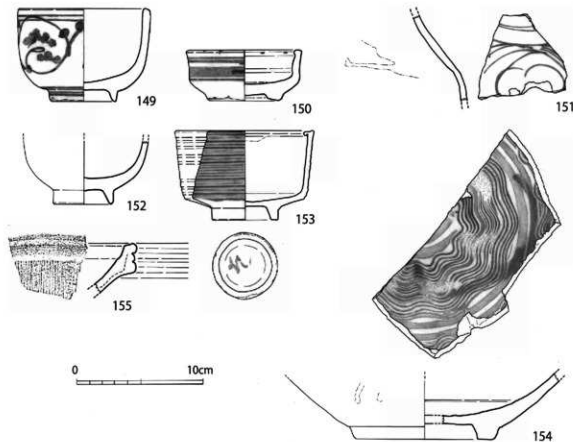
149は肥前産陶胎染付の碗である。150は陶胎染付の香炉もしくはは灰落としか。内面は露胎である。153は陶胎染付の瓶。152は施軸陶器の碗。153は施軸陶器の香炉あるいは火入れで、内面は露胎となる。底部高台内には墨書が見られる。155は肥前産施軸陶器の鉢で、見込みに白泥で刷毛目文を描く。154は焼締陶器の摺鉢で、口縁部は断面三角形に作り、外面に2条の沈線を施す。泉州堺産のものである。

SK2018（第39図）

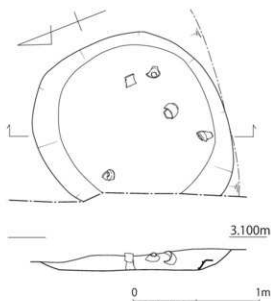
2区東調査区の中央南側、C7グリッドで検出した土坑である。平面形状はやや隅丸の台形状を呈し、長辺0.83m、短辺0.71m、深さ0.17mを測る。土坑内部は皿状を呈し、底面からの立ち上がりは緩やかである。遺物は磁器、ガラス瓶、鉄釘が出土しており、うち3点を図示した。遺物から近代以降の遺構である。

SK2018出土遺物（第40図）

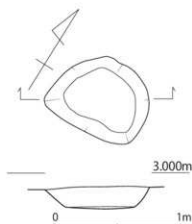
156はガラス製の調味料瓶である。肩部はなだらかにすぼまり、細頭の口縁にいたる。底部は上げ底である。157



第38図 SK2015 出土遺物実測図 (1/3)



第37図 SK2015実測図 (1/30)



第39図 SK2018実測図 (1/30)

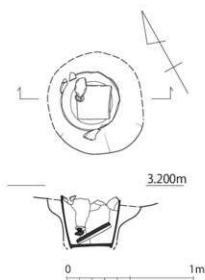


第40図 SK2018 出土遺物実測 (1/3)

はガラス製の化粧水瓶で、方形の胴部外面正面に「ホーカー液」、背面に「堀越」の陽刻（エンボス）がみられる。堀越はメーカーである堀越商會を示す。口縁部にはコルク栓と、内部には固化した化粧品が残存する。158は鉄釘で、断面形状は方形を呈する。

SK2020（第41図）

2区東調査区の中央南側、SK2018のすぐ東で検出した土坑である。プランが不鮮明でその検出が困難であったが、平面形状は凹形を呈すると見られ、長径0.80m前後、短径0.74m前後、深さ0.40m前後を測る。土坑上部は漏斗状に開き、下部は直に掘り込む形状で、内部に瓦質土器の火鉢を正位置で据えている。また、火鉢内の下部からは、平瓦1点が凸面を上にした状態で、底面を覆うように出土した。火鉢内に何らかのものを入れて、それに蓋をしたものである可能性が高く、やや傾いた状態であるのは何らかの要因でずれたのであろう。瓦の出土から近世、17世紀代の遺構と判断する。



第41図 SK2020実測図 (1/30)

SK2020出土遺物（第42図）

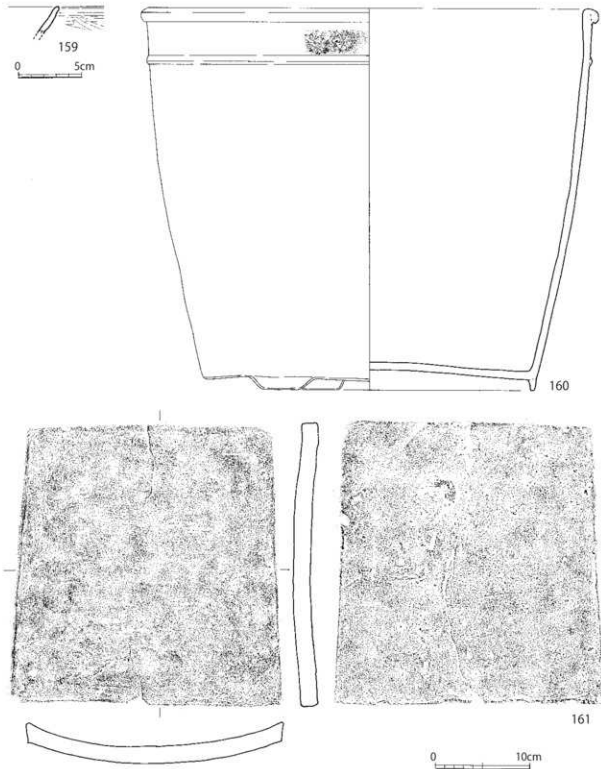
159は瓦器碗である。外面に粗いヘラミガキを施す。160は瓦質土器の火鉢で、埋塞として土坑内に据えられていたもの。口縁部は玉縁状に肥厚し、口縁下の凸帯との間に菊花状のスタンプ文を施す。底部には逆台形の脚が3箇所に付く。161は完形の平瓦である。長さ29.8cm、幅27.0cmを測る。

SK2021（第43図）

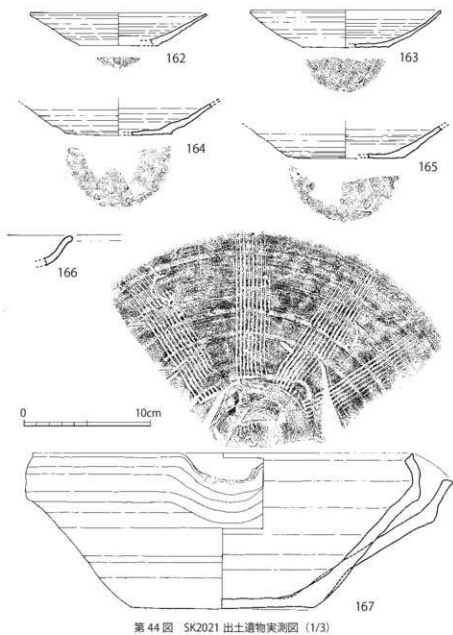
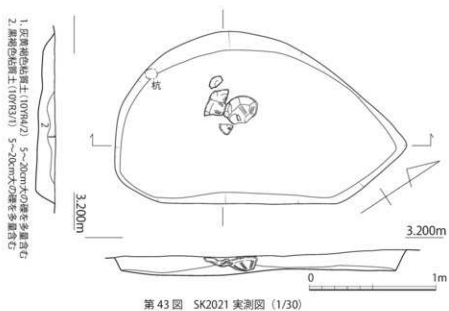
2区東調査区の中央部、C7グリッドで検出した土坑である。平面形状は北端部側がやや尖り気味となる歪な卵形を呈し、長辺2.31m、短辺1.37m、深さ0.17mを測る。埋土は上下2層に細分され、上層は灰黄褐色粘質土、下層は黒褐色粘質土である。内部は皿状の浅い掘り込みで、土坑の中央付近から備前焼摺鉢や土器器皿等の遺物が出土した。遺物から15世紀後葉の遺構と判断する。

SK2021出土遺物（第44図）

162～165は土器器皿である。薄手で白色系の色調を持つもので、内外面には口クロ成形による多条の段が付く。いずれも底面には回転糸切り痕が残る。こうした特徴の皿は周防の大内氏館跡等で出土しており、いわゆる



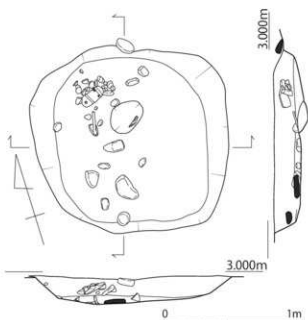
第42図 SK2020出土遺物実測図(1/3・1/4)



大内系の土師器皿である。166は青磁の皿で、口縁は外反し端部は丸くおさめる。167は備前焼摺鉢で、口縁部は屈曲し、端部は上方へ延びる。内面には9条1単位の摺目を施す。

SK2022 (第45図)

2区東調査区の中央東寄り、C7グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸方形形状を呈し、長辺1.56m、短辺1.50m、深さ0.26mを測る。埋土は粘土粒混じりの灰黄褐色砂質土で、粘性は弱く軟質である。土坑中央床面には浅いピット状の掘り込み1基が伴う。土坑の西半部を中心に礫や遺物が出土しており、特に北西部においてややまとまった出土状況を示す。この部分で、木製の下駄が歯が歯が上向きになった状態で、北西側から流れ込んだような状態で出土している。他に瓦質土器や磁器、木製品が出土している。遺構の年代は近世である。



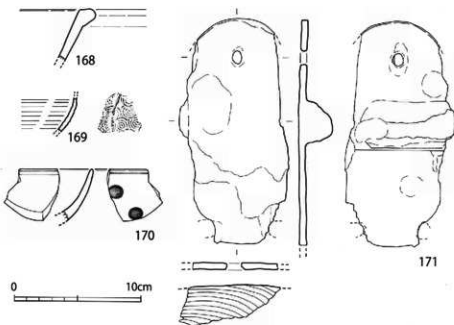
第45図 SK2022実測図 (1/30)

SK2022出土遺物 (第46図)

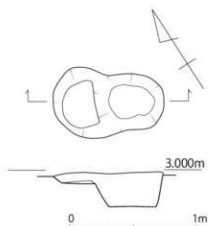
168は瓦質土器の鉢で、口縁部は外側に肥厚し端部に面を持つ。169は瓦質土器の破片で、外面に細い縦位の凸帯とスタンプ文を施す。細片で器種は明らかにできないが、香炉あるいは華瓶であろうか。170は肥前系染付磁器の丸碗で、外面に丸文を描く。171は木製の下駄で、上部に1箇所、下部に2箇所の鼻緒を通す孔を穿つ。歯を同一材から削り出す連歯下駄である。

SK2023 (第47図)

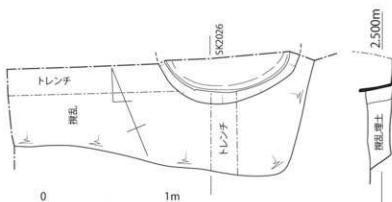
2区東調査区の東側南寄り、C8グリッドの南西端で検出した土坑である。平面形状はやや歪な瓢箪形を呈し、長辺0.87m、短辺0.56m、深さ0.27mを測る。埋土は粘土粒混じりの灰黄褐色砂質土で、粘性は弱く軟質である。内部は二段掘りになっており、東側は一段深く、西側にステップ状の段が付く。陶器碗が出土した他に遺物はない。そのため遺構の時期比定は困難で



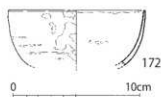
第46図 SK2022 出土遺物実測図 (1/3)



第47図 SK2023実測図 (1/30)



第49図 SK2026実測図 (1/30)



第48図 SK2023出土遺物実測図 (1/3)

あるが、近世の土坑SK2022と埋土が共通しており、SK2023も近世の遺構と判断する。

SK2023出土遺物 (第48図)

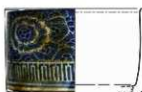
172は施釉陶器の碗である。薄手の素地の上に褐色の釉薬を施し、その上からさらに刷毛状の工具で灰オリーブ色の釉薬を塗布する。

SK2026 (第49図)

2区東調査区の北西端付近、B・B7グリッドで検出した土坑である。長方形形状の掘乱の中で検出したもので、平面形状は円形を呈し、長径北半部は調査区外に続く。0.92 m以上、短径0.31 m以上、深さ0.23 mを測る。埋土は灰褐色粘質土の単層である。掘り方のすぐ内側に木製の桶あるいは盥を据えたもので、その中に瓦質土器や瓦、ガラス、陶磁器等が混在して出土した。桶や盥を設置した何らかの遺構を、廃棄土坑に転用したものと考えられる。本来の機能としては、圃か肥溜め、ある



173



174



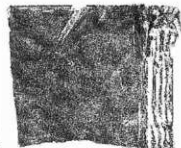
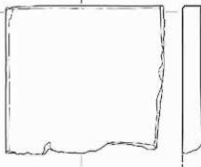
175



176

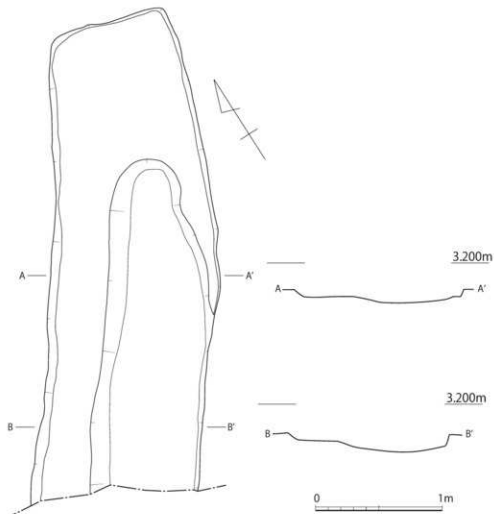


177



177

第50図 SK2026出土遺物実測図 (1/3)

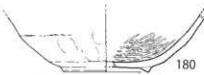
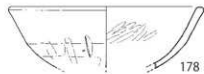


第51図 SD2008実測図 (1/30)

いは溜め井が考えられようか。型紙摺絵の磁器やガラスの出土から、遺構の時期は近代以降である。

SK2026出土遺物（第50図）

173は磁器碗で、内外面に褐色の釉薬を施す。174は染付磁器の段重で、型紙摺絵による文様を施す。175型紙摺絵の染付磁器皿で、高台は蛇の目凹型高台となる。176はガラス製の目薬瓶で、外面正面に「目薬 精銚水」、背面に「佐野薬房」のエンボスを施す。瓶形の容器であり目薬瓶としても初期のものである。177は袖瓦で、左に袖部が付く左袖瓦である。凸面の袖部接合部には接合補強のための溝を施す。



第52図 SD2008出土遺物実測図 (1/3)

②溝

SD2008（第51図）

2区西調査区の中央南寄り、B5・C5グリッドで検出した溝である。南北方向に延びるやや幅広の溝で、長さ3.83m以上、幅1.0～1.35m、深さ0.14mを測る。内部は二段掘りとなっており、長さ2.52m以上、幅0.55～0.88mの溝の周囲に一回り大きい浅い落ち込みが伴う。遺物は土師器、瓦器、瓦質土器、瓦が出土している。瓦は近世以降のもの

の混入の可能性があるが、比較的遺存状態の良い瓦器碗が数点出土しており、13世紀代の遺構である可能性が高い。

SD2008出土遺物（第52図）

178～180は瓦器碗である。いずれも内面に粗いヘラミガキを施し、180は底部に断面三角形の高台を貼り付ける。

③井戸

SE2010（第53図）

2区西調査区の中央付近、B5・C5グリッドで検出した井戸である。平面形状はやや歪な円形を呈し、長径0.84m、短径0.77m、深さ0.28mを測る。埋土はにぶい黄褐色粘質土で、粘性は強く5cm大の礫を含む。内部は平瓦を7枚円形に組んで井戸側とし、1段だけ残存する。井筒内には平瓦片や礫が多量に出土しており、上部の井戸側を壊して井筒内に破片を廃棄して井戸封じをしたものとみられる。遺物は瓦器、瓦質土器、瓦が出土しており、うち10点を図示した。出土遺物かのうち、瓦質土器は16世紀末にさかのぼる可能性があるが、瓦の出土から17世紀代の遺構と考えたい。

SE2010出土遺物（第54～56図）

181～189は平瓦である。181・182は全体のサイズが分かるもので長さ31.2～31.8cm、幅28.0～28.2cmを測る。183～189は井戸側材として使用されたもので、上端を欠くため長さは不明ながら幅は約26.0～28.0cmを測るので、ほぼ181・182と同サイズとみられる。ただ、188は幅が23.2cmとやや小振りである。188は両側面を削っており、井戸側を構築する際の最後のパーツで、組み合わせの微調整を施したものとみられる。190は瓦質土器の菱形火鉢である。口縁は若干内湾し、端部は凸帯を貼り付けて三角形に肥厚し端部には面を持つ。外面には粗いヘラミガキを施す。

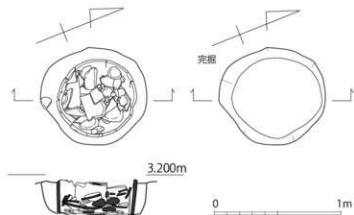
④柱穴

柱穴遺構（第57図）

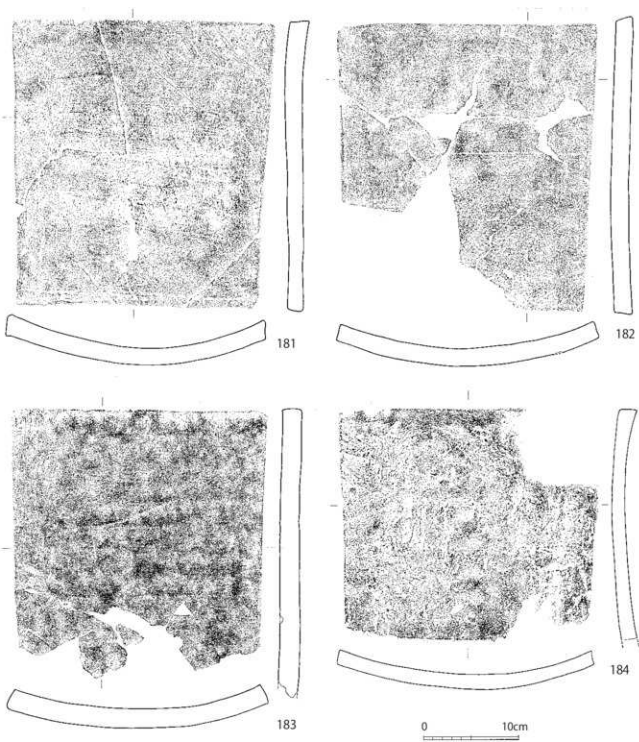
2区で検出した柱穴遺構のうち、図示可能な遺物が出土したものを中心に第57図に示す。紙数の都合上詳細は省くが、遺構の規模等詳細は遺構一覧表を参照されたい。

SP2016出土遺物（第58図）

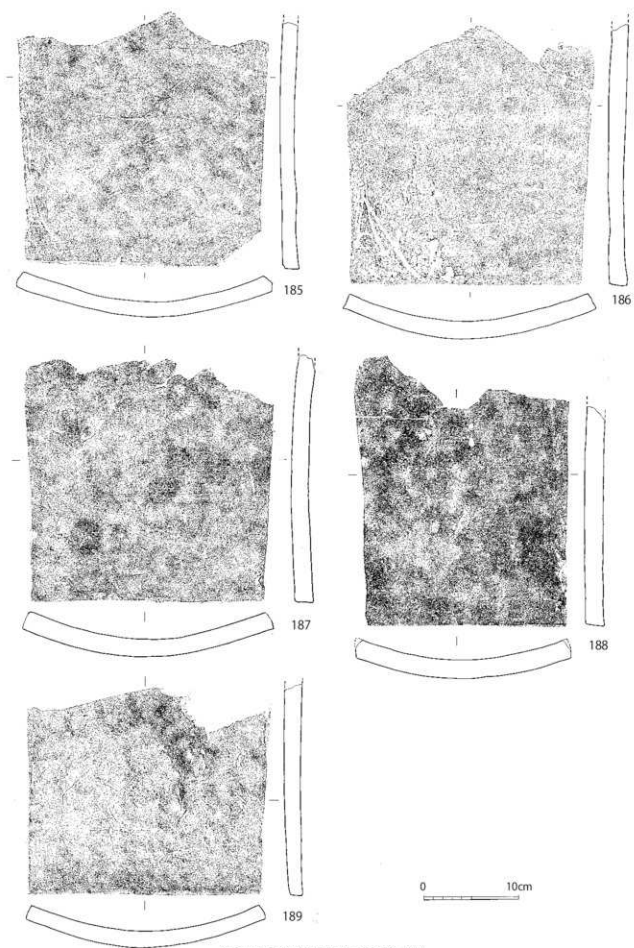
191は瓦質土器の鉢である。口縁部は玉縁状に肥厚し、内外面には粗いヘラミガキを施す。



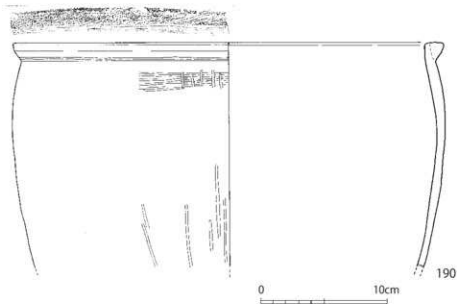
第53図 SE2010実測図（1/30）



第54図 SE2010出土遺物実測図① (1/4)



第55図 SE2010出土遺物実測図② (1/4)

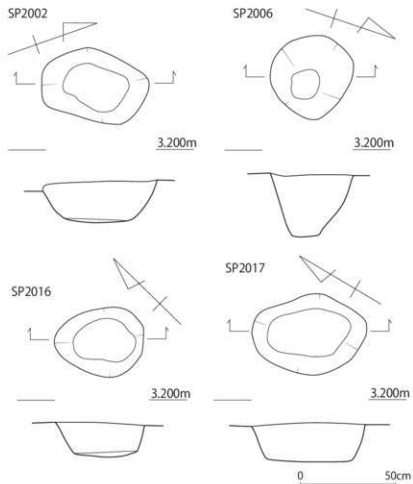


第56図 SE2010出土遺物実測図③ (1/3)

⑤2区出土遺物

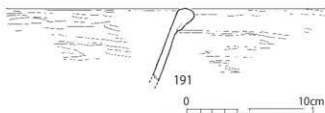
上記遺構以外で2区から出土した遺物を第59図に示す。192～197はSX2025からの出土である。SX2025は2区東調査区の南壁沿いに検出したもの(第34図)で、県道とはほぼ平行することから県道建設時の掘り込み(攪乱)と考えられる。192は土師器の控鉢で、口縁は外反し端部は丸く肥厚する。外面には凸帯を1条貼り付け、凸帯にはエビオサエを施す。宇佐高村焼の製品である。193は瓦質土器の甕で、口縁部は外反し、端部は丸く肥厚する。肩部には削り出しの段が付く。194は施釉陶器の灯火具である。195は肥前産染付磁器の丸碗で、外面に二重網目文を描く。196は染付磁器の小杯。197は小型のガラス瓶で、薬瓶であろうか。

198～204は2区の出土遺物である。198は薄手の土師器皿で、内外面にロクロ成形による多条の段が付く。いわゆる大内系の白色土師器皿で、2区ではSK2021で数点出土しており、本品もそれに関連するものである可能性が高い。199は土師器控鉢で、外面に凸帯を巡らし凸帯状にはエビオサエを施す。宇佐高村焼の製品である。200は

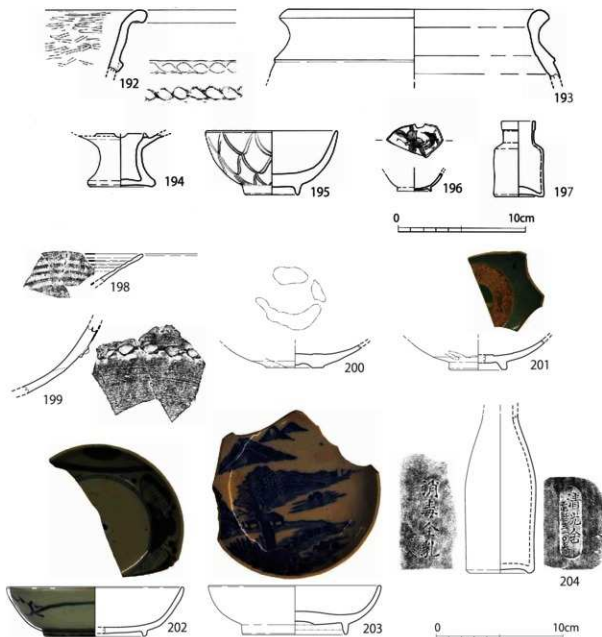


第57図 2区柱穴遺構実測図 (1/20)

唐津焼の施釉陶器皿で、見込みに砂目積みの目斑が残る。201は施釉陶器皿で、見込みには蛇の目釉剥ぎを施す。銅緑釉を施す肥前内野山窯の製品である。202は肥前産染付磁器皿。203は近代の染付磁器皿で、高台は蛇の目凹型高台である。204はガラス製の牛乳瓶で、外面正面に「清光舎 電話三一〇番」のエンボスがみられる。以上のうち、201は東調査区の表土重機掘削時、198・202～204は東調査区の遺構検出時、199は東調査区の壁面、200は西調査区の遺構検出時の出土である。



第58図 2区柱穴遺構出土遺物実測図(1/3)

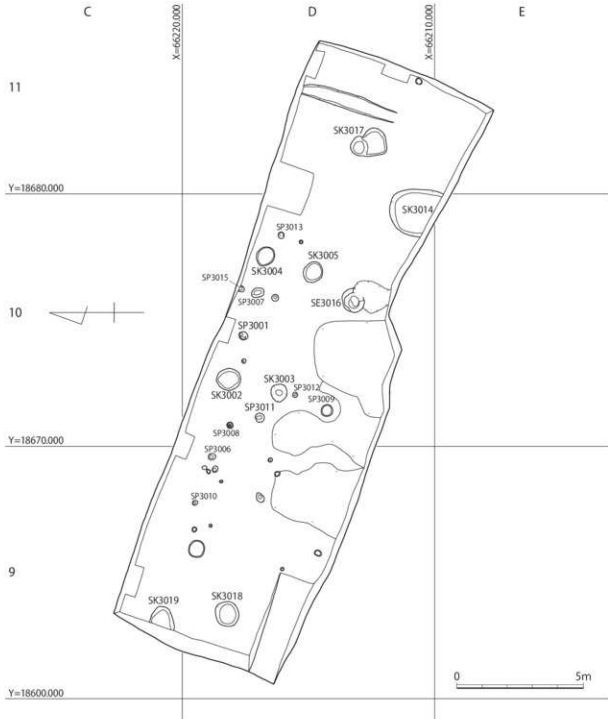


第59図 2区出土遺物実測図(1/3)

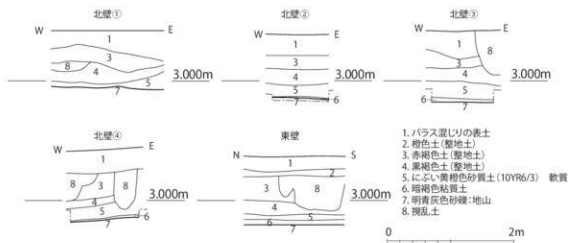
第4節 3区の調査

3区は2区と道路を挟んだ東側に設定した調査区である。調査の結果、遺構と認定したものは土坑、柱穴等、全部で19基であった(第60図)。遺構の分布状況は、2区東調査区に引き続いて散漫な状況で、またその多くも近世以降のもので占められていた。

3区北壁及び東壁の土層断面図を第61図に示す。壁面全体の土層記録はなく不十分な観察ではあるが、土層の状況は1区・2区ともほぼ共通する。第1層は盛土・整地層で、バラス混じりの表土(1層)と、赤褐色・黒褐色による整地土(3・4層)である。東壁では1層の下に橙色整地土が認められたが、部分的なものとみられる。第II層は盛土・整地前の表土で、軟質のにぶい黄橙色砂質土(5層)と、明褐色粘質土(6層)からなる。その下は明青灰色砂礫の地山層で、この上面が遺構検出面となる。遺構検出面の標高は、西端のSK3019が2915mであ



第60図 3区遺構配置図(1/150)



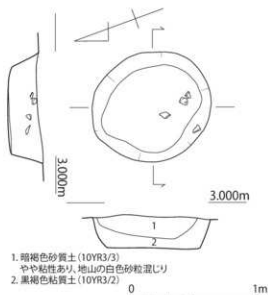
第61図 3区土層断面図 (1/60)

るのに対し、東端近くのSK3014・SK3017では2680～2715mで、2区と同様に東に向かってなだらかに傾斜していることが分かる。以下、主要な遺構や特徴的な遺物の出土した遺構を中心に報告する。その他の遺構の詳細については、遺構一覧表を参照されたい。

①土坑

SK3002 (第62図)

3区の中央北壁寄り、D10グリッドで検出した土坑である。平面形状は円形を呈し、長径0.96m、短径0.87m、深さ0.28mを測る。埋土は2層に細分され、上層は地山の白色砂粒が混じる暗褐色砂質土、下層は黒褐色粘質土である。土坑の南半部から、遺物が散発的に出土している。出土遺物には土師器、陶器、磁器、土鈴がある。出土した磁器から、遺構の年代は17世紀中頃に比定する。



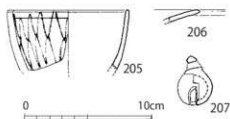
第62図 SK3002実測図 (1/30)

SK3002出土遺物 (第63図)

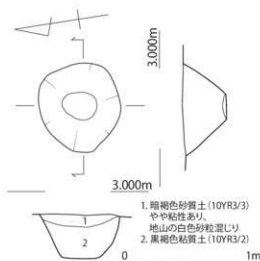
205は肥前系染付磁器丸碗で、外面に一重の網目文を描く。206は施釉陶器の皿、207は土師質焼成の土鈴である。

SK3003 (第64図)

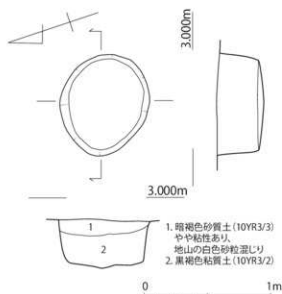
3区のはば中央、D10グリッドで検出した土坑である。平面形状は円形状を呈し、長径0.71m、短径0.64m、深さ0.36mを測る。埋土は2層に分層され、上層は地山の白色砂粒の混じる暗褐色砂質土、下層は黒褐色粘質土である。遺物は土師器、瓦器、瓦質土器、磁器、鉄釘が出土しており、うち1点を図示した。近世磁器が出土しているため、近世以降の遺構である。



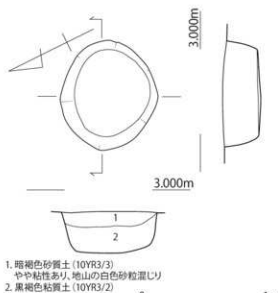
第63図 SK3002出土遺物実測図 (1/3)



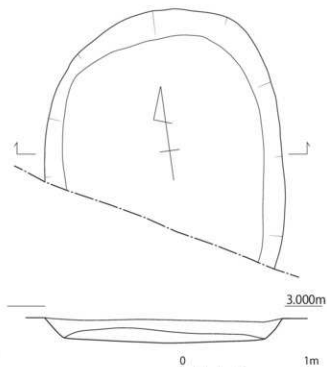
第64図 SK3003実測図(1/3)



第65図 SK3004実測図(1/30)



第66図 SK3005実測図(1/30)



第67図 SK3014実測図(1/30)

SK3003出土遺物(第72図208)

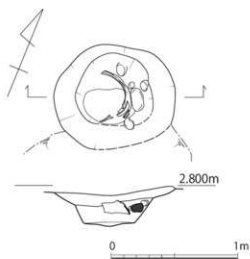
208は鉄釘である。先端部近くの破片で、身部は方形を呈する。

SK3004(第65図)

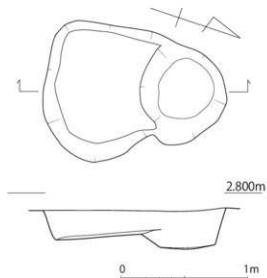
3区中央の北寄り、D10グリッドで検出した土坑である。平面形状は卵形を呈し、長径0.81m、短径0.69m、深さ0.37mを測る。埋土は2層に分層され、上層は地山の白色砂粒の混じる暗褐色砂質土でやや粘性を帯び、下層は黒褐色粘質土である。遺物は土師器、瓦質土器、磁器、土製品、鉄片が出土しており、うち1点を図示した。遺構の年代を特定できる遺物に乏しいが、磁器片が出土しており近世の遺構とみられる。

SK3004出土遺物(第72図209)

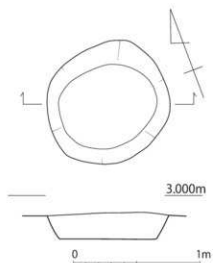
209は瓦質土器鉢の破片の周縁を研磨し円形に加工した土器片加工円盤である。



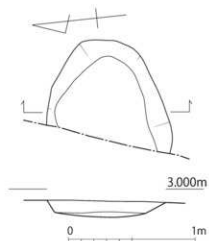
第68図 SK3016実測図 (1/30)



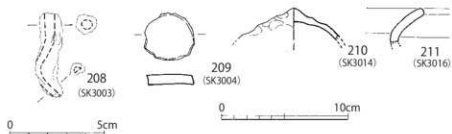
第69図 SK3017実測図 (1/30)



第70図 SK3018実測図 (1/30)



第71図 SK3019実測図 (1/30)



第72図 3区土坑出土遺物実測図 (1/3)

SK3005 (第66図)

3区のほぼ中央、D10グリッドで検出した土坑である。平面形状は略円形を呈し、長径0.87m、短径0.74m、深さ0.30mを測る。埋土は2層に分層され、上層は暗褐色砂質土でやや粘性を帯び、地山の白色砂粒が混じる。下層は黒褐色粘質土である。遺物は土師器、瓦質土器、磁器が出土しているが、いずれも細片のため図示できるものはない。そのため遺構の時期比定は困難ではあるが、磁器片の出土から近世の遺構とみられる。

SK3014 (第67図)

3区の東南部近く、D10・E10グリッドで検出した土坑である。南端部は調査区外に続くが、平面形状は隅丸長方形形状を呈し、長辺1.90m、短辺1.75m以上、深さ0.23mを測る。内部の掘り込みは浅く、断面形は皿状を呈する。遺物は土師器、瓦器、磁器、瓦が出土しており、うち1点を図示した。磁器・瓦の出土から近世以降の遺構である。

SK3014出土遺物 (第72図210)

210は土師器の蛸壺である。頂部はやや尖り、外面には指頭圧痕が顕著に残る。

SK3016 (第68図)

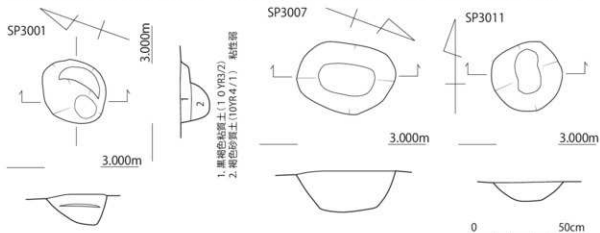
3区の中央部、D10グリッドで検出した土坑である。南側は一部攪乱の影響を受けているものの、平面形状は楕円形状を呈し、長径0.96m、短径0.83m、深さ0.28mを測る。内部は中位で屈曲し、上部は浅い掘り込みであるのに対し、下部は一段深く掘り込まれ、床面はさらに浅く皿状に窪む。この中位部分で木製の曲物や礫が出土している。こうした点から井戸の可能性もある遺構である。遺物は土師器が出土しており、うち1点を図示した。遺構の時期比定ができる遺物に乏しく、詳細な時期は明らかでない。

SK3016出土遺物 (第72図211)

211は土師器の甕である。口縁部は外反し端部は丸くおさめる。

SK3017 (第69図)

3区の東端近く、D11グリッドで検出した土坑である。平面形状は不整な瓢箪形を呈し、長辺1.45m、短辺1.10m、深さ0.32mを測る。内部は北側が一段深く掘り込まれ、南側は広い段となる。2基の土坑が重複したもので



第73図 3区柱穴遺構実測図 (1/20)

ある可能性もある。遺物は土師器、瓦器、陶器が出土しているが、いずれも細片のため図示できるものはない。そのため遺構の年代把握は困難である。

SK3018 (第70図)

3区の西端近く、D9グリッドで検出した土坑である。平面形状は円形状を呈し、直径0.98m、深さ0.21mを測る。遺物は瓦が出土しているが、細片で図示できるものはない。近世以降の遺構である。

SK3019 (第71図)

3区の西端部、C9グリッドで検出した土坑である。西半部は調査区外に続くが、平面形状は楕円形状を呈すると見られ、長径1.01m、短径0.78m以上、深さ0.14mを測る。掘り込みは浅く、断面形状は皿状を呈する。遺物は土師器が出土しているが、細片のため図示できるものはない。時期比定できる遺物がなく、遺構の時期は明らかにできない。

②柱穴

柱穴遺構 (第73図)

3区で検出した柱穴遺構のうち、図示可能な遺物が出土したものを中心に第73図に示す。紙数の都合上詳細は省くが、遺構の規模等詳細は遺構一覧表を参照されたい。

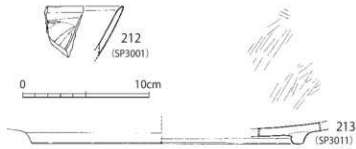
柱穴出土遺物 (第74図)

212は中国龍泉窯の青磁碗である。SP3001から出土した。213はSP3011出土の瓦質土器盤である。底部には断面逆台形状の高台を貼り付ける。

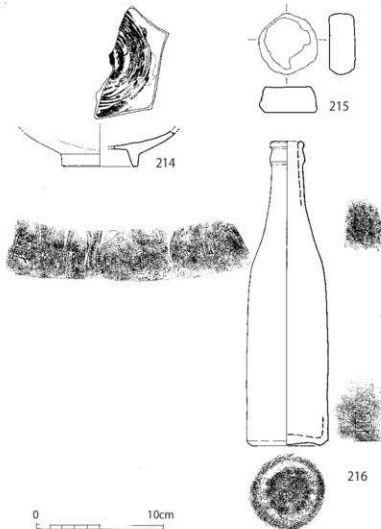
③3区出土遺物

上記遺構以外で3区から出土した遺物を第75図に示す。214は施釉陶器の鉢で、見込みに刷毛目文を施す。215は平瓦の破片の周縁を研磨し、円形に加工した加工円盤である。216はガラス製のビール瓶で、外面肩部に商標記号と「KIRIN BREWERY CO.LTD」、その背面に「L」状の記号、底部外面に商標記号、底面に「14」のエンボスを持つ。肩部にエンボスを持つ点から大正～戦時中の製品とみられる³⁾。

3) 桜井準也 2006『ガラス瓶の考古学』、六一書房



第74図 3区柱穴遺構出土遺物実測図 (1/3)



第75図 3区出土遺物実測図 (1/3)

第1表 石神城跡遺構一覧表①

遺構番号	遺構種別	調査区域	グリッド	検出高(m)	長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)	遺構地土	出土遺物	遺構の年代	備考	
SD1001	溝	1区	A2	2830	(8.60)	1.15	0.42	個別対参照	須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、東播磨須恵器、青磁、備前、瓦、木製品	16世紀後半		
SD1002	溝	1区	A1・A2	2900	(6.68)	2.52	0.67	個別対参照	須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、白磁、青磁、備前、陶器、磁軸陶器、磁器、瓦、土師、木製品、漆器	16世紀後半		
SK1003	土坑	1区	A2・B2	2890	(5.10)	(2.00)	0.92	個別対参照	土師器、瓦器、瓦質土器、東播磨須恵器、備前、青磁、磁軸陶器、磁器、陶製除付、瓦、土師、セメント瓦	近世		
SX1004	礎瓦	1区	A2・B2	2820	(3.00)	(1.60)	-		土師器、瓦質土器、磁軸陶器、瓦	近現代		
SK1005	土坑	1区	A2	2860	0.79	0.73	0.22	個別対参照				
SK1006	土坑	1区	A2	2900	(0.62)	0.63	0.12	個別対参照	灰黄褐色砂質土(10YR5/3)	土師器		
SP1007	ビッド	1区	A2	2890	0.39	0.35	0.21		暗褐色砂質土(10YR3/4)	磁器	近世以降	礎盤石
SP1008	ビッド	1区	A2	2890	0.39	0.26	0.07		暗褐色砂質土(10YR3/4)	土師器		
SK1009	土坑	1区	A2	2830	0.55	(0.28)	0.06		暗褐色砂質土(10YR3/4)	土師器、瓦器		
SK1010	土坑	1区	A2	2890	0.44	0.35	0.15		暗褐色砂質土(10YR3/4)	土師器		
SP1011	ビッド	1区	A2	2880	0.20	0.18	0.08					
SP1012	ビッド	1区	A2	2890	0.24	0.21	0.10		暗褐色砂質土(10YR3/4)			
SP1013	ビッド	1区	A2	2870	0.49	0.20	0.05		暗褐色砂質土(10YR3/4)	土師器		
SP1014	ビッド	1区	A2	2870	0.29	0.26	0.09		暗褐色砂質土(10YR3/4)	土師器		
SP1015	ビッド	1区	A2	2880	0.29	0.25	0.09		暗褐色砂質土(10YR3/4)	瓦	近世以降	
SP1016	ビッド	1区	A2	2880	0.18	0.16	0.09		暗褐色砂質土(10YR3/4)			
SP1017	ビッド	1区	A2	2860	0.40	0.22	0.12					
SP1018	ビッド	1区	A2	2880	0.19	0.17	0.14			土師器		
SE1019	井戸	1区	B4	2905	1.55	1.44	0.36	個別対参照	土師器、瓦器、東播磨須恵器、白磁	13～14世紀		
SK1020	土坑	1区	A3・B3	2935	(2.70)	(0.73)	0.09		土師器、瓦器、白磁、備前	13世紀		
SD1021	溝	1区	A3・B3・B4	2910	(8.60)	1.07	0.46	個別対参照	土師器、瓦器、瓦質土器、東播磨須恵器、青磁、備前、瓦	16世紀後半		
SK1022	土坑	1区	B3・B4	2910	(3.40)	2.72	(0.27)	個別対参照	須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、土師、石漆	14世紀		
SK1023	土坑	1区	B3	2870	0.59	0.46	0.21	個別対参照	土師器、瓦器	13世紀		
SP1024	ビッド	1区	A3	2940	0.18	0.18	0.12		土師器			
SP1025	ビッド	1区	A3	2930	0.15	0.11	0.08					
SP1026	ビッド	1区	A3	2930	0.37	0.32	0.37			瓦	近世	
SP1027	ビッド	1区	B3	2950	0.21	0.21	0.09					
SP1028	ビッド	1区	B3	2910	0.38	0.36	0.29	個別対参照	土師器、柱根		杭	
SP1029	ビッド	1区	B4	2900	0.28	0.24	0.09		黒褐色粘質土(10YR3/1)	土師器		
SK1030	土坑	1区	B4	2900	1.85	0.89	0.08		灰黄褐色粘質土(10YR4/2)	須恵器、土師器、瓦器、磁器	近世	
SP1031	ビッド	1区	B4	2820	0.45	0.34	-					
SP1032	ビッド	1区	B4	2790	0.24	0.21	-					
SP1033	ビッド	1区	B4	2800	(0.58)	0.55	0.16					
SP1034	ビッド	1区	B4	2800	0.30	0.24	0.11					
SK1035	土坑	1区	B4	2780	0.52	0.42	0.14					
SP1036	ビッド	1区	B4	2770	0.24	0.20	0.13					
SK1037	土坑	1区	B4	2780	(1.07)	(0.73)	0.16		土師器、タイル	近現代	小礎	
SP1038	ビッド	1区	B4	2790	0.32	0.30	0.12		磁軸陶器	近世		
SP1039	ビッド	1区	B4	2750	0.31	0.20	0.04		瓦器			
SP1040	ビッド	1区	B4	2870	1.43	1.00	0.22		瓦器			
SK1041	土坑	1区	B4・B5	2870	1.44	1.02	0.22		土師器、曹永通宝	近世		
SP1042	ビッド	1区	B5	2860	0.37	0.32	0.11		土師器			
SP1043	ビッド	1区	B3	2910	0.22	0.18	0.14		灰黄褐色砂質土(10YR4/2)	瓦器		
SP1044	ビッド	1区	B4	2890	0.19	0.14	0.09					

第1表 石神城跡遺構一覧表②

遺構番号	遺構種類	調査区域	グリッド	検出高 (m)	長辺 (m)	短辺 (m)	深さ (m)	遺構様式	出土遺物	遺構の年代	備考
SP1045	ビッド	1区	B3	2.910	0.20	0.16	0.13				
SP1046	ビッド	1区	A3	2.930	0.22	0.19	0.20		土師器		
SP1047	ビッド	1区	A3	2.930	0.25	0.20	0.08		瓦器		
SP1048	ビッド	1区	B4	2.900	0.32	0.23	0.16		土師器		
SP1049	ビッド	1区	A2	2.810	0.34	0.29	0.16		土師器、瓦器、瓦		
SP1050	ビッド	1区	A2	2.830	0.38	(0.25)	0.16		土師器、陶器、瓦	近世	
SP1051	ビッド	1区	B3	2.860	0.21	0.18	0.04		土師器		
SK2001	土坑	2区	B5・C5	3.050	1.02	0.60	0.24		瓦質土器	15～16世紀?	
SP2002	ビッド	2区	B5・C5	3.040	0.58	0.37	0.23		土師器、瓦器、瓦質土器、 陶器陶器	近世	
SP2003	ビッド	2区	B5	3.070	0.29	0.22	0.29		瓦器	中世	
SK2004	土坑	2区	B5	3.070	0.64	0.50	0.19		土師器、瓦器	中世	
SP2005	ビッド	2区	B5	3.080	0.48	0.28	0.20		瓦器	中世	
SP2006	ビッド	2区	B5	3.080	0.45	0.45	0.33				
SP2007	ビッド	2区	B5	3.070	0.45	0.41	0.25		青磁	中世	
SD2008	溝	2区	B5・C5	3.070	(3.83)	1.35	0.25		土師器、瓦器、瓦質土器、 瓦	13世紀代	
SK2009	土坑	2区	B5	3.120	0.66	0.49	0.23		瓦質土器		
SE2010	井戸	2区	B5・C5	3.170	0.84	0.77	0.28	にぶ・黄褐色粘質土 (10YR4/3)	瓦器、瓦質土器、瓦	近世	瓦7枚程度の井戸
SK2011	土坑	2区	B5・C5	3.140	0.90	0.74	0.18		土師器、陶器、瓦、 プラスチック	現代	
SP2012	ビッド	2区	C5	3.160	0.24	0.17	0.04		陶器、陶器陶器、陶器染 付、土鈴	近世	
SK2013	土坑	2区	B5	3.130	1.00	0.85	0.12		土師器		
SK2014	土坑	2区	C7	3.130	2.10	1.16	0.16		瓦	近世	
SK2015	土坑	2区	C6	3.005	1.70	1.45	0.17		土師器、白磁、陶器、磁器、 陶器染付	近世	
SP2016	ビッド	2区	C6	3.080	0.47	0.37	0.17		瓦質土器		
SP2017	ビッド	2区	C6	3.070	0.61	0.43	0.19		磁器	近世	
SK2018	土坑	2区	C7	3.090	0.83	0.71	0.17		磁器、鉄釘、ガラス瓶	近代	
SP2019	ビッド	2区	C7	3.100	0.42	0.38	0.14				
SK2020	土坑	2区	C7	3.100	0.80	0.74	0.40		瓦質土器、磁器、瓦	17世紀前半?	埋蔵
SK2021	土坑	2区	C7	3.100	2.31	1.37	0.20		土師器、青磁、備前	15世紀末	大内系土器 器類
SK2022	土坑	2区	C7	2.985	1.56	1.50	0.23	灰黄褐色砂質土 (10YR3/3)	瓦質土器、磁器、木製品 (下駄)	近世	
SK2023	土坑	2区	C8	2.980	0.87	0.56	0.27	灰黄褐色砂質土 (10YR3/3)	土師器、瓦質土器、陶器 陶器、磁器、瓦		
SK2024	土坑	2区	C8	3.000	0.62	0.44	0.06	灰黄褐色砂質土 (10YR3/3)	土師器、瓦質土器、陶器 陶器、磁器、瓦		
SK2025	散乱	2区	C6・C7・D7・D8	3.090	(19.00)	1.60	0.19		道徳器、土師器、瓦器、 瓦質土器、陶器陶器、陶 器染付、瓦、ガラス	近現代	道路建設時の 散乱
SK2026	土坑	2区	B6・B7	3.060	(0.92)	(0.31)	0.23	灰褐色粘質土 (10YR5/2)	瓦質土器、陶器陶器、磁 器、瓦、ガラス	近現代	近代の埋蔵を ゴミ穴に転用
SP9001	ビッド	3区	D10	2.860	0.38	0.33	0.16		青磁		
SK3002	土坑	3区	D10	2.895	0.96	0.87	0.28	個別同参照	土師器、陶器陶器、磁器、 土鈴	17世紀中頃	
SK3003	土坑	3区	D10	2.820	0.71	0.64	0.36	個別同参照	土師器、瓦器、瓦質土器、 磁器	近世	
SK3004	土坑	3区	D10	2.820	0.78	0.70	0.38	個別同参照	土師器、瓦質土器、磁器、 土器片加工片、鏡片	近世	
SK3005	土坑	3区	D10	2.820	0.87	0.74	0.30	個別同参照	土師器、瓦質土器、磁器	近世	
SP9006	ビッド	3区	D9	2.820	0.30	0.26	0.19		土師器		
SP9007	ビッド	3区	D10	2.860	0.53	0.37	0.21		土師器、瓦器		
SP9008	ビッド	3区	D10	2.840	0.25	0.25	0.34				
SP9009	ビッド	3区	D10	2.800	0.49	0.47	0.13		土師器、瓦質土器		
SP9010	ビッド	3区	D9	2.875	0.23	0.19	0.15		土師器、瓦		
SP9011	ビッド	3区	D10	2.800	0.37	0.36	0.11		土師器		
SP9012	ビッド	3区	D10	2.795	0.22	0.20	0.15		土師器		
SP9013	ビッド	3区	D10	2.770	0.27	0.24	0.19		土師器		
SK3014	土坑	3区	D10・D11・E10	2.715	1.90	(1.75)	0.22		土師器、瓦器、磁器、瓦	近世以降	
SP9015	ビッド	3区	D10	2.860	0.24	(0.21)	0.14		土師器		
SE3016	井戸	3区	D10	2.795	0.96	0.83	0.32		土師器	中世?	
SK3017	土坑	3区	D11	2.680	1.45	1.10	0.32		土師器、瓦器、陶器?		
SK3018	土坑	3区	D9	2.865	0.98	0.98	0.21		瓦	近世以降	
SK3019	土坑	3区	C9	2.915	1.01	(0.78)	0.14		土師器		

第2表 石神城跡遺物観察表(土器・陶磁器・瓦)①

発掘番号	器種	出土地点	法量 (cm)		形量調整		色調 (外壁/内面)	備考	
			口径	底径	外壁	内面			
第8区	1	土師器 坏	1区 SK1003	口径(12.2) 底径(7.4)	2.4	磨滅・回転糸切痕	磨滅	褐色/褐色	
	2	土師器 坏	1区 SK1003	底径 8.0	(1.0)	ナデ・回転糸切痕	磨滅	灰白色・褐色/ にぶい褐色/褐色	
	3	土師器 罎	1区 SK1003		(5.7)	ヨコナデ・タテハケ	ヨコナデ	淡褐色/淡褐色	
	4	土師器 罎	1区 SK1003		(4.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい褐色/ にぶい黄褐色	
	5	土師器 罎	1区 SK1003	底径 1.6	(3.2)	ナデ	指頭上痕	浅黄褐色/ 浅黄褐色	
	6	瓦器 椀	1区 SK1003		(4.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色・黒色/ 灰白色・黒色	黒斑あり
	7	瓦器 椀	1区 SK1003	底径(7.2)	(2.3)	磨滅	へうミガキ	暗灰色/暗灰色	黒斑あり
	8	瓦質土器 罎	1区 SK1003		(6.8)	工具ナデ	工具ナデ	暗褐色/暗灰色	外面覆付着
	9	瓦質土器 罎	1区 SK1003		(6.2)	ナデ	ナデ	灰褐色/ にぶい黄褐色	外面覆付着
	10	瓦質土器 摺鉢	1区 SK1003		(3.5)	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色・褐色/ 灰褐色	
	11	瓦質土器 摺鉢	1区 SK1003		(4.8)	ナデ	ナデ・指目	灰色/灰色	外面覆付着
	12	瓦質土器 摺鉢	1区 SK1003		(6.9)	ヨコナデ・ナデ・指頭 上痕	ヨコナデ・指目	灰白色/灰色	
	13	瓦質土器 摺鉢	1区 SK1003 1層	口径(11.2)	(1.6)	磨滅	指目	にぶい褐色/ 褐色	
	14	施釉陶器 皿	1区 SK1003	口径(10.0) 底径(2.9)	3.0	施釉	施釉・釉の目録調査	オリーブ色/ 緑オリーブ色	肥前内野山窯 緑釉施
	15	陶胎染付 甕	1区 SK1003	口径(10.2)	(3.4)	施釉・染付	施釉	緑灰色/緑灰色	肥前
	16	磁器 瓶	1区 SK1003 トレンチ	底径(6.4)	(4.0)	施釉・染付	蓋物・ヨコナデ	明緑灰色/ にぶい黄褐色	肥前
第12区	27	白磁 甕	1区 SK1020		(4.8)	施釉	施釉	灰色/灰色	中国産
	28	土師器 坏	1区 SK1020		2.4	磨滅・回転糸切痕	磨滅	淡褐色・淡褐色/ 黄褐色・淡褐色	
第14区	29	瓦器 椀	1区 SK1020		(2.7)	ヨコナデ・指頭上痕	ヨコナデ・へうミガキ	灰色・暗灰色/ 灰色・黒灰色	
	30	土師器 皿	1区 SK1022	口径(9.4) 底径(6.5)	1.3	ヨコナデ・回転糸切痕	ヨコナデ	浅黄褐色/浅黄褐色	
	31	土師器 坏	1区 SK1022	口径 15.0 底径 8.9	3.1	ヨコナデ・回転糸切痕・ 板状上痕	ヨコナデ・ナデ	淡褐色色/ 淡褐色色	
	32	土師器 坏	1区 SK1022	底径 8.3	(1.3)	ヨコナデ・回転糸切痕	ヨコナデ・ナデ	淡黄褐色/ 淡黄褐色	
	33	築地器 甕	1区 SK1022	胸径 (27.2)	(25.7)	格子目タタキ	ヨコナデ・指頭上痕		
	34	土師器 椀	1区 SK1022	口径 15.1 底径 6.2	5.6	ヨコナデ・へうミガキ	へうミガキ	灰白色/灰白色	古代
	35	瓦器 椀	1区 SK1022		(3.3)	ヨコナデ・指頭上痕	ヨコナデ	灰色・灰白色/ 灰色・灰白色	
	36	瓦器 椀	1区 SK1022		(2.2)	ミガキ・指頭上痕	ミガキ	灰白色/灰白色	
第15区	37	瓦器 椀	1区 SK1022	底径(6.8)	(4.9)	ナデ・板状上痕	ナデ	淡黄褐色/淡黄褐色	
	40	瓦質土器 摺鉢	1区 SK1022		(5.0)	ナデ・指頭上痕	ヨコナデ・指目	暗褐色/暗褐色	
	42	瓦器 椀	1区 SK1023	口径 15.4 底径 7.2	5.5	ヨコナデ・へうミガキ・ 指頭上痕	ヨコナデ・へうミガキ	灰色・灰白色/ 灰色・灰白色	
	43	瓦器 椀	1区 SK1023	底径(6.4)	(1.4)	ナデ・ヨコナデ	ナデ	灰白色/灰白色	
	44	土師器 甕	1区 SK1023		(6.6)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	にぶい黄褐色/ にぶい黄褐色	
	45	土師器 皿	1区 SK1030		1.3	ヨコナデ・回転糸切痕	ヨコナデ	にぶい黄褐色/ にぶい黄褐色	
	46	磁器 甕	1区 SK1030	口径(11.2)	(5.5)	施釉	施釉	暗緑灰色/ 灰白色・緑灰色	肥前
	48	白磁 甕	1区 SD1001 黒色粘土		(2.2)	施釉	施釉	灰白色/灰白色	中国産 玉縁陶
第23区	49	青磁 甕	1区 SD1001 砂質上層		(2.6)	施釉・蓮弁文	施釉	青緑色/青緑色	中国 龍泉窯
	51	土師器 皿	1区 SD1001 砂質上層	口径(7.4) 底径(5.6)	1.0	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	にぶい褐色/ にぶい褐色/褐色	
	52	土師器 罎	1区 SD1001 砂質上層	口径(7.8) 底径(6.4)	1.3	ヨコナデ・回転糸切痕	ヨコナデ	淡褐色/淡褐色	
	53	瓦器 椀	1区 SD1001 トレンチ		(2.7)	ヨコナデ・へうミガキ	ヨコナデ・へうミガキ	灰白色・黒色/ 灰白色・黒色	
	54	瓦器 椀	1区 SD1001 黒色粘土	口径(15.8)	(3.0)	ヨコナデ・へうミガキ	ヨコナデ・へうミガキ	灰白色・黒色/ 灰白色・黒色	
	55	瓦器 椀	1区 SD1001	口径(15.0)	(2.3)	ヨコナデ・ナデ・指頭 上痕	ヨコナデ	黒色・灰白色/ 黒色・灰白色	
	56	瓦質土器 罎	1区 SD1001 砂質上層		(6.1)	ヨコナデ	ヨコナデ・工具ナデ	黒灰色/暗灰色	外面覆付着
	57	瓦質土器 罎	1区 SD1001		(5.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	黒色/暗灰色	外面覆付着
	58	瓦質土器 罎	1区 SD1001 黒色粘土	口径(23.8)	(9.0)	ヨコナデ	ミガキ・ナデ	黒色/暗褐色	外面覆付着
	59	瓦質土器 火鉢	1区 SD1001 砂質上層		(8.8)	ミガキ・ナデ・凸帯・ スタンプ文	ナデ・工具ナデ	黒褐色/黒褐色	

第2表 石神城跡遺物観察表(土器・陶磁器・瓦)②

押印番号	器種	出土地点	法量 (cm)		表面調整		色調 (外壁/内面)	備考	
			直径	高さ	外壁	内面			
第23図	60	瓦質土器 火鉢 1区	SD1001 黒色粘土		径(7)	ミガキ・ナデ・凸部・ スタンブ文	工具ナデ	黒色/黒色	
	61	瓦質土器 鉢 1区	SD1001 黒色粘土		(10.2)	ヨコナデ・ミガキ	ミガキ	黒色/黒色	
	62	瓦質土器 火鉢 1区	SD1001 黒色粘土		(3.1)	ヨコナデ・ナデ・指頭 圧痕	工具ナデ	黒色/黒灰色	
	63	瓦質土器 鉢 1区	SD1001 砂質土層	口径 (30.0)	(5.4)	ヨコナデ	ナデ	暗灰色/暗灰色	片口鉢
	64	瓦質土器 釜 1区	SD1001 黒色粘土	口径 (13.8)	(2.9)	タテハケ→ヨコナデ	ヨコナデ・ヨコハケ	褐色色/褐色色	
	65	瓦質土器 釜 1区	SD1001 黒色粘土	口径 (16.4)	(18.6)	指頭圧痕→ヨコナデ・ ケズリ	ハケ→ヨコナデ・指頭 圧痕	黒褐色色・褐色色/ 淡褐色色・灰褐色色	
	69	白磁 皿 1区	SD1002		(2.5)	磨輪	磨輪	白色/白色	
	70	土師器 皿 1区	SD1002 黒色粘土	口径 (7.8) 底径 (6.8)	1.1	ヨコナデ・板状圧痕	ナデ	にぶい・褐色色/ にぶい・黄褐色色	
	71	土師器 甕 1区	SD1002		(3.6)	ヨコナデ・工具ナデ	ヨコナデ	灰褐色色/灰褐色色	
	72	瓦器 椀 1区	SD1002 黒色粘土		(3.7)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	灰白色・黒色/ 灰白色・黒色	
	第25図	73	瓦器 椀 1区	SD1002	口径 (12.6)	3.1	ヨコナデ・工具ナデ	ナデ	褐色色・暗灰色/ 褐色色・暗灰色
74		瓦器 椀 1区	SD1002		(3.6)	ナデ	ナデ	灰白色/灰白色	
75		瓦器 椀 1区	SD1002 砂質土層	底径 (6.4)	(3.2)	ナデ	ナデ→ミガキ	灰白色/灰白色	
76		瓦器 椀 1区	SD1002 砂質土層	底径 (6.0)	(1.3)	ナデ	ナデ	黒褐色色/黒褐色色	
77		瓦質土器 鍋 1区	SD1002 黒色粘土		(3.0)	ヨコナデ・ナデ	ナデ	黒色/灰褐色色	
78		瓦質土器 鉢 1区	SD1002 黒色粘土		(7.7)	ヨコナデ・ 洗輪	ヨコナデ・ナデ	にぶい・褐色色/ にぶい・褐色色	
79		瓦質土器 鉢 1区	SD1002 黒色粘土		(4.3)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	暗褐色色/暗褐色色	
80		瓦質土器 摺鉢 1区	SD1002		(4.2)	ナデ	ナデ・摺目	暗灰色/暗灰色	
81		瓦質土器 火鉢 1区	SD1002 砂質土層		(4.3)	ナデ	ナデ	暗灰色/暗灰色	
82		瓦質土器 摺鉢 1区	SD1002 砂質土層		(1.4)	ナデ	ナデ・摺目	灰黄褐色色/ 灰白色	
83		瓦質土器 釜 1区	SD1002		(7.4)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ→ハケ目・指 頭圧痕	褐色色/褐色色	
第27図	84	焼締陶器 摺鉢 1区	SD1002 ペルト3層		(5.9)	ヨコナデ	ヨコナデ・摺目	灰褐色色・赤褐色色/ 茶褐色色	備前焼
	85	赤生土器 甕 1区	SD1002 黒色粘土	底径 (3.4)	(3.6)	ナデ	ナデ・絞り痕	にぶい・褐色色/ にぶい・褐色色	
	86	須恵器 無須恵 1区	SD1002 黒色粘土		(6.4)	ナデ	ヨコナデ	褐色色/褐色色	
	89	土師器 皿 1区	SD1021		1.4	ヨコナデ・回転糸切痕	ヨコナデ	黄褐色色/黄褐色色	
	90	土師器 坪 1区	SD1021	直径 4.7	(1.1)	ヨコナデ・回転糸切痕	ヨコナデ	にぶい・褐色色/ にぶい・褐色色	金雲母混入
	91	土師器 蓋 1区	SD1021	口径 12.0 幅み部 1.7	2.2	ナデ・ヘラケズリ・ヨ コナデ	ナデ・ヨコナデ	淡褐色色/ 灰白色	
	92	土師器 鍋 1区	SD1021		(3.6)	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	黒灰色/黒灰色	
	93	土師器 鍋 1区	SD1021		(3.3)	ヨコナデ・ナデ→指頭 圧痕	ハケ目	灰白色/灰白色	外面黒斑あり
	94	土師器 鍋 1区	SD1021		(4.6)	ナデ	ハケ目	黒色/ にぶい・黄褐色色	
	95	瓦器 椀 1区	SD1021	口径 (12.4)	(3.0)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ヘラミガキ	暗灰色色・灰色/ 淡褐色色・灰色	
	96	瓦器 椀 1区	SD1021	口径 13.2	3.1	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ→指頭圧痕→ ナデ	灰色色・黒灰色/ 灰色色・黒灰色	内面黒斑あり
第28図	97	瓦器 椀 1区	SD1021 中央風丸付蓋		(4.0)	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	灰色色/灰色色/ 灰色色/灰白色	
	98	須恵器 甕 1区	SD1021 SK1022-22	底径 14.0	(8.0)	ナデ・ケズリ	ナデ・指頭圧痕	灰白色/暗灰色	
	101	瓦質土器 釜 1区	SD1021	口径 (14.5)	(5.7)	ヨコナデ・工具ナデ	ヨコナデ・指頭圧痕	黒灰色色/黒灰色	
	102	瓦質土器 火鉢 1区	SD1021		(18.8)	ミガキ・凸部・スタン ブ文	ヨコナデ・ナデ	暗灰色色・明灰色/ 灰褐色色	
	103	瓦質土器 火鉢 1区	SD1021 中央風丸付蓋		(4.8)	ヨコナデ・ナデ・凸部・ スタンブ文	ナデ	灰色色/灰色色	
	104	瓦質土器 鍋 1区	SD1021		(7.9)	ヨコナデ・指頭圧痕・ 工具ナデ	ヨコナデ・工具ナデ→ ナデ	黒褐色色/灰褐色色	外面煤付着
	105	瓦質土器 鍋 1区	SD1021		(7.0)	ヨコナデ・指頭圧痕・ ヘラケズリ	指頭圧痕・ナデ・ヨコ ナデ	黒色/ 淡褐色色・淡灰褐色色	
	106	瓦質土器 鍋 1区	SD1021 中央風丸付蓋		(7.0)	ナデ→指頭圧痕・工具 ナデ	ナデ→指頭圧痕・ミガ キ	黒灰色色・灰色色/ 灰色色	外面煤付着
	107	瓦質土器 鍋 1区	SD1021		(8.0)	ヨコナデ	ヨコナデ・工具ナデ	黒色/灰白色	外面煤付着
	108	瓦質土器 鍋 1区	SD1021		(7.0)	ヨコナデ・ナデ・指頭 圧痕	ヨコナデ	黒灰色色・灰色色	外面煤付着
	109	瓦質土器 鍋 1区	SD1021		(8.0)	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ナデ・指頭 圧痕	黒灰色色・黒灰色	外面煤付着
110	瓦質土器 鍋 1区	SD1021		(8.0)	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ナデ・指頭 圧痕	黒灰色色/黒灰色	外面煤付着	

第2表 石神城跡遺物観察表(土器・陶磁器・瓦)③

発掘番号	名称	出土地点	法量 (cm)		形量調整		色調 (外壁/内面)	備考
			直径	高さ	外壁	内面		
第28回	111 瓦質土器 罎 1区 1区 SD1021	口径 (47.3)	(7.2)	指面直重・工具ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ・ヘラミガキ	黒色・暗茶褐色/灰色・暗灰色	外面覆付着	
	112 瓦質土器 罎 1区 1区 SD1021	口径 (47.6)	(9.4)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	黒色/灰色	外面覆付着	
	113 瓦質土器 摺鉢 1区 1区 SD1021	口径 (37.5)	(7.5)	ナデ・ハケ目	ヨコハケ・摺目	灰色/灰色		
	114 瓦質土器 摺鉢 1区 1区 SD1021	口径 (26.4)	(11.4)	ヨコナデ・ナデ・指面直重・ケズリ	ヨコナデ・ナデ・摺目	暗灰色/暗灰色		
	115 瓦質土器 摺鉢 1区 1区 SD1021	口径 (29.7) 底径 (15.8)	12.7	ヨコナデ・指面直重・工具ナデ・ケズリ	指面直重・ヨコナデ・ナデ・摺目	黒色/暗褐色	外面覆付着 二次焼成	
	116 瓦質土器 摺鉢 1区 1区 SD1021・砂質土層・中央部	口径 (30.8) 底径 12.8	13.5	ヨコナデ・指面直重・ケズリ	工具ナデ・摺目	暗灰色/暗灰色	見込み十字状の摺目	
第30回	120 土師器 埴 1区 1区 SE1019	口径 11.8 底径 8.8	2.2	ヨコナデ・回転糸切痕	ヨコナデ・ナデ	淡茶褐色/ 淡茶褐色		
	121 土師器 埴 1区 1区 SE1019 黒色粘土層		2.3	ヨコナデ・回転糸切痕	ヨコナデ	褐色/褐色		
	122 土師器 椀 1区 1区 SE1019	底径 (6.8)	(1.3)	ヨコナデ	ナデ・ミガキ?	にぶい・褐色/ にぶい・褐色	高台内に放射状の線刻あり	
	123 土師器 罎 1区 1区 SE1019 検出		(6.4)	指面直重、覆及び鈿の のため不明	ナデ・ヨコハケ	暗褐色/ 暗褐色	内面覆付着	
	124 土師器 罎 1区 1区 SE1019		(2.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色/ 褐色		
	125 土師器 餅付罎 1区 1区 SE1019		(12.1)	指面直重・ナデ	ヨコハケ	淡褐色・淡赤色/ 淡褐色	防長系	
	126 瓦器 椀 1区 1区 SE1019	口径 (14.6)	(3.4)	ナデ→ヘラミガキ	ナデ→ヘラミガキ	灰褐色/灰褐色		
	127 瓦器 椀 1区 1区 SE1019		(3.4)	ナデ・ヨコナデ	ナデ→ヘラミガキ	灰褐色・黒灰色/ 灰褐色・黒灰色		
	128 瓦器 椀 1区 1区 SE1019		(3.4)	指面直重・ナデ・ヨコナデ	ナデ→ヘラミガキ	灰褐色・黒灰色/ 灰褐色・黒灰色		
	129 瓦器 椀 1区 1区 SE1019		(3.7)	指面直重・ヨコナデ・ナデ	ナデ	暗灰色・黒灰色/ 暗灰色・黒灰色		
130 瓦器 椀 1区 1区 SE1019	底径 6.0	(2.0)	ヨコナデ・ナデ	ナデ	灰色・灰色	内面覆付着		
第32回	133 瓦質土器 摺鉢 1区 1区 SP1013		(3.8)	指面直重・ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ・ハケ目・摺目	淡褐色・暗灰色/ 灰色		
	136 土師器 小皿 1区 1区 SP1050	口径 5.8 底径 3.9	0.8	ナデ・回転糸切痕	ナデ	にぶい・黄褐色/ にぶい・黄褐色		
	137 施釉陶器 茶入? 1区 1区 SP1050	口径 (3.8)	(2.0)	施釉	施釉	暗赤褐色/ 暗赤褐色		
第33回	138 土師器 罎 1区 1区 確認調査 トレンチ	口径 (43.6)	(9.3)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	褐色/褐色	外面覆付着	
	139 土師器 羽釜 1区 1区 東区清浄時		(5.5)	ヨコナデ・ハケ目	ヨコハケ・ナデ	灰褐色/ 浅黄褐色	外面覆付着	
	140 土師器 甕 1区 1区 西区 機械掘削		(7.4)	ヨコナデ・未調整	未調整	浅黄褐色/ 浅黄褐色		
	141 東播系須恵器 摺鉢 1区 1区 西区 機械掘削		(7.5)	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色/灰色	片1鉢	
	142 瓦質土器 摺鉢 1区 1区 西区 機械掘削		(4.9)	ヨコナデ・ヨコハケ・指面直重	ハケ目・摺目	灰白色・灰色/ 灰白色		
第34回	143 瓦質土器 摺鉢 1区 1区 西区 表土		(3.6)	ケズリ・ナデ	ナデ・摺目	灰白色/灰色		
	144 染付磁器 甕 1区 1区 西区 清浄時	底径 4.6	(1.1)	施釉	施釉	明オリブ灰色/ 明オリブ灰色	肥前 高台内異体字	
	145 染付磁器 甕 1区 1区 西区 機械掘削	口径 10.2 底径 3.7	5.4	施釉	施釉	明緑灰色/ 灰白色	肥前 明治初年	
第36回	147 瓦質土器 火鉢 2区 2区 SK2001		(6.7)	ナデ・ハラケズリ	指面直重・ナデ	黒灰色/黒灰色		
第38回	149 陶器染付 甕 2区 2区 SK2015	口径 (9.8) 底径 5.0	7.3	施釉・露胎・染付	施釉	灰色/灰色	肥前	
	150 陶器染付 香炉 or 灰溜し 2区 2区 SK2015	口径 (8.6) 底径 (5.4)	4.0	施釉・露胎	施釉	にぶい・赤褐色/ 灰色/灰色	肥前	
	151 陶器染付 甕 2区 2区 SK2015		(6.7)	施釉・染付	露胎・輪だれ	灰色/ 灰褐色/灰色	肥前	
	152 施釉陶器 甕 2区 2区 SK2015	底径 4.5	(5.0)	施釉・露胎	施釉	にぶい・黄褐色/ にぶい・褐色	肥前 京焼或陶器	
	153 施釉陶器 火入 2区 2区 SK2015	口径 (10.8) 底径 5.0	7.0	溝輪・施釉・露胎	施釉・露胎	にぶい・褐色/ にぶい・褐色	肥前 (唐津) 高台内書体	
	154 施釉陶器 鉢 2区 2区 SK2015	底径 (10.6)	(5.3)	露胎・輪だれ	施釉・白焼刷目文	にぶい・赤褐色/ 灰褐色/暗褐色	肥前 (唐津)	
	155 施釉陶器 鉢 2区 2区 SK2015		(4.7)	ヨコナデ・沈線	ヨコナデ・摺目	暗赤褐色/にぶい・赤褐色	堺	
	156 ガラス容器 調味料瓶 2区 2区 SK2018	口径 (2.2) 底径 4.8		(14.3)	型成形	型成形	明緑灰色/ 明緑灰色	気泡多数
157 ガラス容器 化粧水瓶 2区 2区 SK2018	口径 2.0 底径 2.4	9.6	型成形・エンボス (ホーカカーブ/菊)	型成形	透明/透明	コルク栓残存、 内容物固形化		
第42回	159 瓦器 椀 2区 2区 SK2020		(2.1)	ヨコナデ→ミガキ	ヨコナデ	暗灰色・灰色/ 暗灰色・灰色		
第44回	160 瓦質土器 火鉢 2区 2区 SK2020	口径 (46.0) 底径 35.1	40.5	ヨコナデ・ナデ・凸帯・スタンプ文	ヨコナデ・工具ナデ	灰白色/灰白色		
162 土師器 甕 2区 2区 SK2021	口径 (13.8) 底径 (6.0)	2.6	ヨコナデ・回転糸切痕	ヨコナデ・ナデ	にぶい・黄褐色/ にぶい・黄褐色	大内系土師器		

第2表 石神城跡遺物観察表(土器・陶磁器・瓦)④

押印番号	器種	出土地点	法量 (cm)	表面調整		色調 (外壁・内面)	備考	
				高さ	外径			
第44回	163	土師器 皿 2区	SK2021 口径(14.9) 底径(6.7)	3.0	ヨコナデ・回転糸切痕	ヨコナデ・ナデ	にぶい・黄褐色/ にぶい・黄褐色	大内系土師器
	164	土師器 皿 2区	SK2021 底径(8.4)	(2.6)	ヨコナデ・回転糸切痕	ヨコナデ・ナデ	にぶい・黄褐色/ にぶい・黄褐色	大内系土師器
	165	土師器 皿 2区	SK2021 底径(9.2)	(2.6)	ヨコナデ・回転糸切痕	ヨコナデ・ナデ	灰褐色/灰褐色	大内系土師器
	166	青磁 皿 2区	SK2021	(2.4)	施釉	施釉	淡緑色/淡緑色	中国・龍泉窯
第46回	167	焼締陶器 摺鉢 2区	SK2021 口径(30.0) 底径 14.0	12.2	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・摺目	明赤褐色/ 明赤褐色	備前焼
	168	瓦葺土器 鉢 2区	SK2022	(4.1)	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色/灰褐色	
	169	瓦葺土器 香炉 or 華瓶 2区	SK2022	(2.7)	ナデ・スタンプ文	ヨコナデ	暗灰色/灰色	
第48回	170	染付磁器 碗 2区	SK2022	(4.1)	施釉・染付	施釉	白色/白色	肥前
	172	施釉陶器 碗 2区	SK2023 口径(10.7)	(4.3)	施釉・露胎	施釉・露胎	不明	
第50回	173	染付磁器 碗 2区	SK2026 口径(10.8) 底径 5.0	5.2	施釉	施釉	輪周赤褐色/ 輪周赤褐色	
	174	染付磁器 段重 2区	SK2026 口径 11.0 底径 9.6	6.8	施釉・型紙摺絵	施釉・口縁輪ケズリ	灰白色/灰白色	肥前 明治初年
	175	染付磁器 皿 2区	SK2026 口径(12.6) 底径 7.2	2.8			白色/白色	肥前 明治初年
	176	ガラス容器 汁薬瓶 2区	SK2026 口径 1.4 底径 2.2	5.3	型成形・エンボス(目 蓋部・筒状/佐野薬 房)	型成形	透明/透明	
第52回	178	瓦器 椀 2区	SD2008 口径(15.2)	(4.9)	ヘラケズリ・ヨコナデ	ナデ+ヘラミガキ	灰色・淡灰黄色/ 灰色・淡灰黄色	
	179	瓦器 椀 2区	SD2008 口径(15.8)	(5.0)	ヨコナデ・擦面口縁	ナデ+ヘラミガキ	淡赤褐色/ 淡灰色	二次焼成
	180	瓦器 椀 2区	SD2008 底径(6.8)	(4.6)	ナデ・ヨコナデ・未調 整	ナデ+ヘラミガキ	黒灰色・淡灰黄色/ 黒灰色・淡灰黄色	
第56回	190	瓦葺土器 甃 2区	SE2010 口径(33.6)	(17.7)	ヨコナデ・ナデ・ヘラ ミガキ・直線	ヨコナデ・ナデ	灰褐色/灰褐色	
第58回	191	瓦葺土器 鉢 2区	SP2016	(5.7)	ヨコナデ+ミガキ	ミガキ	灰黄色/灰黄色	
第59回	192	土師器 摺鉢 2区	SX2025	(5.0)	ヨコナデ・割目凸帯	ミガキ	にぶい・褐色/ にぶい・褐色	宇佐・高村焼
	193	瓦葺土器 甃 2区	SX2025 口径(19.8)	(5.5)	ヨコナデ・ミガキ・ケ ズリ	ヨコナデ・ナデ	黒色/暗灰色	
	194	施釉陶器 灯火具 2区	SX2025 底径 5.3	(4.2)	ヨコナデ・ナデ・ケズ リ	ヨコナデ	灰白色/灰白色	片口口縁
第59回	195	染付磁器 碗 2区	SX2025 口径(10.2) 底径(4.0)	5.1	施釉・染付(二重割目 文)	施釉・露胎	白色/白色	肥前 18世紀
	196	染付磁器 小杯 2区	SX2025 底径 2.7	(1.5)	施釉	施釉・染付(横)	白色/白色	肥前
	197	ガラス容器 瓶 2区	SX2025 口径 2.6 底径 3.8	6.0	型成形	型成形	透明/透明	
	198	土師器 皿 2区	東区 検出	(2.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色・にぶい・褐色	
	199	土師器 摺鉢 2区	東区 壁	(5.5)	ケズリ・割目凸帯	ミガキ	淡黄褐色/ にぶい・黄褐色	宇佐・高村焼
	200	施釉陶器 皿 2区	西区 検出 底径 4.6	(1.8)	施釉・ケズリ	施釉	灰白色/ 灰オリーブ色	肥前(御前) 8世紀
	201	施釉陶器 皿 2区	東区機械掘削 底径(4.4)	(2.4)	施釉・ケズリ	施釉・乾の目輪割目	灰白色・オリーブ灰色/ 灰白色・明緑灰色	肥前・内野山国 銅輪焼
	202	染付磁器 皿 2区	東区 検出 口径(13.8) 底径 7.8	3.9	施釉・染付	施釉・染付	明オリーブ灰色/ 明オリーブ灰色	肥前 18世紀
203	染付磁器 皿 2区	東区機械掘削 口径 13.6 底径 8.2	3.9	施釉・乾の目野型高台	施釉・染付	灰白色/灰白色	近代	
204	ガラス容器 牛乳瓶 2区	東区 検出 底径 4.8	(12.6)	型成形	型成形	透明/透明		
第63回	205	施釉陶器 碗 3区	SK3002上層 口径(9.4)	(4.7)	施釉・エンボス(袋敷人 丸蓋付・磁器・木口 施釉・染付(一重割目 文))	施釉	灰白色/灰白色	肥前 17世紀後半
	206	施釉陶器 皿 3区	SK3002上層	(1.0)	施釉	施釉	灰オリーブ色/ 灰オリーブ色	
第72回	210	土師器 蛤壺 3区	SK3014	(2.5)	ナデ・指頭圧痕	ナデ	褐色・にぶい・褐色/ にぶい・褐色	
第74回	211	土師器 甃 3区	SK3016倉物下	(3.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい・褐色/ にぶい・褐色	内面黒唐あり
第74回	212	青磁 碗 3区	SP3001	(4.0)	施釉	施釉・劃花文	オリーブ色/ オリーブ灰色	中国・龍泉窯
	213	瓦葺土器 壺 3区	SP3011 底径(21.1)	(1.7)	ヨコナデ	ミガキ	にぶい・黄褐色/ にぶい・黄褐色	内外輪厚付着
第75回	214	施釉陶器 鉢 3区	検出 底径(5.8)	(2.8)	施釉・露胎	施釉	にぶい・赤褐色/ にぶい・赤褐色	
第75回	216	ガラス容器 ビール瓶 3区	機械掘削 口径 2.2 底径 5.4	13.9	型成形・エンボス (目蓋・筒状・和蘭 BREWERY CO LTD/ 記号・底厚上・商標 裏面:14)	型成形	淡青色/淡青色	大正~戦時中

第3表 石神城跡出土瓦観察表

検出番号	器種	出土地点	法量 (cm)			重量 (g)	素材	備考	
			長さ	幅	厚さ				
第8回	17	平瓦	1区	SK1003	(7.0)	(7.0)	1.8	土	
	18	丸瓦	1区	SK1003	(15.5)	(12.2)	2.4	土	
	19	丸瓦	1区	SK1003	(8.9)	(6.5)	2.2	土	
第9回	20	丸瓦	1区	SK1003	(12.3)	(9.4)	2.2	土	
第32回	134	平瓦	1区	SP1015	(6.9)	(5.6)	1.7	土	
第33回	146	軒平瓦	1区	前区機械彫削	(3.0)	(7.1)	3.7	土	
第42回	161	平瓦	2区	SK2020	29.8	27.0	1.8	土	完形
第50回	177	袖瓦	2区	SK2026	(11.7)	(12.6)	(1.7)	土	左袖瓦
	181	平瓦	2区	SE2010	30.4	27.2	1.8	土	完形
第54回	182	平瓦	2区	SE2010	31.2	27.6	1.9	土	
	183	平瓦	2区	SE2010 枠	(29.5)	27.4	2.0	土	
	184	平瓦	2区	SE2010 枠	(24.5)	27.0	1.8	土	
	185	平瓦	2区	SE2010 枠	(25.8)	26.8	1.5	土	
第55回	186	平瓦	2区	SE2010 枠	(27.5)	26.5	1.8	土	
	187	平瓦	2区	SE2010 枠	(25.0)	25.2	1.9	土	
	188	平瓦	2区	SE2010 枠	(28.2)	22.6	2.0	土	
	189	平瓦	2区	SE2010 枠	(21.5)	25.5	1.8	土	

第4表 石神城跡出土土製品観察表

検出番号	器種	出土地点	法量 (cm)			重量 (g)	素材	備考		
			長さ	幅	厚さ					
第9回	21	管状土器	1区	SK1003	5.7	1.9	20.5	土	孔径0.8cm	
	22	管状土器	1区	SK1003	(2.8)	1.1	2.8	土	孔径0.3cm	
第14回	38	管状土器	1区	SK1022	5.4	1.1	7.2	土	孔径0.5cm	
	39	管状土器	1区	SK1022	6.2	1.1	8.2	土	孔径0.3cm	
第23回	50	加工門盤	1区	SD1001	5.0	4.9	1.5	38.7	磁器	青磁釉を加工
	66	管状土器	1区	SD1001	(3.9)	1.1	4.8	土	孔径0.4cm	
第25回	87	管状土器	1区	SD1002	4.7	1.0	4.3	土	孔径0.4cm	
第36回	148	加工門盤	2区	SK2001	2.8	2.8	0.5	5.7	土	瓦質土器を加工
第63回	207	土鈴	3区	SK3002 上層	3.9	2.7	0.4	14.8	土	玉径1.2cm
第72回	209	加工門盤	3区	SK3004	3.7	4.0	0.8	15.1	土	瓦質土器を加工
第75回	215	加工門盤	3区	検出	4.8	4.6	2.0	47.9	瓦	瓦を加工

第5表 石神城跡出土石器・石製品観察表

検出番号	器種	出土地点	法量 (cm)			重量 (g)	素材	備考		
			長さ	幅	厚さ					
第14回	41	打製石鏃	1区	SK1022	2.9	1.3	0.4	1.2	黒曜石	砂島産
第23回	68	板石	1区	SD1001 黒色粘土	(13.9)	(9.8)	2.1	402.6	安山岩	ノミ痕あり
第25回	88	瓦石	1区	SD1002 砂質土層	7.4	4.6	2.5	96.1	砂岩	

第6表 石神城跡出土土製品観察表

検出番号	器種	出土地点	法量 (cm)			重量 (g)	素材	備考		
			長・径	幅	厚さ					
第23回	23	漆器椀	1区	SK1003			6.2)	木	赤漆	
	24	板状	1区	SK1003	(2.0)	2.2	0.7		木	墨書あり
第27回	99	漆器皿	1区	SD1021 中央掏丸	□ (6.80) 底 (2.8)	1.1			木	赤漆残存
	100	漆器椀	1区	SD1021	□ (13.2) 底 7.0	6.4			木	赤漆の文様3箇所
第28回	117	漆南下駄	1区	SD1021	17.4	10.1	3.0		木	
	118	漆物底板	1区	SD1021	(22.2)	12.2	1.6		木	
	119	杭	1区	SD1021	(22.0)	3.0	2.8		木	
第30回	131	杭	1区	SE1019	28.5	5.3	4.1		木	
	132	杭	1区	SE1019	51.3	6.0	4.5		木	
第32回	135	柱根	1区	SP1028	(20.8)	17.9	17.7		木	
第46回	171	漆南下駄	2区	SK2022	(17.7)	(8.6)	2.7		木	

第7表 石神城跡出土金属製品観察表

検出番号	器種	出土地点	法量 (cm)			重量 (g)	素材	備考		
			長さ	幅	厚さ					
第9回	25	煙管	1区	SK1003 窟下層	5.5	1.5	2.3	15.7	真鍮	内部木質残存
	26	不明	1区	SK1003	1.1	1.3	0.7	3.9	青銅	
第21回	47	竇永通宝	1区	SK1041	2.4	2.4	3.0	3.0	銅	古貨永
第40回	158	鉄釘	2区	SK2018	6.5	0.8	0.6	3.8	鉄	
第72回	208	鉄釘	3区	SK3003	4.4	1.2	1.1	4.4	鉄	

第5節 小結

①石神城跡の遺構の年代

石神城跡の発掘調査で確認された遺構の年代について、出土遺物を基に検討を行う。石神城跡からは年代を特定できる遺物の出土が少ないが、周辺地域の発掘調査成果等を参照し、まとめたものが第76図である。

13世紀に比定される遺構としては、SK1023やSD2008が挙げられる。これら遺構からはⅡ型式に該当する豊前型瓦器碗が出土している。SK1020は遺物が小片のため第76図に示していないが、12世紀代とみられる白磁碗やⅡ型式の豊前型瓦器碗が出土しており、やはり13世紀代の遺構と考えたい。

14世紀の遺構としては、SK1022が挙げられよう。瓦器碗は小片ではあるが豊前型のⅢ形式に該当するものである。これに完形の土師器杯が伴う。遺物には瓦質土器の摺鉢も含まれるが、胴部のみ破片で口縁部形態は不明である。SK1022は中央部をSD1021によって大きく切られており、ここからの混入の可能性が考えられる。SE1019はⅡ～Ⅲ型式の豊前型瓦器碗や、土踏では口縁部が外反するものや外反するものの口縁が短いタイプも含まれ、ある程度の時間幅が想定される。13～14世紀の間で捉えておきたい。

15世紀では、前半は様相が不明であるが、後半の遺構としてはSK2021が挙げられる。口縁部が上方に延びるタイプの備前焼摺鉢と、大内系の土師器皿（大内ⅢB式）が伴う土坑で、15世紀末頃に位置付けられる。大内系の土師器皿は大分県内では大分市の大夫氏館跡や蔭山万寿寺跡等、豊後府内の遺跡で出土が認められるが、それ以外では出土は限られる。

16世紀後半の遺構としては、SD1001・SD1002・SD1021が挙げられる。SD1001とSD1002は切り合い関係にあるが、重複箇所はごく一部で、遺物にも大きな差はない。SD1021は土師器ないし瓦質土器の土鍋類が多く出土しており、煤の付着が著しいものも多い。これら遺構では同伴関係をしめす土師器杯・皿類や陶磁器等、年代を厳密に把握できる資料に乏しい点がネックではあるが、外面に凸帯とスタンプ文を持つ瓦質土器火鉢や、見込みに摺目を施す瓦質土器摺鉢等の存在から、16世紀後半代に位置付ける。SK2020やSE2010の瓦質土器は16世紀末までさかのぼる可能性があるが、両者ともに瓦が出土しており、そのサイズは1点を除きほぼ同じである。焼しが必ずしも顕著ではないことから確実に近世瓦とも言い切れないが、瓦組の井戸側を持つSE2010を中世とするには躊躇する。遺構としては17世紀まで下る可能性が高い。

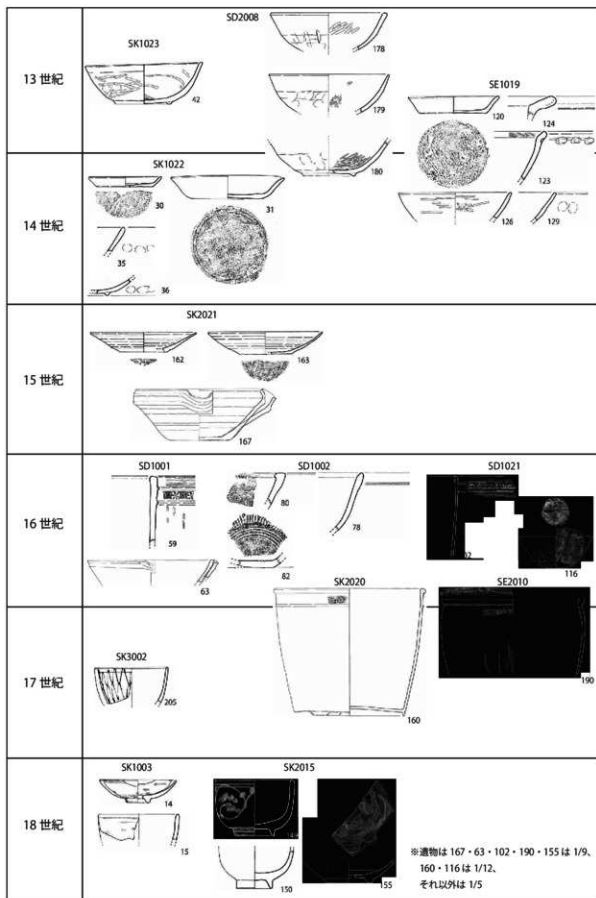
近世の遺構としてはSK1003、SK2015、SK3002がある。SK1003は肥前内野山窯の銅線軸皿や陶胎染付碗、真鍮製の煙管が出土している。SK3002の磁器碗は一重網目文を施すものであり、17世紀中頃に位置付ける。SK2015は陶磁器がまともっており、陶胎染付や陶器碗、見込みに白泥で刷毛目文を施す鉢や摺鉢等がみられる。17世紀末～18世紀代に比定されよう。他に近世陶磁器の出土したSK1030やSK2022、SK2023、寛永通宝の出土したSK1041、3区の大部分の遺構も近世に属するものである。

近代については図示していないが、2区のSK2018やSK2026が代表的なものである。

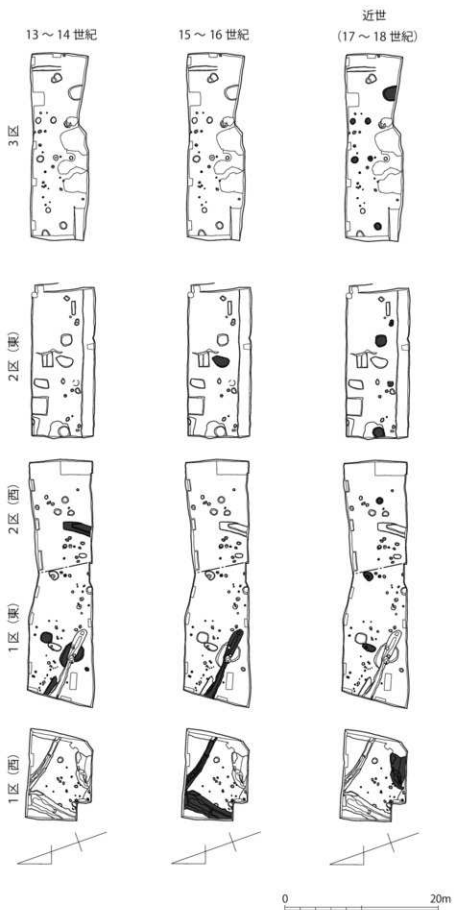
以上のように、石神城跡では13世紀から遺跡の形成が認められ、以降近世にかけて継続する。14・15世紀は遺構が少なくやや様相が分かりにくい、16世紀後半には大型の溝状遺構SD1001・SD1002・SD1021が構築されるなど、やや活発な土地利用が認められる。

②石神城跡の遺構の性格

石神城跡で検出された遺構は、土坑・溝状遺構・井戸・柱穴である。土坑は埋塞のSK2020（埋納遺構？）を除き、大部分はその機能は明確ではない。井戸はSE1019・SE2010の2基である。SE1019は方形縦板組柱横棧型で、出土遺物から14世紀代とみられる。SE2020は平瓦7枚を組み合わせて井戸側とするもので、年代比定は難しいが17世紀頃とみられる。土坑としたSK1003はその規模から井戸の可能性もある。曲物が出土したSK3016も、井戸とみることができるともかもしれない。こうした井戸の存在は、この辺り一帯が中世～近世にかけて居住域として利用されていたことが分かる。溝状遺構はSD1001・SD1002・SD1021は規模が大きく、ほぼ直線的に掘られていることから明らかに人為的な遺構である。しかし、SD1002はやや幅はあるものの、断面形状や規模から



第76図 出土遺物から見た石神城跡の時期区分



第77図 石神城跡遺構の時期別変遷 (1/500)

これを石神城の防御施設としての堀に想定することは困難である。出土遺物も土師器や瓦質土器といった日常の雑器類が目立ち、城館を思わせるようなものは特に見られない。こうした点から、これら遺構は城館に関するものというより、一般的な集落に付随するものと見る方が妥当であろう。SD1001とSD1002は直交するように掘られており、何らかの土地区画に関するものであろうか。

以上のように、石神城跡から発見された遺構は、石神城と関連付けられるようなものはなく、いずれも集落的な様相を示すものである。中津～宇佐平野一帯にかけては、台地や微高地上に城館が点在する状況が認められ、その年代は13～14世紀頃とみられている。石神城跡についても、おそらく同様に微高地上に城（おそらくは館城）が構えられ、その周囲に集落が存在する、そんな景観であったと考えられる。発掘調査を行った場所が、集落域であったということであろう。

③遺構の時期別分布

最後に以降の分布状況を見てみる。年代別の遺構分布を示したものが第77図である。

13～14世紀代の遺構は、調査区の西半、1区（東調査区）と2区西調査区で分布が認められる。遺構は土坑、溝、井戸がある。15世紀末の遺構は2区東調査区の土坑SK2021だけで、他には確認できない。16世紀後半代の遺構は1区に分布する。遺構はやや大型の溝で、この段階で何らかの造作が行われたとみられる。近世の遺構は1～3区に散漫に分布するが、2区西調査区と3区においてややまとまって分布する傾向が見られる。特に3区は明確な中世の遺構は認められず、遺物も中世のものはほとんど出土していないので、近世に入って開発が及んだエリアである可能性が高い。

第4章 濱田遺跡の調査

第1節 発掘調査の方法

濱田遺跡は前章で報告した石神城跡のすぐ東に位置する。石神城跡の3区と濱田遺跡の距離は50m程でしかない。石神城跡では1区が最も高く、東に行くにつれ地山面が低くなる状況が認められた。濱田遺跡はそのさらに東にあり、石神城跡の周囲の沖積低地上に形成された水田を主とする遺跡である。

濱田遺跡の本調査対象となったのは352㎡である。石神城跡と同様に調査地一帯は市街地化しており、周囲に住宅や店舗が軒を連ねているため、これら住宅や店舗への入口を確保しつつ、生活への影響を極力小さくしながら発掘調査を行う必要があった。また、地中埋設物や構造物を避け、周囲の安全を十分に確保した調査区設定が求められた。調査では1～4区を設定し、この設定した調査区に対し、世界測地系の座標に基づいて10m方眼の調査グリッドを設定した。グリッド番号は、北から南にアルファベット、西から東にアラビア数字を付し、両者を組み合わせて使用した(第79図)。発掘調査では、調査で生じる排土置場を確保するため1区と2区、3区と4区でそれぞれ切り返して実施した。

本調査では、試掘調査の所見から主な調査対象は中世の水田層であり、それを被覆する近世の洪水層を丁寧に除去しながら水田畦畔を慎重に検出する必要があった。そのため、この洪水層の上の水田層までの堆積層を重機で慎重に剥ぎ取った。次いで作業員を投入し人力で洪水層の掘り下げを行った後、中世水田層の上面で遺構検出作業を行い、検出した水田層を区画ごとに掘り下げた。地山上面で再度遺構検出作業を行い、確認された遺構の発掘を実施した。検出した遺構は検出した順に「S-●●」の遺構番号を付与した。報告書作成時には調査時の番号を踏襲し、遺構の性格に応じた遺構略号は報告書作成時に付した。検出した遺構は写真及び実測図で記録し、出土遺物は調査区ごとに遺構又は調査グリッド単位で取上げた。空中写真撮影を実施した後、調査区を埋め戻して調査を完了した。

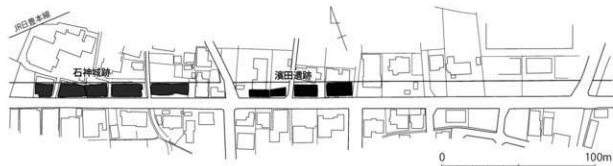
以下、調査区ごとに調査の概要を報告する。

第2節 1区の調査

1区は調査地の最も西側に設定した調査区である。調査前はマンションが建っていた場所であり、そのため調査区の北側には円形のコンクリート基礎が並んで検出された(第79図)。1区では近世の洪水層とみられる層は全体で確認されたものの、中世水田層は部分的に存在する程度で遺存状況が悪く、期待された水田区画の確認には至らなかった。また、調査区から明確な遺構は確認されなかった。

①調査区の土層

1区南壁面の土層断面図を第80図に示す。第1層は現代の宅地化に伴い形成された盛土層(図中の1層)で、層厚は45cm前後を測る。第2層は盛土前の水田層(2層)及び酸化鉄分の沈着した水田基盤土(3・4層)である。

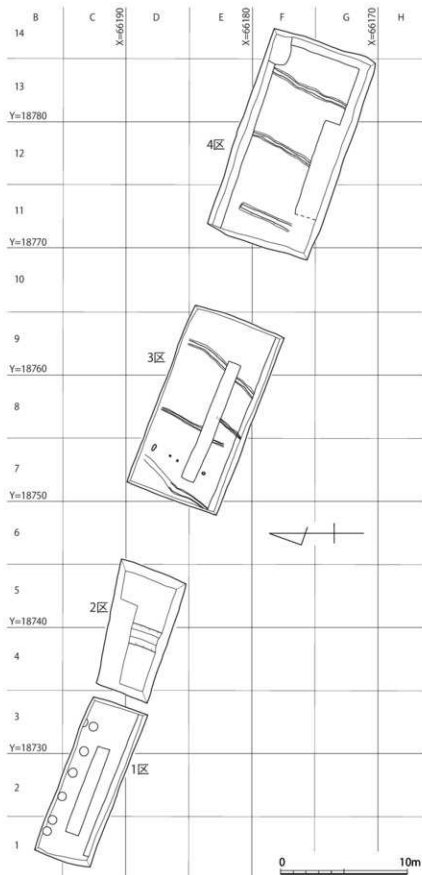


第78図 濱田遺跡の調査位置図(1/2500)

水田層は20~30cm、3層は10~15cm程度の厚みを持つ。4層は東端部付近で3層の下に確認されるもので部分的である。第Ⅲ層は灰黄褐色砂質土で、Ⅳ層のブロックが混じる。洪水により形成されたとみられる層で、中世~近世の遺物を包含する。層厚は10cm前後である。第Ⅳ層(6層)は黒褐色粘質土からなる旧水田層で、試掘調査で確認した中世の水田層と同一であるが、1区では部分的な堆積に止まる。洪水によって流された可能性が考えられる。第Ⅲ・Ⅳ層の下は黄褐色砂質土の地山層(7層)である。各層とも起伏は少なく、ほぼ水平な堆積状況を示している。

②1区出土遺物

1区の出土遺物を第81図に示す。217は瓦質土器の鉢で、口縁は外反し端部には面を持つ。218は丸瓦で、凹面に布目痕が残る。中世瓦の可能性ある。219は土師質焼成の管状土鍾で、長さ7.3cm、幅2.3cm、重量35.7gと大型である。220は有溝土鍾で、形状はラグビーボール形を呈し、側面に沈線が巡る。221は土師器の蛸壺で、外面には指頭圧痕が顕著に残る。サイズ的にはイダコ壺であろうか。以上の遺物のうち、217~220は第Ⅲ層、221は第Ⅳ層からの出土である。



第79図 濱田遺跡調査区全体図(1/300)

第3節 2区の調査

2区は1区のすぐ東、用地境界のコンクリートブロック塀を挟んで設定した調査区である。2区では近世洪水層とともに中世の水田層とみられる層もほぼ全体で確認できたが、中世水田層は極めて薄くしか残存しておらず、ここでも水田区画の検出には至らなかった。ただし、2区では地山層の上面で南北方向の溝（SD16）を1条検出した（第82図）。

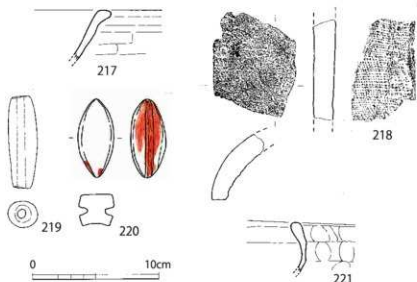
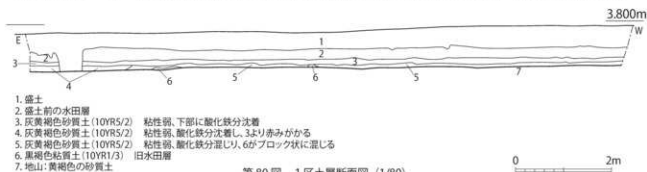
①調査区の土層

2区南壁面の土層断面図を第83図に示す。基本となる層序は1区と同じである。第Ⅰ層は宅地に伴う盛土（図中の1層）で、50～80cm程度の厚みを持って堆積する。1区と異なり下面はやや乱れが生じている。第Ⅱ層は盛土前の水田層（2層）で、全体に削平を受けており10～15cm程度と薄い。第Ⅲ層は粘性の弱い灰黄褐色砂質土（3層）で、中世～近世を中心とした遺物を包含する。洪水により形成された層とみられ、全体に分布するが、各所で6層の攪乱を受けており、状態は必ずしも良好ではない。層厚は15～20cm前後である。第Ⅳ層は黒褐色粘質土（4層）で砂粒を多く含む。中世の遺物を包含する旧水田層であるが、厚さは10cm以下と極めて薄い。第Ⅳ層の下は青灰色粘質土の地山である。

②検出遺構

SD16（第84図）

2区の中央で検出した溝である。南北方向に続き、長さ2.45m以上、幅1.57～1.62m、深さ0.46mを測る。溝の中心軸はN-18°-Eで東に振れる。埋土は2層認められ、上層は暗緑灰色砂質土で30～35cmと厚みがあり、



流木や礫を含む。下層は黒色粘質土で、上層と同様に流木や礫が混じる。砂混じりの埋土で有機物や礫が混入することから、水流を伴う堆積環境にあったとみられる。遺構の機能としては水田に伴う水路であった可能性が考えられよう。断面形状は逆半円形状を呈し、立ち上がりは比較的緩やかである。遺物は須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、青磁、備前焼が出土しており、うち1点を図示した。出土遺物から中世の遺構であり、備前焼や瓦質土器の出土から、14世紀以降のものと思われる。

SD16出土遺物（第85図）

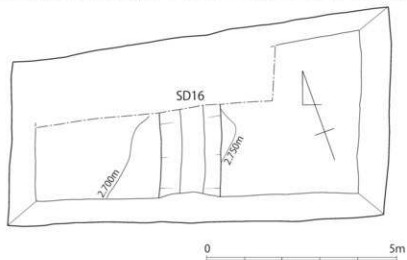
222は中国龍泉窯の青磁碗である。内面に劃花文を施すもので、12世紀後半に比定される。

第4節 3区の調査

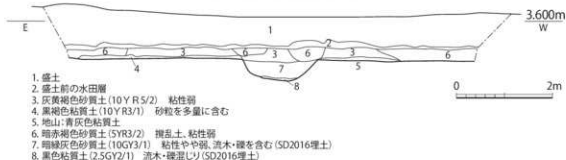
3区は2区との間の里道を挟んだ、2区の東側に設定した調査区である。長方形形状を呈した区画で、調査面積は約110㎡である。ここでは近世の洪水層（Ⅲ層）、中世の水田層（Ⅳ層）ともに全域で確認され、良好な状態を示した。近世洪水層を除去した段階で、水田畦畔を3条とそれに区画される4つの水田区画、さらに地山層の上面で小溝1条と小土坑1基、小ピット3基を検出した（第86図）。ただし、地山面上の遺構はいずれも小規模でかつ遺物の出土もなく、明らかに人為的な構築物であるといえるものは認められなかった。

①調査区の土層

3区北壁面の土層断面図を第87図に示す。基本となる層序は1区や2区と共通する。第Ⅰ層は宅地に伴う盛土（図中の1層）で、30～40cm前後の厚みを持つ。第Ⅱ層は盛土前の水田層（2層）及びその床土層（3層）で、2層は20～30cm程の厚みを持ち、3層は10cm以下の薄い堆積である。第Ⅲ層は粘性の弱い灰黄褐色砂質土（4層）で、中世～近世を中心とした遺物を包含する。洪水により形成された層とみられ、層の下部には酸化鉄分の沈着が認



第82図 2区平面図 (1/100)



第83図 2区土層断面 (1/80)

められる。層厚は15~20cm前後である。第IV層は黒褐色粘質土(5層)で、マンガンの沈着が認められる。中世の遺物を包含する旧水田層で、10~20cmほどの厚みを持って堆積する。この層の上面で部分的に高まる箇所が見られ、それが水田区画を形成する畦畔である。水田と同じ土を用い、周りより少し高く盛り上げて構築している。第IV層の下は黄褐色砂質土の地山である。全体的に層の乱れは少なく、各層ともにほぼ水平な堆積状況を示している。

②検出遺構

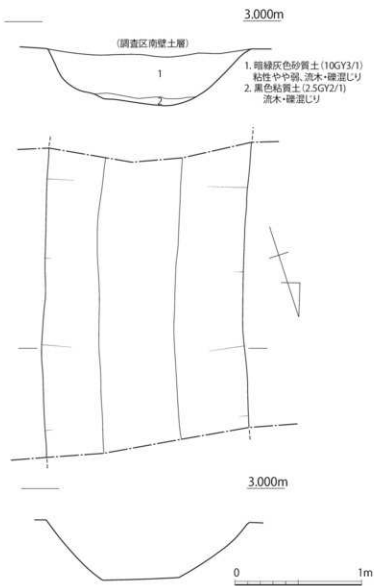
水田遺構(第86図)

水田に関わる遺構としては、3条の水田畦畔(SL1~SL3)と、この畦畔で区画される水田がある(SN4~SN7)。畦畔はいずれも南北方向のもので、東西方向を区画する畦畔は調査区内では認められなかった。土層のところでも触れたように、畦畔は水田と同じ土を用いて周囲より一段高く盛り上げて構築しただけの簡素なものである。そのため検出はかなりの困難を極めたが、上を被覆する洪水砂質土層の最下部でまず出現し、また周囲に比べて畦畔の箇所ではマンガンの沈着が濃い傾向にあり、それにより周囲より土壌が硬化した状況が認められた。

SL1は最も西側の畦畔で、直線ではなく少し曲がりながら続いている。北半部はやや上部が不明瞭であったが、基部でその幅は押さえることができた。畦畔の長さは6.5m以上、幅0.3~0.5m、高さ0.03~0.04mを測る。畦畔の南北両端の中心点を結んだ軸線方向はN-39.5°-Eである。遺物は土師器、瓦器、青磁が出土している。

SL2は調査区の中央で検出した畦畔で、試掘トレンチを挟んだ南北で若干位置が食い違っている。長さは5.6m以上、幅0.25~0.40m、高さ0.03~0.05mを測る。畦畔の南北両端の中心点を結んだ軸線方向はN-30°-Eで、SL1とはやや軸線が異なる。遺物は土師器、瓦器、土鍾が出土している。

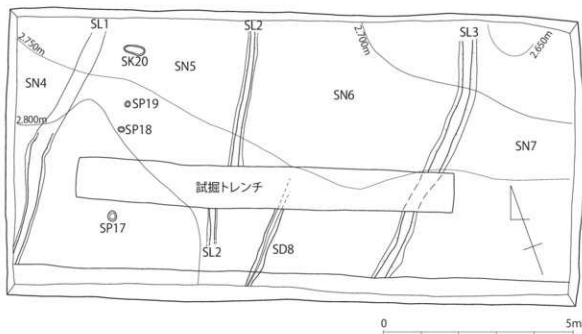
SL3は調査区の東側で検出した畦畔で、北端部でややカーブする形状である。長さは6.7m以上、幅0.40~0.55m、高さ0.03~0.06mを測る。畦畔の南北両端の中心点を結んだ軸線方向はN-39.5°-E



第84図 SD2016実測図(1/30)



第85図 SD2016出土遺物実測図(1/3)



第86図 3区遺構平面図 (1/100)

で、SL1と共通した軸線を持つ。遺物は土師器、瓦器、瓦質土器、白磁が出土している。

SN4はSL1の西側に広がる区画水田であるが、区画全体の規模は明らかにできない。遺物は須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器等が出土している。

SN5はSL1とSL2によって区画される水田である。区画の幅は3.30m～4.80mを測る。遺物は須恵器、土師器、瓦器、白磁、鉄製品等が出土している。なお、この区画の水田層を除去したところで3基の小ピット (SP17～19) と小土坑 (SK20) 1基を検出したが、これらと水田との関係は不明である。

SN6はSL2とSL3によって区画される水田である。区画の幅は4.60～5.60mを測るが、南側はさらに狭くなるとみられる。遺物は土師器、瓦器、瓦質土器、土鍾、石鎌等が出土している。この区画の水田層下で溝SD8を検出しているが、水田との関係は不明である。なお、SD8の軸線はN-41.5°-Eで、SL1やSL3の軸線に近い。

SN7はSL3の東側にある水田であるが、区画全体の規模は明らかにできない。遺物は土師器、瓦器、瓦質土器、土鍾等が出土している。

水田遺構出土遺物 (第88図)

223は中国龍泉窯の青磁碗で、見込に文様を施す。SL1の検出面から出土した。224は球状を呈する土鍾で、側面的一端に縦位の沈線を施す。SL2から出土した。225・226は瓦質土器の摺鉢である。226は口縁部を丸く肥厚する。227は鉄製の刀子の切先部分であろう。228は土師器小皿の底部で、底面には回転糸切痕が残る。229は中国産白磁の皿であろう。以上のうち、225はSN4、226・227はSN5上面、228・229はSN5からの出土である。230は瓦器碗で、内外面に粗いヘラミガキを施す。231は土師器の鍋で、口縁は短く外に折れる。232は瓦質土器の鍋、233は土師質焼成の管状土鍾である。234は姫島産黒曜石製の打製石鎌で、先端部を欠損する。以上はSN6からの出土である。235は土師質焼成の管状土鍾で、上半部を欠損する。SN7からの出土である。

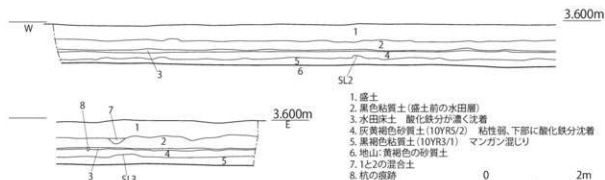
③3区出土遺物

遺構から出土した以外の遺物の中で主要なものを第89図に示す。236は備前焼の摺鉢で、口縁部は三角形に作る。237は焼締陶器の摺鉢で、見込に摺目を密に施す。238は施釉陶器の碗で、軸葉の感じから上野・高取系ではないかとみられる。239は施釉陶器天目碗のミニチュア品か。240は東播系須恵器の摺鉢である。241は土鈴で

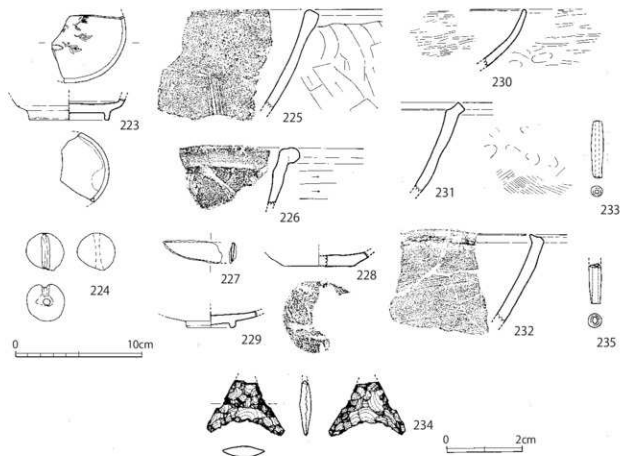
鈴部を欠失する。242は土師質焼成の棒状土錘である。243・244は土師質焼成の管状土錘で、244は長さ8.6cm、幅3.3cm、重量82.5gを測る大型品である。245は滑石製の温石であろう。2箇所の穿孔がみられる。246は銅製の飾り金具で長方形の頭部を持つ釘形を呈する。以上のうち、243は調査区に設定したサブトレッチからの出土である他は第Ⅲ層の近世洪水層からの出土である。

第5節 4区の調査

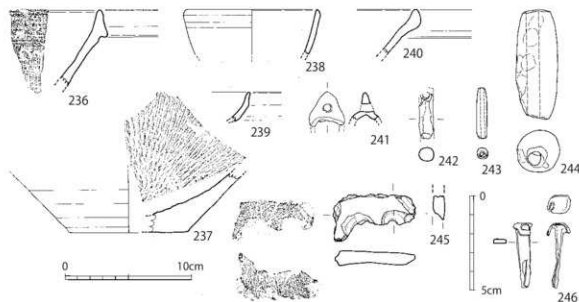
4区は3区のすぐ東側に設定した調査区である。3・4区はちょうど店舗の前にあたっており、その出入りを確保するため3区との間を少し空けて設定せざるをえなかった。調査区の形状は長方形で、調査面積は約140㎡である。4区では3区と同様に近世の洪水層（Ⅲ層）、中世の水田層（Ⅳ層）ともに全域で確認され、良好な状態



第87図 3区土層断面図 (1/80)



第88図 3区水田遺構出土遺物実測図 (1/3・1/1)



第89図 3区出土遺物実測図 (1/3・1/2)

を示した。近世洪水層を除去した段階で、水田畦畔を3条とそれらに区画される4つの水田区画を検出した(第90図)。

①調査区の土層

調査区北壁面の土層断面図を第91図に示す。基本となる層序は1~3区と共通する。第I層は宅地に伴う盛土(図中の1層)で、50~70cm前後の厚みを持つ。第II層は盛土前の水田層(2層)で、10~20cm程の厚さで退席する。層の上面はかなり乱れており、攪乱された状況を示す。第III層は粘性の弱い灰黄褐色砂質土(3層)で、中世~近世を中心とした遺物を包含する。洪水により形成された層とみられ、層の下部には酸化鉄分が帯状に沈着する。層厚は20cm前後である。第IV層は黒褐色粘質土(4層)で、マンガンの沈着が認められる。中世の遺物を包含する旧水田層であり、10cmほどの厚みを持って堆積するが、3区に比べると堆積は薄い。3区と同様にこの層の上面で部分的に水田畦畔の高まりが見られる。水田と同じ土を用い、周りより少し高く盛り上げて構築している。第IV層の下は黄褐色砂質土の地山である。3層以下は全体的に層の乱れは少なく、ほぼ水平な堆積状況を示している。

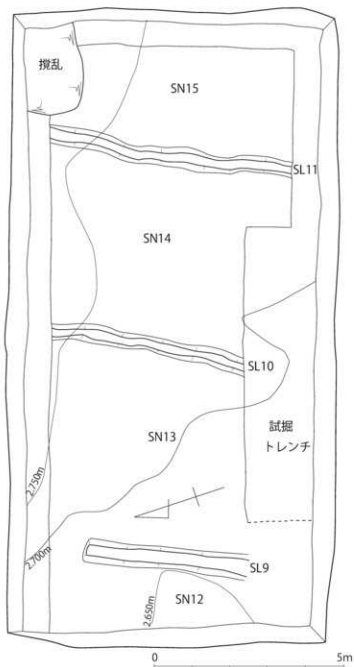
②検出遺構

水田遺構(第90図)

水田に関わる遺構としては、3条の水田畦畔(SL9~SL11)と、この畦畔で区画される水田(SN12~SN15)がある。3区と同様に畦畔はいずれも南北方向のもので、東西方向を区画する畦畔は認められなかった。畦畔は水田と同じ土を周囲より一段高く盛り上げて構築したもので、3区と同じような状況で検出することができた。

SL9は最も西側の畦畔で、ほぼ直線的に続く。北側は途切れたようになっており、北壁の土層断面でも畦畔の痕跡は確認できない。何らかの理由で削平された可能性もあるが、土層堆積は比較的安定していることを考えるとここで途切れる可能性が高い。また、南側は不明瞭で検出ができなかった。畦畔の長さは4.3m以上、幅0.55~0.70m、高さ0.07~0.09mを測る。畦畔の南北両端の中心点を結んだ軸線方向はN-23.5°-Eである。遺物は土師器、瓦器、瓦質土器、景德鎮系の青花等が出土している。

SL10は調査区の中央で検出した畦畔である。比較的直線的ではあるが、細かい蛇行がみられる。長さは5.15m以上、幅0.40~0.50m、高さ0.05~0.08mを測る。畦畔の南北両端の中心点を結んだ軸線方向はN-28.5°-Eであ



第90図 4区遺構平面図 (1/100)

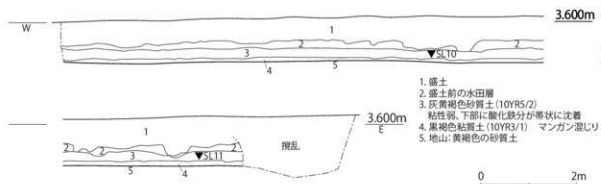
る。遺物は土師器、瓦器、瓦質土器、白磁が出土している。

SL11は調査区の東側で検出した畦畔である。SL10と同様に直線的ではあるが、細かい蛇行がみられる。長さは6.4m以上、幅0.40～0.60m、高さ0.05～0.07mを測る。畦畔の南北両端の中心点を結んだ軸線方向はN-26°Eで、SL9とSL10の間くらいに軸線である。遺物は土師器、瓦器、中世陶器が出土している。

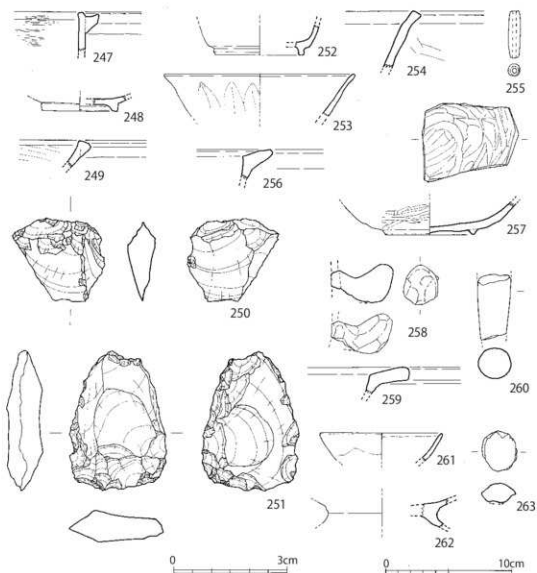
SN12はSL9の西側に広がる区画水田であるが、区画全体の規模は明らかにできない。遺物は須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、東播系須恵器、磁器、土錘等が出土している。上面で近世陶磁器が若干出土しているが、上層の洪水層からの混入とみられる。

SN13はSL9とSL10によって区画される水田である。区画の幅は5.0m～5.4mを測る。遺物は須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、東播系須恵器、白磁が出土している。

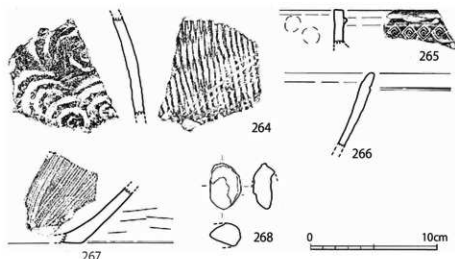
SN14はSL10とSL11によって区画される水田である。区画の幅は4.7～5.2mを測る。遺物は須恵器、土師器、



第91図 4区土層断面図 (1/80)



第92図 4区水田遺構出土遺物実測図 (1/3)



第93図 4区出土遺物実測図(1/3)

瓦器、瓦質土器、白磁、陶器が出土している。

SN15はSL11の東側にある水田であるが、区画全体の規模は明らかにできない。遺物は須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、青磁、備前焼が出土している。

水田遺構出土遺物(第92図)

247は土師器の釜で、口縁下外面に鈎を貼り付ける。SL9からの出土である。248は古代の緑釉陶器の碗で、内外面に緑釉を施し、底部には断面逆台形状の高台を貼り付ける。249は瓦質土器の鉢である。250は赤色チャートの剥片、251は姫島産黒曜石の打製石鏃未成品である。以上はSN12から出土した。252は須恵器の高台付坏で8世紀代のものである。253は中国龍泉窯の青磁碗で、外面に蓮弁文を施す。254は土師器の鍋で、口縁部の屈曲は弱い。255は土師質焼成の管状土錘である。256は土師器の鍋で、口縁部は外に折れ三角形に肥厚する。257は瓦器碗で、内外面に粗いヘラミガキを施し、底部には断面三角形の高台を貼り付ける。以上はSN13からの出土で、うち252～255はSN13上面の出土である。258は土師器の把手付甕の把手部。259は土師器の鍋で、口縁は外に折れる。260は土師器脚付鍋の脚部である。以上はSN14からの出土で、うち258はSN14上面から出土した。261は中国の白磁皿で、口縁部は口禿となる。262は須恵器の壺類の底部で古代の製品。263は土製品で、桃核状を呈する型づくりのものであるが、詳細は不明である。これらはSN15から出土した。

③4区出土遺物

水田遺構以外の4区出土遺物を第93図に示す。264は須恵器の甕で、外面には縦位のタタキ痕、内面には同心円状の当具痕が残る。265は瓦質土器火鉢で、口縁下の断面半円形の凸帯間に菱形のスタンプ文を施す。266は瓦質土器の鍋で、外面口縁下に1条の沈線を施す。267は瓦質土器の摺鉢である。268は桃核状を呈する型合わせの土製品であるが詳細は不明。SN15から同様のものが出土している(第92図263)。以上のうち、264はトレンチからの出土で、他は第Ⅲ層からの出土である。

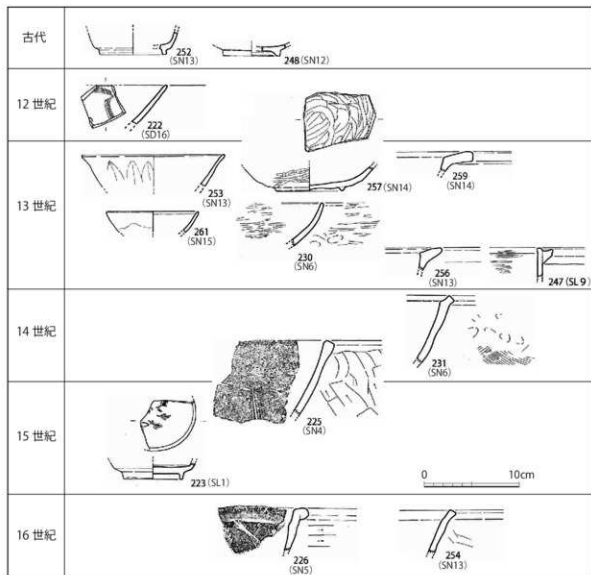
第6節 小結

①濱田遺跡の遺構年代について

前節まで報告してきたように、濱田遺跡において確認された主たる遺構は中世の水田遺構(水田畦畔及び区画水田)と、水田に関わる水利施設の可能性がある溝(SD16)である。ここでは出土遺物を基に遺構の年代の推定を行う。

第94図は水田遺構出土の遺物のうち、おおよその年代比定ができそうなものを並べたものである。水田遺構という性格上、繰り返し耕起されることから総じて遺物は細片化しているものが多い。従って限られた資料による検討であることをあらかじめ断わっておく。

遺物には縄文～弥生時代にさかのぼる土器や打製石器等の石器のほか、古代の須恵器や緑釉陶器も出土しているが、主体となるのは中世である。12世紀後半の資料としてはSD16から出土した龍泉窯の青磁碗があるが、この時期の資料は少ない。一方、13世紀にはいと資料が増加する。龍泉窯の青磁蓮弁文碗や白磁の口禿皿といった貿易陶磁器や、いわゆる豊前型瓦器碗のI b型式～II型式に該当するもの、土鍋類は口縁が外反するもの(259)が前半に、口縁が短く外反するもの(256)や羽釜(247)が後半に位置付けられる。14～15世紀代は資料に乏しいが青磁碗や土鍋、瓦質土器摺鉢が存在する。16世紀には口縁部が玉縁状に肥厚する鉢や、口縁部が直線的な土鍋がある。以上のうち、遺物としては13世紀代のものが多い傾向である。こうした点を勘案すると、濱田遺跡の水田遺構は13世紀頃に開発された可能性が極めて高いと考えられる。なお、水田の廃絶は、近世の洪水層に被覆された後に、洪水砂を除去して復興した形跡がみられないので、この洪水によるものとみてよい。その時期を特定する遺物に乏しいが、Ⅲ層からは上野・高取系の陶器(第89図238)や、16世紀代の瓦質土器火鉢(第



第94図 濱田遺跡水田遺構出土遺物の編年図(1/4)

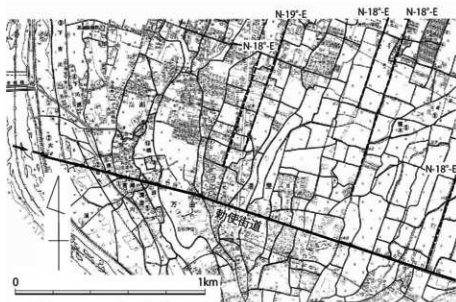
93 図 265) や土鍋 (第 93 図 266) を含む点から、近世初頭頃の可能性を考えたい。

以上の点から、濱田遺跡の水田は 13 世紀～16 世紀末頃にかけて機能していたとみられる。この時間幅は、石神城跡の年代ともほぼ符合するものであり、領遺跡の関連性は非常に高いと想定される。

②濱田遺跡と沖代地区条里跡の関係性

第 1 章でも触れたとおり、濱田遺跡の調査区の南には沖代地区条里跡が広がっている。沖代地区条里跡は県道中津吉富線（都市計画道路外馬場踏矢堂線）を北限、勅使街道ともいわれる古代豊前道を南限とし、沖代平野に展開する広大な条里遺跡である。濱田遺跡も中世の水田遺跡であり、両者の関連の有無を検討する。

第 95 図は沖代地区条里跡南部の条里区画の軸線角度を示したものである。沖代地区条里跡の軸線は 18° の角度で東に振れるという⁴⁾が、軸線を計測すると N-18°-E ないしは N-19°-E で、概ね 18° で東に振れていることが分かる。一方、濱田遺跡の水田畦畔は、2 区の SD16 は N-18°-E であるのに対し、3 区の畦畔 SL1～3 は N-30°～39.5°-E、4 区の SL9～11 では N-23.5°～28.5°-E を測り、沖代地区条里跡の軸線とは大きく異なる。SD16 も検出がごく狭い範囲であるので、実際の軸線は異なる可能性もある。この点は、沖代条里の北限が推定通り県道中津吉富線までであり、それ以北には続いていること、そして濱田遺跡の水田が条里の規制を受けず、その区画は自然地形に応じたものであることを示している。濱田遺跡の水田の開発主体は明らかにできないが、濱田遺跡の年代が石神城跡とはほぼ合致していることから、可能性としては石神城跡に拠った新興勢力としての武士層（伝承では小畑氏）の可能性が考えられよう。石神城跡との関係については、第 6 章で触れることとする。



第 95 図 沖代地区条里跡の条里軸線角度 (1/20,000)

4) 原田昭一編 2021『沖代条里の調査 本編』、大分県立歴史博物館報告書第 19 集、大分県立歴史博物館。

同書では角度は図示されておらず、記述のみである。

第8表 濱田遺跡遺構一覧表

遺構番号	遺構種別	検出位置		遺構規模 (m)			検出高	出土遺物	備考
		調査区	グリッド	長さ	幅	深さ			
SL1	水田畦畔	3区	D6・D7・E6	(6.50)	0.50	0.09	2.907	土師器、瓦器	
SL2	水田畦畔	3区	E8・D8	(5.60)	0.40	0.08	2.906	土師器、瓦器	
SL3	水田畦畔	3区	E8・E9	(6.70)	0.55	0.11	2.919	土師器、瓦器、瓦質土器、白磁	
SN4	水田	3区	D7・E6	(6.50)	(2.00)	0.14	2.865	須恵器、土師器、瓦器	
SN5	水田	3区	D7・D8・E7	(6.50)	4.80	0.16	2.870	須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、白磁、鉄刀子	
SN6	水田	3区	D8・D9・E8・E9	(6.70)	5.60	0.10	2.869	土師器、瓦器、石鏝	
SN7	水田	3区	E9・F8・F9	(6.70)	(4.85)	0.24	2.881	土師器、瓦器、瓦質土器	
SD8	溝	3区	E8	(2.22)	0.25	0.06	2.787		
SL9	水田畦畔	4区	E11・F11	(4.30)	0.70	0.09	2.898	土師器、瓦器、瓦質土器、青花	
SL10	水田畦畔	4区	F12	(5.15)	0.50	0.10	2.904	土師器、瓦器、瓦質土器、白磁	
SL11	水田畦畔	4区	F13・G13	(6.40)	0.60	0.07	2.908	土師器、瓦器、陶器	
SN12	水田	4区	E11・F11	(4.30)	(2.00)	0.17	2.810	土師器、瓦器、東播系須恵器 (上面) 須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、磁器、棒状土鏝、石鏝、鋸片	近世磁器少量含む
SN13	水田	4区	E11・E12・F11・F12	(5.15)	5.40	0.21	2.855	須恵器、土師器、瓦器、東播系須恵器、白磁 (上面) 須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、白磁	
SN14	水田	4区	F12・F13・G13	(6.40)	5.20	0.22	2.866	須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、白磁、陶器 (上面) 須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器	
SN15	水田	4区	F13・F14・G13	(6.40)	(3.10)	0.24	2.872	須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、白磁 (上面) 須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器	
SD16	溝	2区	D4・D5	2.45	1.62	0.52	2.792	須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、白磁、青磁、備前、土製品	
SP17	ピット	3区	E7	0.28	0.23	0.05	2.807		
SP18	ピット	3区	D7	0.18	0.14	0.04	2.785		
SP19	ピット	3区	D7	0.17	0.15	0.03	2.772		
SK20	土坑	3区	D7	0.58	0.25	0.07	2.725		

第9表 濱田遺跡出土土物観察表(土器・陶磁器)

探訪番号	器種	出土地点	法量 (cm)		器面調整		色調 (外側/内側)	備考
			直径	高さ	外側	内側		
第81区	217 瓦質土器 鉢 1区 C3 第Ⅲ層			(4.0)	ヘラケズリ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	淡灰色/淡灰色	
	221 土師器 蛇壺 1区 C1 第Ⅳ層			(3.9)	指頭圧痕・ナデ	ナデ	灰褐色/灰褐色	イイダコ窓か
第85区	222 青磁 碗 2区 SD16			(4.2)	施釉、劃花文	施釉	オリーブ灰色 /オリーブ灰色	中国・龍泉窯
第88区	223 青磁 碗 3区 SL1 上面	底径 (6.2)	(1.7)	露胎、施釉	施釉、劃花文	オリーブ灰色 /オリーブ灰色	中国・龍泉窯	
	225 瓦質土器 摺鉢 3区 SN4 上面		(8.0)	ヘラケズリ・ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ・横目	黒茶褐色 /黒茶褐色		
	226 瓦質土器 摺鉢 3区 SN5 上面		(4.6)	ヘラケズリ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ・横目	灰褐色/灰褐色		
	228 土師器 皿 3区 SN5	底径 (5.5)	(1.1)	ヨコナデ、回転糸切痕	ヨコナデ	にぶい、褐色 /にぶい、褐色		
	229 白磁 皿 3区 SN5	底径 3.8	(1.3)	施釉・露胎	施釉	白灰色/白灰色	中国産	
	230 瓦器 碗 3区 SN6・SN6 上面		(4.5)	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	灰白色/灰白色		
	231 土師器 鍋 3区 SN6・SN6 上面		(7.2)	ヨコナデ、指頭圧痕・ハケ目	ヨコナデ	灰褐色 /にぶい、黄褐色		
	232 瓦質土器 深鉢 3区 SN6		(7.0)	ナデ	ハケ目	灰褐色/灰黄色		
	236 備前焼 摺鉢 3区 E7 第Ⅲ層		(6.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	暗灰色/暗灰色		
	237 倭輪陶器 摺鉢 3区 E8 第Ⅲ層	底径 (9.4)	(4.7)	ヨコナデ・ナデ	横目	灰赤色/赤褐色		
第89区	238 施釉陶器 碗 3区 E8 第Ⅲ層	口径 (10.2)	(3.6)	施釉	施釉	オリーブ灰色 /オリーブ灰色	上野・高取系か	
	239 施釉陶器 大日輪 3区 E7 第Ⅲ層		(2.3)	施釉・露胎	施釉	暗褐色/暗褐色	ミニチュア	
	240 土師器 深鉢 3区 D8 第Ⅲ層		(3.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色/暗灰色 /灰色/暗灰色		
	247 土師器 羽釜 4区 SL9		(3.1)	ヨコナデ・鈚附付	ヨコナデ・ハケ目	灰褐色/淡褐色		
第92区	248 緑釉陶器 碗 4区 SN12 上面	底径 (6.0)	(1.3)	施釉	施釉	淡緑色/淡緑色	古代	
	249 瓦質土器 鉢 4区 SN12 上面		(2.2)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	淡灰褐色 /淡灰褐色		
	252 須恵器 杯 4区 SN13 上面	底径 (7.0)	(2.3)	ヨコナデ	ヨコナデ	青灰色/青灰色	古代	
	253 青磁 碗 4区 SN13 上面	口径 (15.0)	(3.3)	施釉・筋蓮弁文	施釉	オリーブ灰色 /オリーブ灰色	中国・龍泉窯	
	254 土師器 鍋 4区 SN113 上面		(4.5)	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	暗褐色/暗褐色		
	256 土師器 鍋 4区 SN13		(2.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	暗褐色 /暗褐色		
	257 瓦器 碗 4区 SN13	底径 (7.0)	(2.6)	ナデ・ヨコナデ・ハラミガキ	ハラミガキ	灰色/灰色		
	258 土師器 甕 4区 SN14 上面	長さ 4.8 幅 2.8 高さ 3.1		ナデ	ナデ	灰白色/灰白色	把手	
	259 土師器 鍋 4区 SN14		(2.1)	ヨコナデ・磨滅	ヨコナデ・ナデ	淡粉褐色 /淡粉褐色		
	260 土師器 鍋 4区 SN14	直径 2.6	(5.2)	ナデ		灰褐色	防長系	
第93区	261 白磁 皿 4区 SN15	口径 (9.4)	(2.2)	施釉・露胎	施釉・ケズリ	灰白色/灰白色	中国産 13世紀	
	262 須恵器 壺 4区 SN15	基部径 (8.7)	(2.3)	ヨコナデ	ヨコナデ	青灰色/青灰色	古代	
	264 須恵器 甕 4区 F13 トレンチ		(7.8)	平行タタキ	同心円当目痕	暗灰色/暗灰色		
	265 瓦質土器 火鉢 4区 F13 第Ⅲ層		(2.6)	ナデ・凸帯・スタンプ文	ヨコナデ・指頭圧痕	浅黄褐色 /浅黄褐色		
	266 瓦質土器 鍋 4区 G13 第Ⅲ層		(5.8)	ヨコナデ・ナデ・紋様	ヨコナデ・ナデ	茶褐色/茶褐色		
	267 瓦質土器 摺鉢 4区 F12 第Ⅲ層		(4.4)	ヘラケズリ	横目	灰色/灰色		

第10表 濱田遺跡出土瓦観察表

検出番号	器種	出土地点	法量 (cm)			重量 (g)	素材	備考		
			長さ	幅	厚さ					
第81回	218	丸瓦	1区	B2 第Ⅲ層	(5.2)	(3.3)	1.6		土	中世瓦

第11表 濱田遺跡出土土製品観察表

検出番号	器種	出土地点	法量 (cm)			重量 (g)	素材	備考		
			長さ	幅	厚さ					
第81回	219	管状土鉢	1区	C8 第Ⅲ層	7.2	2.2		35.7	土	孔径0.6～0.7cm
	220	有溝土鉢	1区	B2 第Ⅲ層	6.2	2.8	2.5	41.9	土	
第88回	224	有溝球状土鉢	3区	SE2	2.9	3.0		23.9	土	孔径0.6～0.9cm
	233	管状土鉢	3区	SN6	4.5	0.9		4.3	土	孔径0.3cm
	235	管状土鉢	3区	SN7 上面	(3.2)	1.0		(3.2)	土	孔径0.4～0.5cm
第89回	241	土鈴	3区	D8 第Ⅲ層	(2.8)	3.7	2.1	6.6	土	孔径0.6cm
	242	棒状土鉢	3区	E9 第Ⅲ層	(3.5)	1.1		(6.0)	土	
	243	管状土鉢	3区	サブトレンチ	4.0	0.8		2.7	土	孔径0.4cm
	244	管状土鉢	3区	E7 第Ⅲ層	8.7	3.4		82.5	土	孔径1.0cm
第92回	255	管状土鉢	4区	SN13 上面	3.7	0.9		3.5	土	孔径0.3cm
	263	不明土製品	4区	SN15	3.2	2.7	(1.5)	(5.1)	土	型作り
第93回	268	不明土製品	4区	G13 第Ⅲ層	(3.6)	(2.4)	(1.8)	6.0	土	型作り

第12表 濱田遺跡出土石器・石製品観察表

検出番号	器種	出土地点	法量 (cm)			重量 (g)	素材	備考		
			長さ	幅	厚さ					
第88回	234	打製石鏃	3区	SN6	1.4	2.0	0.3	0.5	黒曜石	船島産
第89回	245	面石	3区	D8 第Ⅲ層	(3.7)	6.4	1.1	(31.3)	滑石	穿孔2箇所
第92回	250	剥片	4区	SN12 上面	2.2	2.4	0.8	2.9	チャート	赤色チャート
	251	打製石鏃半成品	4区	SN14	3.7	2.6	1.0	8.1	黒曜石	船島産

第13表 濱田遺跡出土金属製品観察表

検出番号	器種	出土地点	法量 (cm)			重量 (g)	素材	備考		
			長さ	幅	厚さ					
第88回	227	刀子	3区	SN5 上面	(4.6)	(1.6)	0.6	(5.5)	鉄	
第89回	246	飾り金具	3区	E8 第Ⅲ層	3.5	1.0	1.2	2.8	青銅	

第5章 中津市濱田遺跡の植物珪酸体分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

濱田遺跡は、山国川により形成された沖代平野に立地する。調査区の南側に隣接する、沖代地区条里跡は8世紀以降に施行され、現在まで条里遺構が残されている(中津市教育委員会2008)。遺跡内では、これまでの調査により中世の水田跡が確認されている。

本分析調査では、水田層とされる層位を含む土層での稲作などの栽培や植生(特にイネ科)に関する情報を得るために植物珪酸体分析を実施した。以下に、その結果を報告する。

1. 試料

本分析調査は土壌試料13点を対象に実施した(第14表)。以下に調査区毎に試料の概要を述べる。

3区では、砂質土や粘質土で構成された土層が見られ、土色や土質などから大きく6つの土層(1~6)に区分される。このうち、土層6は地山(黄褐色の砂質土)、土層5は旧水田層とされる黒褐色の粘質土(Ⅱ層 旧水田層C)、土層4は洪水層とされる灰黄褐色の砂質土(Ⅰ層B)、土層3は区域3に見られる床土、土層2は新水田層とされる黒色粘質土(新水田層A)、土層1は表土である。土層5は上面に畔跡が見られるが、上位の土層4が形成される際に削平されたと考えられる。また、マンガンの沈着が見られる。土層4は縄文時代~近世の遺物を含み、底部に酸化鉄の沈着が見られる。土層3の床土では、酸化鉄の沈着が顕著である。区域3では、北壁土層で3ヶ所(①,②,③)が設定された。採取箇所③が調査区の北東隅に当たり、その西方に採取箇所②、さらに西方に採取箇所①となる。それぞれから土層5(Ⅱ層 旧水田層C)、土層4(Ⅰ層B)、土層2(新水田層A)から1点ずつ、合計9点が採取された。

4区でも砂質土や粘質土で構成された土層が見られ、大きく5つの土層(1~5)に区分される。このうち、土層5は地山(黄褐色の砂質土)、土層4は旧水田層とされる黒褐色の粘質土(Ⅱ層 旧水田層C)、土層3は洪水層とされる灰黄褐色の砂質土(Ⅰ層B)、土層2は新水田層(新水田層A)、土層1は表土である。土層4は上面に畔跡が見られ、マンガンの沈着が見られる。土層3は底部~中部に酸化鉄が帯状に沈着する。土層2は瓦礫を含み、上面に激しい削平を受ける。南壁土層で2ヶ所(④と⑤)が設定され、採取箇所⑤が調査区の東側、採取箇所④が中央部に当たる。それぞれから土層4(Ⅱ層 旧水田層C)と土層3(Ⅰ層B)より1点ずつ、合計4点が採取された。

2. 分析方法

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重25)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プレウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その側に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2010)の分類を参考に同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個体以下は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸める(100単位にする)。また、各分類群の植物珪酸体含量を図示する。

3. 結果

結果を第15表と第96図に示す。

各地点の試料からは、植物珪酸体が認められる。その保存状態は層位で差異が認められ、3区の3ヶ所(①、②、③)で見られた新水田層 A 試料では良好であるのに対して、3区や4区の I 層 B や II 層 旧水田層 C の試料では悪い。特筆すべき点としては、3区の新水田層 A 試料で栽培種のイネ属や栽培種を含むコムギ連の産出が顕著に多く、上位から下位にかけて(新水田層 A 試料から I 層 B 試料、II 層 旧水田層 C 試料の順に)減少する傾向が見られる。この他に、イネ科起源(棒状珪酸体、長細胞起源、毛細胞起源)も確認されるが、分類群の特定には至らない。また各試料から珪藻化石や海綿骨針が検出される。

以下に、各地点での産状を述べる。

・3区 ①

新水田層 A 試料では、イネ属の産出が目立つ。その含量は、短細胞珪酸体が30,100個/g、機動細胞珪酸体が21,500個/gである。珪化組織片も検出され、初級(穎)珪酸体や葉部の短細胞列が見られ、その中では短細胞列が多い。またコムギ連も短細胞珪酸体が5,700個/gと多く、珪化組織片の穎珪酸体も多く検出される。この他にタケ亜科、ヨシ属、ススキ属、シバ属、イチゴツナギ亜科、分類群が判別できない不明が見られる。タケ亜科にはクマザサ属も認められる。

I 層 B 試料では、新水田層 A 試料と同様な分類群が見られるが、イネ属やコムギ連が減少し、タケ亜科が目立つ。珪化組織片では、イネ属穎珪酸体が多い。また、コブナグサ属も見られる。イネ科以外の草本類として、カヤツリグサ科も検出される。

II 層 旧水田層 C 試料では、イネ属が産出するものの、タケ亜科の産出が目立つ。コムギ連は産出しない。新水田層 A 試料や I 層 B 試料と同様な分類群が見られるものの、シバ属が検出されない。タケ亜科には、クマザサ属やメダケ属も見られる。

・3区 ②

新水田層 A 試料ではイネ属の産出が目立ち、短細胞珪酸体が42,200個/g、機動細胞珪酸体が26,500個/gである。珪化組織片として、穎珪酸体や短細胞列が多く検出される。またコムギ連も短細胞珪酸体が9,200個/gと多く、珪化組織片の穎珪酸体もイネ属とともに多い。この他にタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属、ススキ属、シバ属、イチゴツナギ亜科、不明が見られる。イネ科以外の草本類として、カヤツリグサ科も検出される。

I 層 B 試料でも、新水田層 A 試料と同様にイネ属やコムギ連が産出するものの、いずれも減少する。検出される分類群は同様であり、この中ではイネ属とタケ亜科の産出が目立つ。

II 層 旧水田層 C 試料でもイネ属が産出するものの、I 層 B 試料よりも減少する。コムギ連は、産出しない。分類群は同様であり、イネ属とタケ亜科の産出が目立つ。

・3区 ③

新水田層 A 試料では、イネ属の産出が目立つ。他の2つの区域(3区①や②)と比較して含量は少なく、短細胞珪酸体が16,700個/g、機動細胞珪酸体が10,600個/gである。珪化組織片として、穎珪酸体や短細胞列が多く検出される。またコムギ連も短細胞珪酸体も産出するが、他の2つの区域と比較して少なくなり、800個/gである。珪化組織片の穎珪酸体はイネ属とともに多い。この他にタケ亜科、ヨシ属、ススキ属、シバ属、イチゴツナギ亜科、不明が見られる。イネ科以外の草本類として、カヤツリグサ科も検出される。

I 層 B 試料では、3区②の新水田層 A 試料と同様にイネ属やコムギ連が産出するものの、いずれも減少する。検出される分類群は同様であり、この中ではイネ属とタケ亜科の産出が目立つ。

II 層 旧水田層 C 試料でもイネ属が産出するものの、I 層 B 試料よりも減少する。コムギ連は、穎珪酸体が産出するのみである。分類群は同様であり、イネ属とタケ亜科の産出が目立つ。

・4区 ④

I 層 B 試料では、3区の I 層 B 試料と同様にイネ属やコムギ連が産出する。イネ属の含量は、短細胞珪酸体

が4,000個/g、機動細胞珪酸体が4,600個/g、コムギ連は短細胞珪酸体が400個/gである。これらの珪化組織片も検出される。この他に、タケ亜科、ヨシ属、ススキ属、シバ属、イチゴツナギ亜科、不明が見られ、イネ属とタケ亜科の産出が目立つ。イネ科以外の草本類として、カヤツリグサ科も検出される。

Ⅱ層 旧水田層 C試料では、イネ属が産出するものの、Ⅰ層 B試料よりも少ない。また珪化組織片が検出されない。コムギ連も産出しない。分類群数と含量も少なくなり、タケ亜科、ヨシ属、ススキ属などが見られ、タケ亜科の産出が目立つ。

・4区 ⑤

Ⅰ層 B試料では、4区 ④の試料と同様にイネ属やコムギ連が産出する。ただし、イネ属の含量は少なく、短細胞珪酸体が700個/g、機動細胞珪酸体が1,600個/g、コムギ連は短細胞珪酸体が300個/gである。これらの珪化組織片が検出される。この他に、タケ亜科、ヨシ属、ススキ属、シバ属、イチゴツナギ亜科、不明が見られ、タケ亜科の産出が目立つ。イネ科以外の草本類として、カヤツリグサ科も検出される。

Ⅱ層 旧水田層 C試料では、イネ属が産出するものの、Ⅰ層 B試料よりも少ない。また珪化組織片も検出されない。コムギ連も産出しない。4区 ④のⅡ層 旧水田層 C試料と同様に分類群数と含量も少なくなり、タケ亜科の産出が目立つ。

4.考察

(1) 調査区での稲作

3区と4区に見られた土層からは、各試料で植物珪酸体が検出され、層的に産状の違いが見られた。

このうち、下位のⅡ層 旧水田層Cでイネ属が産出した。その含量は概して少なく、短細胞珪酸体が300~1,100個/g、機動細胞珪酸体が400~3,200個/gと、バラツキが見られた。安定した稲作が行われた水田跡の土壌では、栽培されていたイネ属の植物珪酸体が土壌中に蓄積され、植物珪酸体含量(植物珪酸体密度)が高くなる。水田跡(稲作跡)の検証や探索を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(機動細胞由来)が試料1g当たり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われた可能性が高いと判断されている(杉山2000)。また群馬県内の例では3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例も有る(株式会社古環境研究所2007)。これらの事例と比較すれば、3区 ③のⅡ層 旧水田層Cでは稲作の可能性を示す結果と言える。他の地点については機動細胞珪酸体の含量が少なく、稲作の行われた可能性を積極的に支持することが難しい。ただし、土層の上面には畦跡が検出され、土層内には湛水と漏水を繰り返す陸水型の水田層に見られることの多いマンガンの沈着が認められている。また堆積速度が速いこと、稲作の期間が短いあるいは規模が小さいことなどの要因でイネ属が蓄積しにくい状態にあった可能性も考えられる。これらの点を考慮すれば、旧水田層での稲作も否定できない。この点については今後さらに、花粉化石や種実の産状も考慮して検討する必要がある。

上位のⅠ層Bは、発掘調査所見から洪水層とされ、その形成の際に下位層の上面に構築されていた畦畔を削平した可能性が指摘されている。各地点の土壌試料からは、イネ属が産出した。その含量は概して多く、短細胞珪酸体が700~4,400個/g、機動細胞珪酸体が1,600~4,600個/gであり、前述の調査例と比較しても同等な試料が多かった。この層での稲作の可能性も否定できないが、周囲の稲作地から流入した可能性も考えられる。この点は、珪酸化石の産状から堆積環境を推定することで、イネ属の由来を検討することができると思われる。また、栽培種を含むコムギ連の短細胞珪酸体や穎珪酸体も認められた。コムギ連が栽培種に由来するとすれば、周辺でのムギ栽培の可能性も考えられる。

3区で見られた新水田層Aでは、イネ属の含量が短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体でそれぞれ1万~数万個/gと非常に多い。前述の調査例と比較しても極めて多いと言える。植物体由来による珪化組織片も多く、稲初や稲葉が埋積していたことを示唆する。またコムギ連の短細胞珪酸体や穎珪酸体も多く産出した。これらの産状を考慮すれば、この土層では稲作やムギ栽培が行われた可能性、敷き藁や肥料など何らかの形でイネやムギの植物体を利用された可能性が考えられる。この点についても今後さらに、花粉化石や種実の産状を考慮して検討すること

が望まれる。

(2) 植生

区域3や区域4の試料で検出された分類群より、Ⅱ層 旧水田層 CからⅠ層 Bの形成された頃にはタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属、ススキ属、イチゴツリグサ科などのイネ科植物が生育していたと考えられる。タケ亜科には、林床や縁辺部に生育するクマザサ属や草原などの開けた場所に生育することの多いメダケ属が見られ、周辺や後背山地での生育がうかがえる。またイネ科以外にも草本類としてカヤツリグサ科が見られたと思われる。タケ亜科やススキ属には開けて乾いた場所に生育する種類が多く、ヨシ属やコブナグサ属、カヤツリグサ科は湿潤な場所に生育することから、調査区の周辺には乾いた場所や

水の影響を受けた場所が存在したことがうかがえる。ただし、ヨシ属やコブナグサ属、カヤツリグサ科などの湿潤の状態を反映する要素は少なく、また層位的にも空間的にもバラツキが見られ、時期や地点によって変化した可能性がある。Ⅰ層 Bの頃にはシバ属も生育するようになったと考えられる。区域3の新水田層 AでもⅠ層 Bの頃と同様な分類群が見られ、引き続きイネ科植物が生育していたと推定される。この点については今後さらに、花粉化石などの産状を含めて周辺の草本植生に関する情報を得て検討したい。

なお、各試料から海綿骨針も検出された。周辺地質では調査区の東方に海岸・砂丘堆積物が分布しており、調査区周辺にも影響があった可能性があるものの、上流域の堆積物から由来する可能性も否定できず、今後さらに堆積物や珪酸化石の産状を含めて検討したい。

引用文献

株式会社古環境研究所2007「付編 石関西田遺跡Ⅲの自然科学分析」『石関西田遺跡Ⅲ 市道00-061号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』、前橋市埋蔵文化財発掘調査団、7p。

近藤鎌三2010『プラント・オパール図譜』、北海道大学出版会、387p。

中津市教育委員会2008「沖代地区条里跡」『沖代地区条里跡長畑地区・橋爪地区・桜木地区 加来加来原地区 田尻新貝地区 長者屋敷遺跡 中津城(Ⅶ)1』中津市文化財調査報告45、26p。

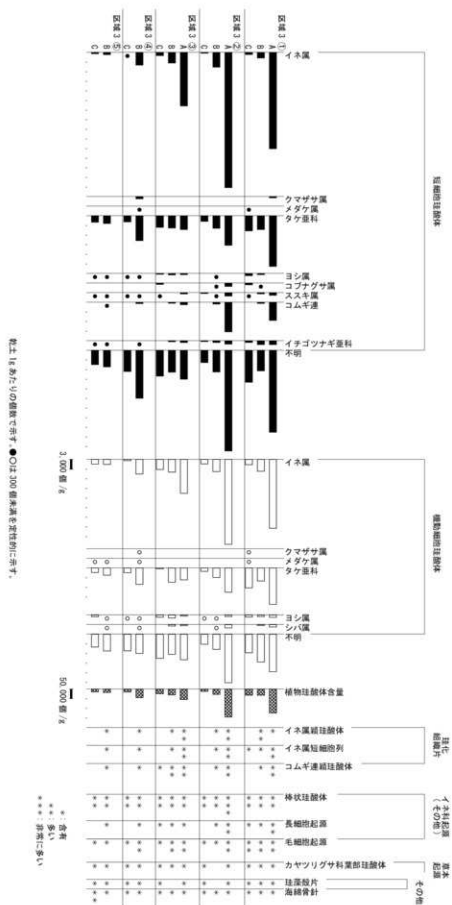
杉山真二2000「植物珪酸体(プラント・オパール)」『考古学と自然科学3 考古学と植物学』(辻誠一郎編)、同成社、189-213。

第14表 分析資料一覧

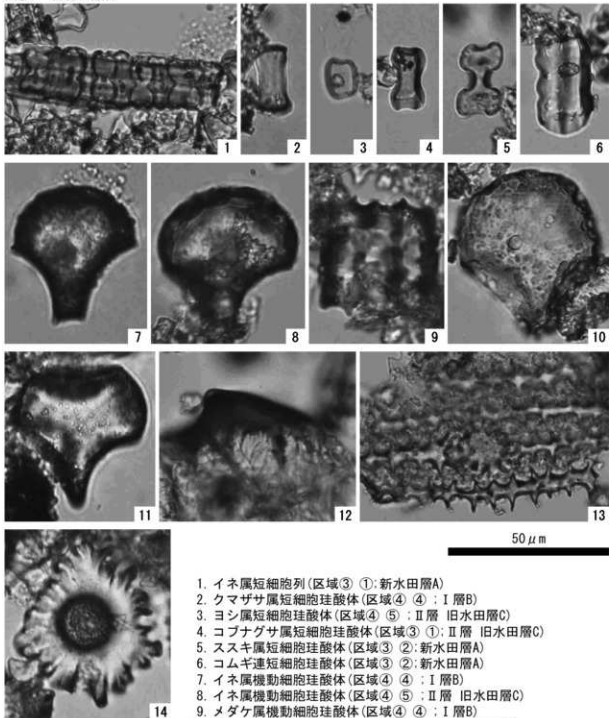
調査区	採取箇所	層序	備考
3区	①	新水田層 A	土層 2
		Ⅰ層 B	土層 4
		Ⅱ層 旧水田層 C	土層 5
	②	新水田層 A	土層 2
		Ⅰ層 B	土層 4
		Ⅱ層 旧水田層 C	土層 5
	③	新水田層 A	土層 2
		Ⅰ層 B	土層 4
		Ⅱ層 旧水田層 C	土層 5
4区	④	Ⅰ層 B	土層 3
		Ⅱ層 旧水田層 C	土層 4
	⑤	Ⅰ層 B	土層 3
		Ⅱ層 旧水田層 C	土層 4

第15表 植物珪酸体含量

分類群	3区①			3区②			3区③			4区④		4区⑤	
	新水田層	I層	II層	新水田層	I層	II層	新水田層	I層	II層	I層	II層	I層	II層
	A	B	目水田層C	A	B	目水田層C	A	B	目水田層C	B	目水田層C	B	目水田層C
イネ科葉部短細胞珪酸体													
イネ属	30,100	1,800	700	42,200	4,700	300	16,700	3,300	1,100	4,000	300	700	400
クマザサ属	400	-	-	-	-	-	-	-	-	700	-	-	-
メダケ属	-	-	100	-	-	-	-	-	-	100	-	-	-
タケ亜科	15,800	4,300	4,700	9,200	4,000	1,700	4,300	3,800	3,600	7,800	1,900	2,400	2,000
ヨシ属	-	400	700	-	100	-	400	500	300	300	300	300	300
コブナグサ属	-	200	600	1,100	100	-	-	-	500	-	-	-	-
ススキ属	800	400	300	1,100	300	300	400	-	200	300	100	100	300
コムギ連	5,700	400	-	9,200	600	-	800	300	-	400	-	300	-
イチゴツナギ亜科	1,200	1,300	600	1,100	600	300	600	300	-	300	-	100	100
不明	25,600	6,400	10,000	31,400	6,800	3,800	9,000	6,800	8,100	15,000	6,600	5,200	4,500
イネ科葉身機動細胞珪酸体													
イネ属	21,500	3,800	1,700	26,500	3,800	1,400	10,600	4,000	3,200	4,600	400	1,600	1,400
クマザサ属	-	-	300	-	-	-	-	-	-	100	-	-	-
メダケ属	-	-	100	-	-	-	-	-	-	300	-	100	100
タケ亜科	11,400	4,100	6,200	7,600	3,000	1,100	3,700	4,500	300	5,100	1,500	2,300	1,400
ヨシ属	800	500	700	500	100	200	400	1,000	800	100	300	300	600
シバ属	800	400	-	1,100	100	-	400	500	-	100	-	300	-
不明	11,800	8,800	5,800	15,200	4,800	3,200	8,100	6,300	7,600	6,000	5,200	5,300	4,000
合 計													
イネ科葉部短細胞珪酸体	79,600	15,200	17,700	95,300	17,200	6,400	32,200	15,000	13,800	28,900	9,200	9,100	7,600
イネ科葉身機動細胞珪酸体	46,300	17,600	14,800	50,900	11,800	5,900	23,200	16,300	11,900	16,300	7,400	9,900	7,500
植物珪酸体含量	125,900	32,800	32,500	146,200	29,000	12,300	55,400	31,300	25,700	45,200	16,600	19,000	15,100
珪酸化組織片													
イネ属短珪酸体	*	**	-	**	*	-	**	*	-	*	-	*	-
イネ属短細胞列	**	*	*	**	*	-	**	*	-	*	-	*	-
コムギ連珪酸体	**	*	-	**	*	-	**	**	*	**	*	-	-
イネ科起源（その他）													
棒状珪酸体	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**
長細胞起源	**	*	*	**	*	-	*	*	-	*	-	*	-
毛細胞起源	**	**	**	**	*	*	**	**	**	**	**	*	*
草本起源													
カタギリグサ科葉部珪酸体	-	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
その他													
珪藻殻片	*	-	*	*	-	*	*	-	*	*	*	*	*
海綿骨針	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	**
含量は、10の位で丸めている（100単位にする） 合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている <100：100 個 /g 未満 -：未検出、*：含有、**：多い、***：非常に多い													



図版1 植物珪酸体



1. イネ属短細胞列(区域③ ①:新水田層A)
2. クマザサ属短細胞珪酸体(区域④ ④: I層B)
3. ヨシ属短細胞珪酸体(区域④ ⑤: II層 旧水田層C)
4. コブナグサ属短細胞珪酸体(区域③ ①: II層 旧水田層C)
5. ススキ属短細胞珪酸体(区域③ ②:新水田層A)
6. コムギ連短細胞珪酸体(区域③ ②:新水田層A)
7. イネ属機動細胞珪酸体(区域④ ④: I層B)
8. イネ属機動細胞珪酸体(区域④ ⑤: II層 旧水田層C)
9. メダケ属機動細胞珪酸体(区域④ ④: I層B)
10. ヨシ属機動細胞珪酸体(区域③ ①: II層 旧水田層C)
11. シバ属機動細胞珪酸体(区域③ ①:新水田層A)
12. イネ属穎珪酸体(区域③ ③:新水田層A)
13. コムギ連穎珪酸体(区域③ ①:新水田層A)
14. カヤツリグサ科葉部珪酸体(区域③ ②: II層 旧水田層C)

第 97 図 植物珪酸体

第6章 総括

第1節 土地利用からみた石神城跡と濱田遺跡

石神城跡の発掘調査では、13世紀～近世にかけての遺構や遺物が確認されたものの、明確に「石神城」と関連付けられるような堀や土塁といった城館関連の遺構は確認されず、むしろ一般的な集落の様相を呈していた。本節では、明治時代に調製された地籍図（旧字図）をもとに、石神城跡・濱田遺跡一帯の字や土地利用を示す地目から、両遺跡について検討を行う。

石神城跡・濱田遺跡一帯の字図を第96図に示す。明治時代の測量技術に基づき作図されたものであり、技術的な限界があること、鉄道や道路建設、宅地造成等の後世の分筆や地目の変更による加筆で当初の境界や地目が分からない所や、地籍図の汚損により地目の判読が困難な箇所が見られるなど、正確性を欠く部分があるので参考程度のものであるが、可能な限り当初の境界や地目を読み取っての作成を心掛けた。

まず小字名をみると、石神城跡は字「屋敷」、濱田遺跡は字「濱田」にあることが分かる。「屋敷」は城館に関連する地名であるが、発掘調査では城館関連の遺構は見られなかったことは再三触れてきた。「堀田」の字もあるが、石神城跡の範囲からは外れている。

次に地目をみると、宅地は字「屋敷」を中心に分布している。また、畑地も字「屋敷」とその西隣の字「西崎」に分布が認められる。畑地は水掛かりの及ばない微高地に分布するため、「屋敷」と「西崎」のふたつの字が、微高地となっていることが読み取れる。すなわち、石神城はこうした微高地上に築かれた城館であると分かる。そして、字「屋敷」であることを勘案すると、城郭というよりは館と考えた方がよいだろう。小地域を治めた武士の居館であるので、方半町（1辺約50m）程度の方形居館となろう。

では、石神城がどこにあったかが問題となるが、これについては手掛かりが乏しい。地目の中で城館を開闢する土塁は地目が「山林」に、堀跡は「水田」となっていることが多いが、図中で山林は1筆しか確認できない。また、水田も乏しく方形に区画された地筆の特定も困難である。

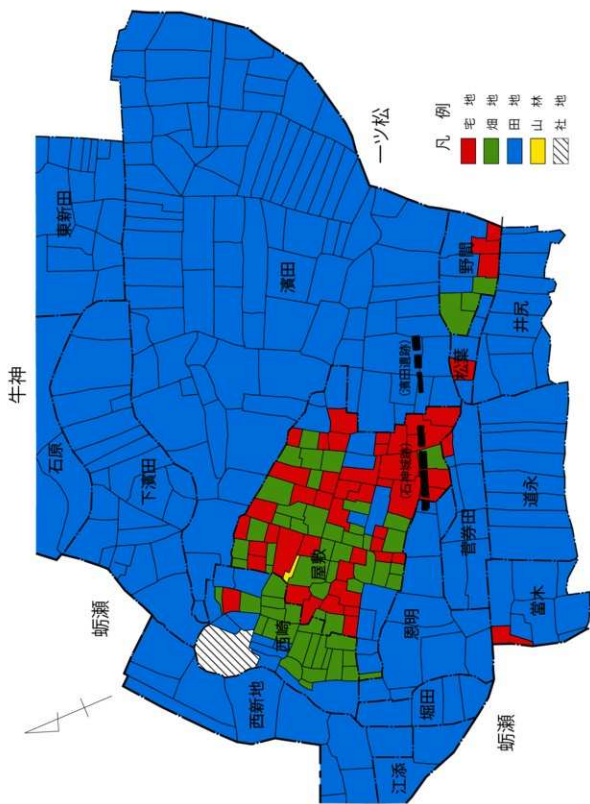
なお、石神城跡の1区の北側には浄土真宗寺院の瑞雲山正明寺がある。現在の正明寺は延宝5年の再建であるが、寺院は南北朝時代頃の創建とされ、時期的には今回調査した石神城跡の年代に近い。寺院も集落の中核となる施設であることから、この正明寺の近くのどこかにあった可能性も考えられよう。いずれにしても石神城は字「屋敷」のどこかにあったとみるべきであり、現状では今後の発掘調査に委ねるより他にない。

次に濱田遺跡であるが、こちらはほぼ地目が水田となっている。石神城の築かれた微高地の周囲は水田が広がっており、これら水田の開発時期が問題となろう。濱田遺跡では中世、13世紀以降に開発されたとみられる水田遺構を確認しているが、これがどこまで広がるかは現状では明らかにできない。少なくとも字「濱田」の北の字「東新田」や、微高地西側の字「西新地」といった地名は、近世以降の開発によるものとみてよい。ただ、第2章でも触れたとおり牛牛～つ松一帯の浜提は旧海岸線に想定されており、石神城のある微高地がこの浜提であるなら、そのすぐ先は海岸ということになり、字濱田の全体が中世に開発されたとは考えにくい。沖代地区条里の開発が県道中津吉富線を北限とするのもこうした地理的要因によるものとするならば、中世における濱田遺跡の開発は極めて限定的とみる方が現実的であろう。

第2節 石神城跡と濱田遺跡の関連性

次に石神城跡と濱田遺跡の関連性を検討する。

石神城跡では13世紀～近世にかけての遺構を検出しており、字「屋敷」内の集落の一端を明らかにしたといえる。開始時期を示す遺構としてはSK1023やSD2008があり、Ⅱ型式に比定される壘前型瓦器碗の出土から13世紀代に位置付けられる。おそらくこの時期に、新興勢力の武士層が微高地上に館を構え、その周囲に集落が展開したのであろう。14世紀にはSK1022やSE1019が構築され、15世紀末には大内系白色土師器皿の出土したSK2021、16世紀後半にはSD1001・SD1002・SD1021が作られる。近世では2～3区を中心に17～18世紀の遺構が展開し



第 98 図 石神城跡・清田道跡周辺の土地利用図

ている。

一方、濱田遺跡でも、中世水田層からⅠb型式～Ⅱ型式に比定される豊前型瓦器碗が出土している。遺物も13～14世紀頃のもの比較的多く出土しており、少なくとも13世紀代には水田開発が行われたものとみてよい。その後、14～16世紀の遺物を含んでおり、16世紀まで継続して営まれたものとみられる。水田の下限年代であるが、濱田遺跡の中世水田は洪水砂によって被覆されており、洪水によって廃絶したことが分かる。その時期は第4章第6節で述べたとおり17世紀前半頃とみている。この洪水砂の上には水田層がみられ、これが明治の地籍図にあった水田のもので、洪水の後に新たに土を盛って水田を復興している。

以上のように、石神城跡と濱田遺跡はほぼ共通した年代で展開しており、近接する両遺跡は密接な関係を有していたとみるべきである。石神城に拠った武士勢力が13世紀代に居館を構え、東側の沖積低地に新たに水田を開発したのであろう。石神城の廃絶時期は不明であるが、地籍図でも城館の痕跡が追えないほどであるので、それほど長く継続したとも考えにくい。少なくとも14世紀頃には字「屋敷」を中心に集村化して集落となっている可能性が高く、発掘調査で確認した遺構もこうした集落を構成するものである。そして、その間も濱田遺跡はこの集落の生産域として機能し続け、近世まで継続するのである。

石神城跡の発掘調査はこれが初めてであり、これまで実態が不明であった城館の解明に一步踏み出した段階である。調査で得られた情報は必ずしも多くはないが、こうした調査の積み重ねによって、遺跡の実態解明に繋がること期待したい。また、濱田遺跡の発見は、城館・集落とその生産域の関係を示し得たものとして重要である。こちらもまだ部分的な調査で全様の解明にはほど遠いが、こちらも今後の調査研究の進展によって、両遺跡の関係を含めてさらなる解明がなされることを期待して、総括としたい。

石神城跡・濱田遺跡図版

図版 1～12 石神城跡

図版 13～16 濱田遺跡



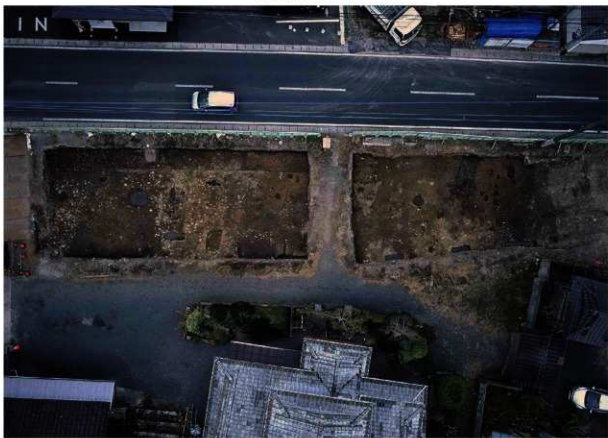
石神城跡空撮（東から）



石神城跡空撮（南から）



石神城跡1区全景



石神城跡2区全景



1区西調査区完掘（東から）



1区東調査区完掘（西から）



1区西側調査区遺構検出状況



SK1003 漆器椀出土状況



SK1003



SK1020



SK1022



SK1023



SD1001



SD1002



SD1002 土層断面



SD1002 遺物出土状況



SD1002 木製品出土状況



SD1021



SD1021 土層断面



SD1021 下駄出土状況



SD1021 漆器椀出土状況



SD1021 曲物底板出土状況



SD1021 土錘出土状況



SE1019 土層断面及び遺物出土状況



SE1019



SP1028



1 区東調査区全景（東から）



2区西側調査区全景（東から）



2区東側調査区全景（西から）



SK2001



SK2015



SK2020



SK2021



SK2022



SK2022 下駄出土状況



SE2010 井戸枠内遺物出土状況



SE2010 井戸枠検出状況



3区全景 (西から)



3区北壁土層断面



3区北壁土層断面



SK3002



SK3016



第 8 图 14



第 9 图 23



第 9 图 25



第 9 图 26



第 14 图 30



第 14 图 31



第 14 图 34



第 14 图 33



第 14 图 41



第 16 图 42



第 18 图 46



第 21 图 47



第 23 图 65



第 23 图 68



第 25 图 84



第 25 图 73



第 25 图 78



第 25 图 88



第 30 图 120



第 30 图 125



第 32 图 135



第 36 图 147



第 36 图 148



第 38 图 154



第 38 图 155



第 38 图 150



第 38 图 149



第 38 图 151



第 42 图 160



第 44 图 167



第 44 图 161



第 44 图 162



第 46 图 169



第 46 图 171



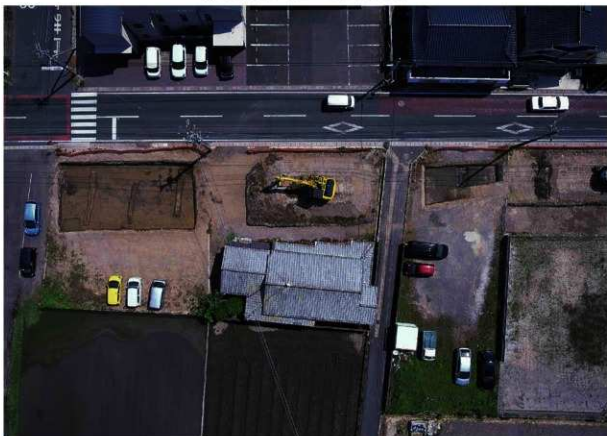
第 54 图 181



第 63 图 207



濱田遺跡全景（1区・3区、南東から）



濱田遺跡全景（2区・4区）



3区全景



3区 SL2・SN5・SN 6



3区 SL3・SN6・SN7



3区土層断面



4区全景



4区 SL9・SN12・SN13



4区 SL11・SN14・SN15



2区 SD16



第 81 图 221



第 81 图 218



第 81 图 220



第 85 图 222



第 88 图 223



第 88 图 224



第 88 图 225



第 88 图 227



第 88 图 229



第 88 图 230



第 88 图 231



第 88 图 234



第 89 图 236



第 89 图 237



第 89 图 238



第 89 图 239



第 89 图 241



第 89 图 244



第 89 图 245



第 89 图 246



第 92 图 247



第 92 图 248



第 92 图 250



第 92 图 262



第 92 图 253



第 92 图 251



第 92 图 261



第 92 图 263



第 93 图 268

報 告 書 抄 録

ふりがな	いしがみじょうあと・はまだいせき
書名	石神城跡・濱田遺跡
副書名	都市計画道路外馬場踏矢堂線街路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第24集
編著者名	横澤 悠、バリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	大分県立埋蔵文化財センター
所在地	〒870-0152 大分市牧嶺町1番61号 TEL 097-552-0077
発行年月日	西暦 2023年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いしがみじょうあと 石神城跡	いしがみじょうあと 中津市大字牛神	44203	203009	33° 35' 50"	131° 12' 1"	2020.11.19 ～ 2021.2.2	682㎡	都市計画道路外馬場踏矢堂線街路改良事業
はまだいせき 濱田遺跡	いしがみじょうあと 中津市大字牛神	44203	203303	33° 35' 47"	131° 12' 10"	2021.4.21 ～ 2021.6.11	352㎡	都市計画道路外馬場踏矢堂線街路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石神城跡	城館	中世～近世	土坑、溝、井戸、ピット	土師器、瓦質土器、陶磁器、瓦、木製品	
濱田遺跡	水田	中世	水田畦野、水田溜、溝	土師器、瓦質土器、青磁、白磁、陶磁器、瓦、石龜、石製品	

要 約	<p>石神城跡及び濱田遺跡の発掘調査は、都市計画道路外馬場踏矢堂線街路改良事業に伴い実施した。石神城跡は小畑氏の城館とも伝わるが、地表面で確認できる遺構はない。発掘調査では中世～近世にかけての土坑、溝、井戸、柱穴等を検出した。いずれも集落的な様相を示すもので、明確に中世城館と関連付けられるものは確認されていない。出土遺物から、遺跡の年代は13世紀～16世紀、近世で、中世村落が集積し城館化したものとみられ、廃城後は近世集落として継続したものとみられる。</p> <p>濱田遺跡では、近世の洪水砂層に被覆された中世の水田畦野6条と、これらに区画される8区画の水田を検出した。出土遺物から15～16世紀を中心とした遺跡とみられる。</p>
-----	--

石神城跡 濱田遺跡

都市計画道路外馬場鋪矢堂線街路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

大分県立埋蔵文化財センター調査報告書 第24集

令和5(2023)年3月31日

編集・発行 大分県立埋蔵文化財センター
〒870-0152 大分市牧緑町1-61
TEL 097(552)0077

印刷 明治印刷株式会社
〒872-0001 大分県宇佐市大字長洲607
TEL 0978(38)0135 FAX 0978(38)3268
